
P4 花村とクローバー ~人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった...、夏~

霧紙子

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P4 花村とクローバー ～人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった…、夏～

【Nコード】

N2433H

【作者名】

霧紙子

【あらすじ】

PS2ソフト『ペルソナ4』を題材にした暴走ファンフィクション作品、『クライマックス番長』夏の陣。登場するキャラクターのイメージ、特に主人公とキタローについては作者仕様の独断や偏見になっており、カップリング的な要素も含んでおり、キャラクターを中傷、貶める表現もあり、気分を害されると思われる描写や表現があります。以上を理解された上、作者をテレビの中に突き落とさない、タルタロスに放置しないと約束出来る方向でお願いします。

オープニング編（前書き）

ドラマCDが出て燃料投下したので…、また再スタート…。ちょうど、時期が夏期なので、夏をテーマにしております。クライマックス番長と同様、テレビに作者を突き落とさないという約束出来る方のみお進み下さい…。

オープニング編

原作

『ペルソナ4』など

制作

『小説家になろう』

八十稲葉市教育委員会

脚本

霧紙子

提供

ジュネス

主演

ペルソナ4主人公

2011年某月某日(月)

晴れ

放課後

「やっほー！海だぜー！！」

真っ白な砂の上と太陽の下で、水着姿の陽介 が雄叫びを上げた。

花村陽介：原作ゲームの準主役的立場であり、ジュネスの象徴であり、本ファンフィクションにおいて、なくてはならないツッコミ、解説、被害者役。なお、他人の地雷を踏みやすいことで有名。ペルソナが『ジライヤ』なだけに。

「夏といえば、やっぱり海よねー！」

千枝 も水着姿で、片手にビフテキ串を持ちつつ、開放的に両手を広げた。

里中千枝：原作ゲームのメインヒロインであり、プディングより肉が好きというカンフーマニア。『肉はあなたを裏切らない』という名言を世に残した。本ファンフィクションにおいて、ツッコミ役であるが肉に関わると制御不能の暴走する。

「もうみんな、ハシヤギすぎー」

雪子 1も水着姿で、リボンシトロン 2を片手に青空を見つめた。

1天城雪子：原作ゲームのもう一人のヒロインであり、爆笑大魔王であり、女子高生女将。本ファンフィクションにおいて、ヒロイ

ンらしい立ち回りが多いが、主人公ですら対処出来ない数々のボケや状況を作り上げた。

2リボンシトロン：地方限定の飲料水。SPが10回復する。余談だが、架空の飲み物だと思っただけのため、近くのスーパーにこれが普通に売られていてビックリした（作者談）

「なんで、俺はふんどしツスカ…」

完二 は自分だけ、ふんどしなのを気にした。

巽完二：暴走族を潰したなどの様々な武勇伝を持つ、手芸や裁縫が好きなヤンキー風オトメン少年。本ファンフィクションにおいて、陽介の次に悲惨な目にあっている。なお、原作ゲームのマヨナカレビのインパクトが強すぎて、ウホウホネタとふんどしに縁があり、余談だがパッケージイラスト以外で、プロモ、特典イラストの中でメンバー中、唯一ハブられていた本当に不憫なキャラクターである（設定資料集参照）

「みんなー！バレーやる！」

りせ が水着姿でビーチボールを持って現れた。

久慈川りせ：原作ゲームのもう一人のヒロインであり、戦闘ナビゲーターであり、豆腐屋であり、無理するのも我慢するのも、りせには無理、しんどすぎな世の中の的にリアリなアイドル。本ファンフィクションにおいて、主人公にデレデレではあるものの、何故か、主人公を罵ること多い。

「真つ白な砂…、降り注ぐ紫外線…、着慣れない水着がポロリして…、夏…」

着ぐるみを脱ぎ、水着姿になったクマ はわけのわからないことを言った。

クマ：原作ゲームにおいて、初代ナビゲーターかつ、マスコット兼ヒロイン(?)をこなす謎のキャラクター。その純粹無垢な性格とネタにしやすい要素がたくさんではあるが、メンバー中、一人だけ学生じゃないという設定から、本ファンフィクション中、一番出番が割愛され気味になっている。余談だが、『すごいよ！マサルさん』のめそを思い出すのは私だけであろうか？

「よし！バレーやろうぜ！相棒！」

と陽介がパラソルの下で、サングラスをして太陽を睨む自分に言った。

自分はサングラスを外し、アロハシャツ姿でパラソルから出た。

自分(ペルソナ4主人公)：その名の通り、主人公。本名不明。クールなカリスマ系タフガイ。自称特別捜査隊メンバーのリーダー。プレイヤーの操作によって動くキャラクターのため、本ファンフィクションにおいて、一番、跡形なく暴走している。特殊な設定が多いため、いろいろチートがかっている。独特な雰囲気と多種多芸で小粋なアメリカンジョークを得意としており、女性キャラどころか、男性キャラの心まで奪い去る。いろんな女性(男性?)キャラとフ

ラグが立っているが、従妹の菜々子を溺愛どころのレベルじゃないくらい愛している。口癖は、落ち着け、そつとしておこう、！？など。

「…」

皆、開放的に夏を楽しんでいるというのに、直斗 だけ制服姿で呆然としている。

白鐘直斗：原作ゲームにおいて、主人公のライバルキャラかと思ったら、そんなことはなかったぜ！！な少年探偵。実は（原作ゲーム後半参照）だったとの離れ業を為した。本ファンフィクション中、唯一ブレないツツコミ役である。しかし、上記の設定のため、男子女子両方から弄られやすく、打たれ弱いため、もしかしたら、メンバー中、一番気苦労が多いかもしれない。余談だが、本ファンフィクション中、完二に次いでガンダムネタが多い。

7

「どうした、直斗ー？なんで、お前だけ制服だよー」
「そうだよー、せつかく、海に来たのにー」

制服姿の直斗を見て、陽介、千枝がそう言う。

「完二、直斗の水着見れなくて、ガツカリしてるよー」
「ちよっ！バカ！てめっ！」

りせが完二をからかっている。

「あとは、シールドだけね…」

「そうクマね」

「って、雪子にクマ君、なに作ってんの!？」

千枝は、雪子とクマが砂だけを使って作った等身大ガンダムを見て驚いていた…。

2009年夏のお台場にあつた等身大ガンダムに負けないクオリティだ。

自分は直斗に近寄り、どうした? 顔色が優れないぞ? と直斗に言った。

寛容力が高まった。

すると…。

「あの…」

直斗はモジモジしながら、口を開いた。

「学校のグラウンドで、なにやってるんですか…」

陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマ、自分が黙った…。

直斗が言っではいけないことを言ってしまった…。
そうだ…、ここは海ではなく…、学校のグラウンド…。
しかも、陸上部が使う砂の上…。
部活中の生徒達や教師達から変な視線を受け取った…。
陽介が口を開いた…。

「海に行きたかったんだよ…」

皆、愕然とした。

ファンフィクション作品『P4 クライマックス番長 part 2
花村とクローバー』人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった…、
夏』

この作品は、PS2ソフト『ペルソナ4』を題材にしたファンフィクション作品であり、実際のゲームや公式サイドとは、まったく関係ありません。確かに関係ないけど、とりあえず、追加でディスク出してくださいと願っている非公式ファンフィクション作品です。

START

夜

誰も居なくなつた学校のグラウンドに、雪子とクマが砂だけで作
つた等身大ガンダムが残された…。

オープニング編（後書き）

クライマックス番長、連載終了したにも関わらず、たくさんのアクセスありがとうございます。今後も、よろしく願いします…。

罪と罰編（ドラマCDネタバレ注意）（前書き）

2009年6月某日に発売されたドラマCDVOLUME1の内容について書かれております…。ネタバレなものと、ドラマCDを聞いたあとの作者の感想が含まれており、作品として成り立ってないため、読みたい人だけで進んで下さい…。

罪と罰編（ドラマCDネタバレ注意）

20011月6月23日（火） 晴れ

夜

…。

今日、時価ネット高田から、なにかの手違いで2年前に発売されたペルソナ4ドラマCD Vol.1が届いた…。

せっかくなので、自室で聞いてみた…。

…。

「あつ、ちよっ！しめてきますー！」

「肉はないのかよ、肉は」

「うるさいな」

「久慈川、てめっ！」

「その計り間違いの胸も解放させてあげなさいよ」

「これからは女の子らしく…」

自称特別捜査隊のメンバーの意外な一面が見えた…。
そして、なにより…。

『そうだね』

『あつ…、ああ…』

『有無を言わず、やらされた…』

『菜々子と俺は家族だよ…』

『そうです…、家族ですよ…』

…。

頭を抱えた…。

この人、カッコいいんですけど…。

このファンフィクション作品で、一番キャラクターをぶっ壊して
る人が、かなりカッコいいんですけど…。

こんな喋り方なのかよ…。

このファンフィクション作品…、めっちゃキャラクターのイメー
ジをぶっ壊してるのを痛感した…。

このファンフィクション作品、かなり主人公のイメージぶっ壊し
てるやん…。

マジで、誰かからテレビ放り込まれそうな気がする…。

…。

なんていうか、ペルソナっていいよね…。

…。

もしかして…、発売微妙に延期した（2009年にAmazon
では、5月発売になっていた）のは、『デステニーシー』を、ゴホ
ン！ゴホン！と言ったせいかな…。

…。

今日はもう休むことにした…。

とにかく、すべてにおいて、じめんなさい…。

罪と罰編（ドラマCDネタバレ注意）（後書き）

キャラクター達が相変わらずだったので楽しかったですし、あまり本編で触れられなかった部分があって、楽しかったです…。あと、主人公がカッコ良すぎです…（浪川さん、最高です）。あと、雪子先輩、なんか怖かったツス…。ファンサービス盛り沢山なので、是非、ドラマCDをオススメします。

ウホツ…、いい番長編

2011年7月某日(日) 晴れ

昼間

今日は、陽介、千枝、雪子、完二、クマ達と探索に行った。時間的な理由で、直斗はまだ仲間になっていない。シャドウが強くなり疲労が半端ではなくなった…。自分、陽介、クマは苦戦をした…。

入り口広場に帰還した。

自分、陽介、クマが息を切らして倒れた…。

自分は全身筋肉痛で、ガクブル状態だ…。

「やぶえ…、筋肉痛で身体が動かねえ…」

「クマも…」

陽介、クマも身体中が筋肉痛になっている。

「先輩達…、大丈夫…」

「どうしよう…。回復技だけじゃあ、筋肉痛までフォロー出来ないし…」

りせと雪子が筋肉痛に苦しむ自分達を心配してくれた。ちなみに、金銭的な理由でキツネには頼れない。

「なっさけないなー、あんたらー」

「最近、だらしねえッスよ、先輩方ー」

と涼しい顔で千枝、完二が筋肉痛に苦しむ自分達を笑った。

「んだと！？里中、完二！いだっ！」

そんな二人にカチン！と来た陽介は立ち上がったが、筋肉痛でまた倒れた。

すると、千枝が笑いながら…。

「ほらあ！あたしはちゃんと、毎日鍛えてるから、この程度じゃへばらないしー。里中千枝！毎日、鍛えてます！なんてねー」

とカンフーの構えをした。

完二は片腕を曲げ、筋肉アピールをした。

かなりモリモリしている…。

「へっ、見てください！この筋肉…。伊達に族潰しじゃないッスよ！」

筋肉アピールする完二の姿を見て、嫌なビジョン（山 純一作品集『ウホツ…、いい たち』、ガムチパ ッレスリング参照）が頭に浮かんだ…。

「じゃあ、雪子行こっか」

「じゃあ、お疲れッス」

千枝、完二が笑いながら、テレビから出て行った。雪子も千枝に連れられてテレビから出た。

千枝、完二の後ろ姿を悔しそうに陽介、クマは見つめる。

「くそう、体育会系め！」

「カンジは、公園に行くか、パンツレスリングでもしてればいいクマよー!!」

りせの肩を借りて、自分は立ち上がった…。

そういえば、確かに、自分はゲームのステータスでHPが千枝、完二に負けている…。

しかも、今は夏…。

こんなだらしのない身体で街を歩いたら、よくありがちな展開で人から笑われてしまう…。

以下、よくありがちな展開の例。

「ヘイ! ダアニー、なんだい、なんだい…、まるでゴボウじゃないかー」

「おいおい…、ジョヨイ…。そんなことより、せつかく、焼いたパイが台無しだよ。誰だよ、こんなところに、スニーカー置いたのー」

「あつ、ごめん…。それ、僕んだわ…」

「ねえ、パパ。ジェエーシーおいたん、見なかった？」

脳内で海外ドラマを再生しながら、自分は拳を握り締めた。

こんなだらしのない身体とは、お別れしよう…と誓った。

翌日(月)

今日は夏休みを利用して、トレーニングジムで筋肉トレーニングをした。

根気が高まった。

さらに翌日（火）

今日も、トレーニングジムで筋肉トレーニングをした。

根気が高まった。

夜、ジョッキに割った卵を十個ぐらい入れて飲んだ…。

その次の日、次の次の日も、さらに次の次の日も、トレーニングジムで筋肉トレーニングをした。

かなり根気と筋肉がついてきた…。

そして…。

1週間後の火曜日 曇り

昼間

ジュネスから、足立刑事が買い物袋を持って出てきた。買い物袋にはキャベツがいっぱい入っていた。

「またキャベツ安かったから、いっぱい買ったよ…。キャベツ嫌いなのに…」

とため息を吐いていると…。

「ん？」

安立刑事の目の前に、上半身裸でスパッツの筋肉ムキムキな原哲夫先生が描いたような絵柄の男が現れた。

「うわ！なんだ！？」

「やあ…！安立さん…、と原哲夫風の男が安立に挨拶をした…。」

「えっ！その声…、まさか、君…、堂島さんとこの！？なにがあったの！？」

安立刑事は愕然とした。

なんと、原哲夫風の男は、筋肉トレーニングに成功してムキムキマッスルになった自分だった。

「やあ…、どうだい…、みてごらんよ…、この筋肉…、と安立刑事の目の前で、丸太のように太い腕の筋肉を見せた。」

「…」

安立刑事は言葉を失っている。

自分は笑いながら、安立刑事の買い物袋からキャベツを取り出した…。

そして…。

パン…！

まるで、ピンポン玉のようにキャベツを片手で握り潰し粉々にした。

このキャベツは、あとで安立刑事が美味しくいただきました。
安立刑事は口を開けたまま、茫然自失した…。

ハハハ！と笑いながら、自分は安立刑事の前から去り、フードコートに向かった。

ジュネスフードコート。

フードコートに集めた陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマに、筋肉を見せた。

ところで、こいつ…、俺の筋肉…。こいつをみてどう思う？と言いながら山川純一風の絵柄になった自分がボディビルダーのようなポーズを決めた。

皆、愕然とした。

「ていうか、誰だよ、お前!!」

「ていうか、キャラまで変わるってるし!!」

「ていうか、絵柄まで変わってるし!!」

「こんなの先輩じゃない!!」

「こんなのセンサーじゃないクマ!!」

陽介、千枝、雪子、りせ、クマがツッコんだ…。

注意：ドラマCD購入後に書きました。

しかし…。

「すごく…、たくましいです…」

完二だけ顔を赤くしながら、自分の筋肉を讚えた。

さて…、菜々子にも、この素晴らしい筋肉を見せねば…、そう思いながら帰宅した。

夜 雨

自宅で菜々子に筋肉を見せた。
すると…。

「おっ…、お兄ちゃん…」

！？

菜々子が怯えた顔をしている。

どうした…？菜々子…？見てごらん…、この筋肉を…。凄いだろ
…、と胸筋をピクピクさせながら言った。

「こんなのお兄ちゃんじゃない！！」

！？

菜々子は泣きながら、寝室に走って行った…。

…。
なにか大切なものを失った気がする…。

翌日（水） 晴れ

昼間

いつもの体型と絵柄に戻った自分は、りせと川原の土手に居た。

「さすがに…、あれはなかったよ…、先輩…」

…。
頭を抱えて、自分は反省した。
誰彼構わずに、筋肉アピールしたことを思い出すと恥ずかしくて仕方なくなり、自分は意気消沈し、うなだれた…。

「先輩…」

そんな自分を見て…、りせは…。

「先輩…！あのね、あたしをテレビから救ってくれたとき…、もう無理なくていい…、って言ってくれたよね…。あの時…、先輩がそう言ってくれて…、あたし、本当に嬉しかったよ…」

と、りせが顔を赤くしながら言った…。

「だから…、先輩…。無理しないでいいって言ってくれた先輩が無理しても、カッコ良くなんかないんだからね…」

りせが自分のことを、かなり心配してくれたようだ…。
…。
わかったよ…、と自分は頷いた。

「うん…。もう無理しないでね…、先輩…」

りせは笑った。

「そうだ！こないだ、りせが先輩の服選んだげるって約束したよね！だから、今日は…」

と言いながら、りせが自分の手を引っ張った。

このあと、りせと一緒に楽しく過ごした。

数週間後…。

雨が降っている…。

ジュネスに向かった…。

すると…。

「やあ…」

自分の目の前に、筋肉ムキムキの板垣恵介先生が描いたような画風のトランク姿の男が現れた。

自分は唾然とした。

すると…。

「僕だよ！僕！ほら、堂島さんに扱き使われている…」

無視して、自分はエレベーターに乗った。

身も心も、おコメになっちまったのかよ！！編

2011年7月某日（水） 晴れ

昼間

ジュネスフードコートで、陽介、りせ、クマと一緒に2009年に発売されたしそ味のペ シを飲んだ。

「ぶっ！」

「ぶはっ！」

「グマッ！」

満場一致で吐いた。

「んじゃあこりゃあ！！コーラつつたら、甘くてシュワシュワで爽やかだろっが！！これくっせえんだよ！しその鼻を突く香りと、そこら辺の葉っぱみたいな味！そして、コーラ特有の炭酸とキツイ甘さがプラスして、吐き気を増幅させてんだよ！！」

陽介が、林間学校以来のぶちギレ具合で言った。

「なんか…、家の裏のにおいする…」

「クマ的にもないクマ…」

りせ、クマは複雑な顔をした…。

自分はなんのメリットがあつて、こんなの作るんだろっ…、と考
えた…。

知識が高まった。
すると…。

「ん？菜々子ちゃんクマー」

！

クマにそう言われ振り返ると、フードコートの入りに菜々子が現れた。

「うつつ…、お兄ちゃん…」

！？

菜々子が泣いている…！

「なっ！どうしたんだよ！菜々子ちゃん！」

「誰かにイジメられたの!？」

「オロロー!」

陽介、りせ、クマが菜々子に駆け寄った。

「うつつ…」

菜々子はひたすらに泣いている…。

ゴトゴトゴト…！

自分は菜々子に近寄り、誰から泣かされたんだい…？と金属バットを握る手につばを吐きながら聞いた。

菜々子は涙を拭いながら話し始めた…。

「お友達の男の子達が…、カブトムシ相撲をやっていたら…、変な男の人が現れて…」

！？

話を聞くと、菜々子の友達がカブトムシ相撲で遊んでいると、変な男のカブトムシが乱入して菜々子の友達のカブトムシをボコボコにしたそうだ…。

それで、菜々子は泣いているのか！

「ちょっと、なにそれ、サイテー！」

「こんなちっちゃい子ども泣かすなんて許せねえ！」

「くうー、頭に来たクマ！ボコボコにしてやるクマ！」

りせ、陽介、クマも怒り心頭になった。

菜々子に、そいつの居る場所を案内しなさい…、と、自分はガイアソードの刃先を舐めながら聞いた…。

菜々子をつれて、みんなで川原に向かった。

土手に、オタクっぽい容姿の男が居た…。

「あつ！あの人だ！」

菜々子が指を差した。

奴が菜々子を…。

「おめえか！カブトムシ相撲で、ちっちゃい子達を泣かしたの！！」

「あやまんなさいよ！」

「そうクマー！謝るクマー！」

陽介、りせ、クマが男を責めた。

「ふん…」

！？

なんと、相手は久保（原作ゲーム参照）を彷彿とさせる感じの根暗そうな男だ。

奴の手にあるヘラクレスカブトは、確か物凄い高価で凄く強い…。菜々子の友達のカブトムシはこれに蹴散らされたのだろう…。

「なんで、子ども達のカブトムシをボコボコにすんだよ！」

「そうよ！サイテー！」

陽介、りせが叫ぶ。

すると、男は…。

「僕はカブトムシ相撲の頂点に立つのが夢でね…。それで、いろいろと高価なカブトムシを大人買いしたものの、どれも僕が求めるカブトムシではなかった…。そんなある日、ジュネスで昨日、この最強のカブトムシ、ヘラクレスカブトが売られており、迷わず購入…。今日は、このヘラクレスカブトの試運転のために、さっきのカブトムシ達には犠牲になってもらった…」

と男は頼んでもいないのに、わかりやすく説明してくれた。

そんな男の説明を聞いた陽介、りせ、クマがどん引きしている…。

（なあ…、こいつ危ないか…）

（久保とは違ったキモさがあるよ…）

（テレビに入ったら、最悪なことになりそうクマ…）

陽介、りせ、クマはヒソヒソ話をした。

自分は、説明してもらってなんだが、早速、土下座をしてもらおう！と叫んだ。

すると…。

「やだね…」

無視された…。

やだね…、で済んだらニューヨークポリスデパートメントはイラネエんだYO!!、とキレながら自分はガイアソードを構えた。

「おい！落ち着け!!！」

陽介が必死に自分を抑えた。

すると…、りせが男を睨んだ…。

「お婆ちゃんが言っていた…」

「えっ、りせちゃん、どうしたクマ？」

りせは右手の人差し指を天に向けた…。

「男の子が絶対にやってはいけないことが二つある…。一つ、食べ物粗末にすること…。もう一つ…、女の子を泣かせること…」

「りせちゃん…、それなんの台詞クマか…？」

ちなみに、さっき、自分達はペシしそを粗末にしてきた。

「わかったわ…、なら、ごうしましよっ…」

「なにをわかったクマか…」

よく解らないが、りせが上手いこと話をまとめ始めた。

「明日、ここで、あたしたちのカブトムシと、あんたのヘラクレスカブトとで、カブトムシ相撲しましょう…。それで、あたしたちが勝ったら、菜々子ちゃんに謝ってもらおう…」

！？

なんと、りせは相手にカブトムシ相撲を申し込んだ。

「いいよ」

男は展開をスムーズに進めたいためか、普通に勝負を受け入れた。こうして、謎のカブトムシマニアとの対決が決まった…。

菜々子を家に帰してから、ジュネスフードコートに戻った。

陽介、りせ、クマと作戦会議をした。

「勝負するのはいいとして…、問題はカブトムシだよ…」

陽介は頭を抱えた。

「どうすんだ？言っとくが、俺んちで売り出してるカブトムシはバカ高えし、今から、どっかで捕まえるにもなあ…」

「ふふふ…、ヨースケ…。心配『ゴム用』クマ」

「『ご無用』な…」

「さつき、ジュネスの倉庫の下に一匹、カブトムシが居たから、捕まえてきたクマよ。かなりすばしかったクマよ」

「倉庫の下に、カブトムシ？」

!?

不安そうな陽介にクマが笑いながら、なにかを着ぐるみから取り出し、テーブルに置いた。

…。

カサカサ…

こ…、れ…、は…。

茶色で…。

カサコソしてて…。

触角が動いている…。

こ…、

い…、

つ…、

は…。

「なかなか、可愛いクマね、このカブトムシ」

クマがそういうと、奴は陽介に脚に着地した。

「これ、ゴブリだ！バああ口おおおあああああ！…！！」

「！」

「きゃあああああ！…！！」

陽介、りせが全力で叫びながら、フードコートから逃げた…。

自分も逃げた…。

しかし、どうする…。

ヘラクレスカブトに対抗できるカブトムシなど、そう簡単に見つからない…。

どつする…。

ゴブリから逃げ回っているうちに、自分は、いつもの家電コーナーに到着した…。

あの大画面テレビがある…。

…。

ん…。

テレビ…。

テレビの中…。

!?

自分の頭の上に、電球が浮かんだ！

携帯で直ぐ様に、千枝、雪子呼び出した。

翌日（木） 晴れ

昼間

陽介、りせ、クマが苦い顔で川原の土手に居た。

昨日のカブトムシマニアはヘラクレスビートルを片手に腕を組んで立っている。

「相棒の奴、遅いな…」

と陽介が時計を睨んだ…。

どうやら、みんな、まだ現れない自分を待っているようだ…。

ドスン！ドスン！！

！？

なにか、すざましい足音がした…。

「なっ、なんだ！！」

みな、この足音の方に首を向けた…。

そこには…。

大型バイク一台くらいのサイズの金色のカブトムシが…。

陽介、りせ、クマ、カブトムシマニアが固まった。

金色と赤がコントラストした大きな大きなカブトムシを、自分が必死に引つ張っている…。

ふっ！待たせたな…、と汗を拭いながら自分は言った。

説明しよう！主人公が連れてきたカブトムシは、テレビの中に生息する敵シヤドウ！

雪子姫の城に出現する打撃攻撃が効かず、序盤で苦戦した方も多いと思われる『熱甲蟲』である…！

なんと主人公は、昨日、千枝、雪子を連れて、この熱甲蟲を捕まえてきたのだ…！

みんなが呆然としている中、これが俺のカブトムシ…、トムキヤツトレッドビ…！！と自分が叫ぼうとした瞬間…。

ガズン…！！

連れてきた熱甲蟲が、自分の背中に突進した。

身も心も、おコメになっちまったのかよ！！編（後書き）

生き物を飼う時は責任を持って育てましょう。ペシシそ味も、最後まで責任を持って飲みましょう。まあ、買わないのがベストです。

目覚めろ！その魂！編（前書き）

今回の話はネタバレが含まれていますので、『生田目を
た』場合は…、今回の話を飛ばしてください。
に

目覚める！その魂！編

2011年某月某日（土） 曇り

昼間

直斗とりせが街中を歩いていると…。

「救うんだ…、俺が救うんだ…」

いきなり生田目が2人の前に現れた。

！？

生田目がりせと直斗に襲い掛かってきた。

「また来たよ…」

「また、あなたですか…」

りせ、直斗が冷静に嫌そうな顔をした。

「頼むよ…、とりあえず、適当に叫んで…」

「仕方ないなあ…」

「わかりましたよ…」

と生田目の頼みを、二人は嫌々承諾した。

「きゃあああ！！助けて！！」

りせが叫んだ。

すると…、誰かの足音が…。

「待てい!!」

と誰かが叫んだ。

「誰だ!? 邪魔をするな!」

生田目が振り返ると、そこには陽介、千枝、雪子、完二、クマ、自分の6人の姿があった。

すると…。

「アカレンジユアイ!!」

と水着を着た陽介がポーズを決めた。
次に、千枝が水着を着て前に出た。

「ミドレンジユアイ!」

と千枝はポーズを決めた。
次に、雪子が水着姿で前に出た。

「モモレンジユアイ!」

と扇を持って、雪子がポーズを決める。
次に、ふんどし姿の完二が…。

「アオレンジユアイ!」

と盾を持ってポーズを決めた。

次に、クマが裸で腰に手ぬぐいを巻いて…。

「キレンジュアイ！クマ！」

とポーズを決め叫んだ。

最後に、自分が裸で腰に手ぬぐいを巻き、ケロリンを片手に前に出た。

仮面ライダーアギト！！と自分は叫んで、ポーズを決めた。
最後に…。

「6人揃って、ジュネス戦隊！」

と陽介が言ったのに続いて、みんなが叫んだ。

「…………ペルソナレンジュアイ！…………」

そして、全員でポーズを決めた。

「…………」

生田目が呆然としている…。

「さあ！早く逃げるんだ！！」

「ありがとう！」

「ありがとうございます！」

と陽介が、りせと直斗を逃がした。

そして、全員で生田目に向かい構えた。

「さあ、靴あとだらけになりたいのは誰！」

「覚悟なさい！」

「行くぜ！」

「ボッコボッコにするクマ!!!」

と千枝、雪子、完二、クマが生田目を睨んだ。

すると…。

「お前ら、全員…、土手に来い…」

…。

皆、生田目から土手に連れて行かれた…。

そして、椅子に座らされた。

生田目が、みんなの前に出た。

「今回は色は良いよ？うん、全員、色が違つてて個性がわかるよ…」

と、生田目はみんなを褒めた。

陽介はポーズを決めながら…。

「ありがとうございます!!!」

すると、生田目が叫んだ。

「だが、なんで君ら、今回、露出度高いんだよ!!!前回みたいな）
クライマックス番長『シャドウは俺の前で毒を吐かない!吐くのは
弱音だけだ!!!編』参照）衣装で来いよ!!!」

…。

生田目の言葉に、みんな黙り込んだ…。

あの自分ら…、一人一人の個性を見てほしいから露出度を上げま

した…、と答えた。

「露出上げる意味わかんないよ!!生々しいテコ入れすんなよ!?!
00年代の深夜アニメのヒロインか、お前らは!?!」

「ああん?」

「あつ!?!」

何故か、生田目の言葉に千枝、雪子がキレた…。

「ごめん…、今は言い過ぎた…」

生田目は普通に謝った。

すると、生田目は陽介、千枝、雪子に指をさした。

「君らは、まだいいよ!水着だから、まだセーフとするよ!?!」

生田目は完二、クマ、自分に指をさした。

「だが、君らに至っては、ただの公然わいせつだよ!?!」

…。

生田目の言葉に、完二、クマは黙り込んだ…。

「だよな…」

「そうクマね…」

これ見て喜んでくれる人居ると思うから、ふんどしに手ぬぐいで
す…、と答えた。

「傍から見たら、ただの変態だよ!?!百歩譲っても喜ぶ奴居るとし

ても、この作品に挿絵なんかないからな!!」

生田目は、深く息を吸った。

「とりあえず…」

最後に、生田目は自分を睨んだ。

「なんで、手ぬぐいとケロリンで仮面ライダーアギトだよ!!」

と生田目は自分に指をさした。

「なんで、今回も、みんなが戦隊でやってんのにお前だけ仮面ライダーだよ!? ていうか、前はベルトとお面付けてたのに、どこどう見ても風呂に入る前の人じゃねえか! どこにも、アギトの要素ねえよ!! アギトの武器にケロリンあったかよ!? グランドフォーム、ストームフォーム、フレイムフォーム、トリニティフォーム、バーニングフォーム、シャイニングフォームの武器にケロリンなんてなかったぞ! アナザーアギトも、ケロリン持ったことは一度もなかったからな!!」

なんで、そんなにアギトに詳しいんすか…? と生田目に言った。

生田目の必死な説得に、みんなの心が揺らいだ…。

「すみません…、今度、よくみんなで話し合います…」

と陽介が頭を下げた。

「ああ…、じゃあ、次こそ、しっかり決めてくれよ…」

「はい…」

全員で生田目に頭を下げた。

「お疲れさまでしたー」

「ああ…、お疲れ…」

こうして、みんな現地解散した…。

生田目と自分だけが残った…。

「ん？なんだい…、君は帰らないのか？」

生田目が自分に気付いた…。

そして、自分は生田目にこう言った。

いい歳こいて、ムキになって仮面ライダーアギトの全フォーム言
いあげてんじゃネエぞ…と。

生田目は頭を抱えて塞ぎ込んだ。

「このわざとらしいしそ味…！編（前書き）」

今回の話は、何故か、『身も心も、おコメになっちまったのかよ！編』でのペシしそ味ネタに対してのリアクションがあったので書きました…。

このわざとらしいしそ味…！編

2011年7月某日（日） 雨

夜

雨が降り続けている…。

時間は、午前0時…。

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！

水着姿のりせだ！

マヨナカテレビに映る水着姿のりせは片手に『ペ シそ味』を握っている…！

「これ飲むのも、買うのも…、りせには無理…、クライ…、しんどすぎ…」

『しそ味ペ シ、絶賛発売中！』

…。

映像が途切れた…。

誰も得しねえ宣伝かよ！！

自分はキレながら、リモコンを投げた。

Take 2

夜

雨が降り続けている…。

時間は、午前0時…。

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！

陽介が映っている！？

ジュネスのエプロンをした陽介が片手にペ シしそ味を握っている！

「ペ シなのに、しその味…！嫌いじゃない…。本当に嫌いけど…。まずいのに金盗る姿勢が、実に…、むかつく…！（福山 治風の喋り方）」

『ペ シしそ味！絶賛発売中！』

「もう在庫処理しきれねえよ…！」

「よっ、ヨースケ泣くな！クマー！」

陽介が泣いてクマが現れたところで、映像が途切れた。

だったら、仕入れるな！と叫びながら、部屋のアルミラックを破壊した…。

Take 3

夜

ザー、ザザー！

鮮明な映像で、またテレビになにかが映った！
今度は、完二…。

ふんどし姿…、また片手にはペ シしそ味…。
しかも、豪快に飲んでいる…。

「んぐっ…！ぐっ…、ぐっ、ぶはっ！！おえええ！！！！うええ！」

びちやびちや！

『ペ シしそ味！絶賛発売中！！』

完二が男らしく口に含んで吐いたところで、映像が途切れた…。
人が吐く映像見て、買う奴居るか！！と叫びながら、テーブルを
叩き壊した。

Take 4

夜

ザー、ザザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！
今度は、千枝と直斗…。

「無理です！花村先輩が大量の在庫抱えてるとはいえ、こんな物を宣言することなんて、僕には出来ません！」

「直斗君！気持ちはわかるけど、我慢して！飲んだフリだけでいいから…！」

「嫌です！本当に…、やめてえ…！」

『ペ シしそ味！絶賛発売中…！』

千枝が必死に直斗に宣言させようと努力してる部分で映像が途切れた…。

…。
うがぁ…！と意味もなく、自分は自室のソファを破壊した。

Final

夜

雨が降り続けている…。

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザザー！

確か、まだ雪子だけ宣言していない…。

鮮明な映像で、やはり、雪子がマヨナカテレビに映った。
着物姿だ…。

「えっと…、天城屋旅館次期女将…、天城雪子です…。源泉掛け流しの露天風呂は、日帰り入浴も可能ですので、どうか…、お気軽に、八十稻羽にお寄り下さい…」

『八十稻羽、天城屋旅館』

なんで、おまえだけ、実家の宣伝だあ！！と叫びながら、テレビのブラウン管に頭突きした。

破片が頭に突き刺さった。

ぎゃあああああ！！！！

頭から血が噴き出した…。

おまけ

夜

雨が降り続けている…。

時間は、午前0時…。

なにもつけていない、テレビを見つめた…。

ザー、ザザー！

鮮明な映像で、テレビになにかが映った！

自分が映っている！片手には、ペ シシそ味…。

そして…。

みんな…、これを買う時、深呼吸をして落ち着いてから、買わないでほしい…。

周囲や空気に流されず、落ち着いて、冷静に判断をしてから、買わないでくれ…。

世の中には、やっていい冗談と悪い冗談があるってことを、みんなには理解してほしい…。

自分からのお願いだ…。

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた。

「このわざとらしいしそ味…！編（後書き）」

ペシしそ味に関しては、真顔でやめておけと言っておきます…。
遊びでも勧めるのをためらいます…。

俺がなにをしたっていうんだ…編

2011年7月某日(日) 晴れ

夜

今日は、もう寝てしまおうか…。

自分は布団の中に入り、眠った…。

…。

陽介が泣きながら、ダンスを殴る夢を見た…。

…。

翌日(月) 晴れ

朝

「よっ！」

登校中、陽介に会った…。

「ん、どうした？」

何故か、気まずかった…。

夜 曇り

今日は、もう寝てしまおうか…。
自分は布団の中に入り、眠った…。
…。

千枝が、ギターを持って『キレイでしょー、ヒラヒラと…、いい女でしょー！ひゅー、ひゅー、ひゅー！』と、アン・ルイスの『ああ、無情』を全力で歌う夢を見た…。

翌日（火） 曇り

朝

「おーす！」

登校中、千枝に会った…。
何故か、気まづかった…。

夜 雨

今日は、もう寝てしまおうか…。
自分は布団の中に入り、眠った…。
…。

雪子が無言で、エレキングをビンタする夢を見た…。

翌日（水） 曇り

朝

「あら、おはよう」

登校中、雪子に会った…。
何故か、気まづかった…。

夜 曇り

自分は布団の中に入り、眠った…。
…。

完二が、無言で自分を見つめながら、白米をかきこむ夢を見た…。

翌日（木） 雨

朝

「おはようツス…。いやあ…、寝坊しちゃいましたよ…」

登校中、完二に会った…。

自分は、俺はおかずじゃねえ！と泣き叫んだ。

「ぶほっ！？」

完二は血を吐いた。

夜 曇り

自分は布団の中に入り、眠った…。

…。
…。
…。
…。

翌日（金） 晴れ

朝

夢を見なかった…。

しかし、目覚めが最高に良い。

「せんぱーい！おはようございませー」

登校中、りせに会った。

満面の笑顔で、自分はおはよう！と挨拶を返した。

完！

昼休み

一年の教室で、完二が暗い表情で弁当の白米を食べていた…。
…。
あとで、謝っておこう…。

食べば…、食うほど…、太る！！編

2011年8月某日（金） 晴れ

昼間

商店街神社で『大食い自慢コンテスト』が開催された…。

内容は、大盛り肉丼を何杯食べるかを競う。次々と放たれる肉丼をギブアップするまで食べ続け、最後までギブアップせず、多くの肉丼を食した人間が優勝となる…。

優勝賞金は、29万…。

もちろん、自分は優勝賞金より、菜々子にいいところを見せるために出場した。

自分はテーブルに座る。

「お兄ちゃん、頑張つてー！！」

「先輩ー！がんばれー！」

応援席から、菜々子、りせが自分を応援している。

しかし…、参加者は誰もが顔見知りの強豪ばかり…。

「ふふふ…、センサーも出場したクマか…」

クマ…！

やはり、参加してきたか…。

「いいか！クマ吉！てめえのせいで、俺んちの家計が圧迫してんだから、ぜってえ優勝しろよ…！」

陽介がクマの応援している。

「肉…、肉…、肉…、食べ放題…、肉…、食べ放題…。ふはは…」

千枝もか…！

しかも、やつれてて、なんかキマツテル！

この大食いコンテストで出されるのは、愛屋の肉丼…。優勝賞金より、これが目当てのようだが…。

しかし、何故、こんな状態になっているのだ…？

「千枝ー！がんばれー！（ふふふ…、この日のため、千枝に2週間、肉を与えさせずに生活させた…。今の千枝は肉しか見えていないわ…。しかも、優勝賞金を、うちの旅館に寄付するよう誓約書にサインをさせたわ…）」

黒い笑顔で雪子が千枝を応援していた…。

「へっ、負けねえツスよ…。」

完二も参加している…。

「ふっ…」

「へへっ…」

一条、長瀬も参加している…。

「いやー、ちょうどお腹減ってたんだよねー」

安立刑事もか…。

くっ！これは、想像以上に過酷な戦いになりそうだ…。

「ぐふふ…」

！？

自分は目を疑った。

なんと、林間学校で、バケツ大のカレーを食べていた大谷さん（原作ゲーム参照）が参加しているではないか！？

しかも、前年度優勝のたすぎが肩に掛けられている…。

まさか、大谷さんは前年度の大食いコンテストの優勝者が…。

謎の大食いマスコット、クマ…。

あたしに食べられない肉は焼き餅を焼く！の里中千枝…。

ドラマCDで、みんなから名字を『つばさ』と読み間違えられて

いた^{たつき}巽完二…。

ディフェンスに定評のある一条…！

いつもジャージの長瀬…！

キャベツ大使、安達刑事…。

そして、前年度チャンピオン、大谷…。

これら強豪を相手に、大食いコンテストが開催される…。

みんなの目の前に、肉井のどんぶりが置かれた。

「時間は無制限！最後まで、ギブアップせずに、肉井を多く食べ続けた者を優勝とする！」

司会者がそう告げながら、ピストルを上空に向けて構えた。
そして…。

「それでは…、用意…」

パーン！！

スタートの合図が鳴らされた！

「クマああああー！！」

「うがああああー！！」

皆、一斉に肉丼を口に放り込んだ。

特に、クマ、千枝、大谷さんの勢いが凄い。

自分も負けずに、肉丼を口に入れた。

「うおえ！ギブ！ギブ！」

まだ一杯目なのに、安立刑事がギブアップした！

早くも一人脱落！

うっ、意外に肉丼の量が多い！

自分は、辛くも一杯目をクリアした。

「うがああああー！！肉！肉！肉！」

！？

千枝の勢いが凄い…。

千枝は、もう3杯…、いや、4杯目…。現行でトップではないか

…。

「いけえー！千枝！！」

雪子が黒い笑顔で、千枝を応援している。

マズイ…！このままでは、千枝に優勝を持っていかれる…！

と思った瞬間…。

「えっ…！」

雪子は目を疑った！

「肉！肉！肉！WRYYYYYYYYYYYYY！！！！！！」

なんと、千枝は肉井を食べながら、ジャージに隠していたビフテキ串を食べている！？

ビフテキ串をおかずに、肉井を食べている！

「ちよっ、千枝！？なにやってんの！？」

雪子が焦っている。

千枝は凄まじい勢いで、肉井を食べながら、ビフテキ串を二、三本食べている！

一体、人間、なにをどうしたら、こんなに肉に飢えられるのだ！？すると…。

「みんな…、肉になればいい…」

今まで見せたことのない、色っぽい表情で千枝が気絶した…。

どうやら、肉井、ビフテキ串を大量に摂取したことになり、脳内麻薬が分泌し、ヘブン状態になったのだろう…。

これにより、千枝は脱落…。

「千枝、あんた！身も心もお肉になってしまったの！？」

雪子は、よく解らないこと言った。

「よし！里中が自爆したから、クマ吉！今、おめえがトップだ！」
と陽介が叫ぶ。

クマは勢い良く、何杯もおかわりし現行トップに立った…。
マズイ！まだ、自分は二杯目途中で現行ビリだ…。

「クマアアアアア！！」

クマが凄まじい勢いで肉井を食べている。

こうなれば…！

応援席に居るりせに、アイコンタクトを送った。

！！

(あれは…、先輩からの合図…！了解！オペレーションS・Yね！)

こんなこともあるうかと、実は他の参加者達をリタイアに導かせるための作戦を、りせと計画していたのだ…。

大会ルールに、参加者をギブアップさせてはいけないとのルールはない…！

悲しいけど、これって戦争なのよね…。

「おい、クマー！」

「んぬ！」

りせが一枚の写真をなびかせながら、クマを呼んだ。

「クマー、ギブアップしてー」

「ぶっ！」

りせが凄まじい無理を言った。

「バカか！てめえ！するわけねーだろ！！」

陽介がりせに言った。

すると…。

「してくれたら…、このりせの恥ずかしい写真あげるから…」

りせが顔を赤くしながら、持っている写真を振り回した。

！？

クマが固まった。

「はっ、恥ずかしい写真…、クマか…」

クマは箸を止めた。

「うわっ！バカ！フェイクだ！フェイクに決まってるだろ！恥ずかしい写真って言っても、いろんな恥ずかしいがあるじゃねえか！例えば、なんか失敗したときの写真とか！子どもの頃の写真とか！」

陽介がそういうと…。

「りせのす、と、ゴホン！ゴホン…、っ、ぷ写真…。きゃあー、もう恥ずかしいー！！こんな写真、世の中の的にアリー！？」

！？

クマ、陽介の顔が固まった。

「す…、と…、り、っ、ぷ写真…、クマ…。」

クマは箸を置いた！

「バカ！だまされんなよ！途中、ざとらしい咳してたぞ！どうせ、ストリップ写真じゃなくて、ストラップ写真とかっていうオチだ！
！世の中の的にねえよ！」

陽介が鼻血を垂らしながら、クマを止めた。
しかし…。

「本当にくれるクマか…」
「もち！」

クマはすっかりと、スト…ップ写真に心を奪われている…。
陽介は鼻血を拭いながら…。

「クマ、騙されるな！たぶん、ストラップとかってオチだ！！」

だが…。

クマは手を挙げた。

「ギブアップ…」

クマはギブアップした…。

「うわあああああ！！バカヤロウ！！なにギブアップしてやがる！
ぶざげるなああああ！！！！」

半狂乱状態で陽介が叫んだ。

クマはテーブルから離れ、応援席に居るりせの方に向かった。

「ありがとう…、クマ」

りせはクマに写真を渡した…。

クマは嬉しいそうに写真を見た。

！？

写真は…、柳沢 吾の若き日のプロマイド写真だ…。

「ストラップ写真ってオチですらねえのかよ!!」

陽介はあまりの不条理さに血を吐いた。

だが…。

「ウホホーイ！アバヨ！の写真クマー！アバヨ、クマー!!」

クマは普通に喜んだ。

これで、クマは脱落…。

「んぐ…！んぐ…！」

問題は、安定した勢いで肉井を平らげている大谷…。

強豪の千枝、クマが脱落した今、目の上のたんこぶは彼女だ…。

こうなれば…。

ねえ…、大谷さん…、と声のトーンをドラマCDでの声調にして、
自分は大谷に話し掛けた。

「ん…、なによ…」

大谷さん…、ギブアップしてくれないかな…？と目をキラキラさせながら、自分は大谷に言った。
だが、当然…。

「バカ言っんじゃないわよ！」

と、当たり前前に大谷は拒否をした。
そう…、だよな…。ごめんね…、無理を言っ…、と自分は哀愁を漂わせながら普通に返した。

ドキン！

大谷の箸が止まった…。

…。
実は言つとさ…、気付いてたんだよ…、と自分は言つ。

「へっ！」

僕の下駄箱に、いつもプレゼントをくれたのは…、君だよね…、と自分は目をキラキラさせながら言った。

「!？」

大谷の顔が真っ赤になった。

あれ…、今適当に言ったのに、どんぴしゃだったらしい…、まあいいや…。

君…、照れると…、可愛いんだね…、と笑顔で自分は心にもないことを言った。

ドガン！

大谷の心に、ゴッドハンドが直撃した。

「ギブアップー！！」

大谷は満面の笑みで、ギブアップ宣言した。

計画通り……！！

ぷっ、くふ……、駄目だ……、まだ笑うな……、こらえるんだ……。

すると、大会実行委員が自分の目の前に現れた。

？

「君……、さつき……、大谷選手にギブアップを強要させたね……」

と言いながら、大会実行委員はレッドカードを自分に渡した。

「退場……」

！？

な、ん、だ、と！？

こなばななああああ！

さっきの大谷に話し掛けたのが反則だと！？

ぶざけるなあ……！！ルールブックに書かれてなかったぞ……！と自分は逆ギレした。

「いや、書いてあるよ……」

大会実行委員は、ルールブックを出した。

『参加者への妨害、ギブアップを促す行為をした場合、即刻、退場

してもらいます』

……。そういえば、ルールブックに目なんか通してなかった……。自分は素直に退場した……。

「お、お兄ちゃん……、つ、次があるよ……」

菜々子の作り笑顔の優しさが胸に突き刺さる……。

主人公、脱落……！

「うおっ……、ギブ……」

！？

一条が口を押さえながらギブアップした。さっきから、まったくピックアップされていない完二、長瀬の二人が残った。

「うぷ……」

「ぐぐ……」

二人の杯数は同じ。

完二、長瀬の一騎打ちとなったがどちらもキツそうだ。箸が動かないでいる。

「くっ……（負けるわけにはいかねえんだよ……！！優勝賞金で、お袋に楽を……）」

！

完二はまたハイペースに肉丼を口に放り始めた。

「くっ！（俺は負けない！何故なら、負けられない理由があるからだ！）」

！！

長瀬も、また箸をハイペースに動かした。

この二人の殴り合いに近い、箸の動きに観客達が湧いた。

「うおー！！完二に、長瀬、行けー！」

「どっちもがんばれー！」

「完二ー、行けー」

「長瀬、負けんなよ！」

陽介、雪子、りせ、一条も二人を応援した。

「あたしが…、あたしたちが…、肉だ…！」

「ウホホーイ！アバヨ、クマー！」

千枝はトランス状態で、クマは柳 慎吾のプロマイド写真を見て喜んでいる。

激しい肉井の食べ合いの末…。

「うぐっ！」

「ぶぐー！」

両者に限界が迫った。

とつとつ、最後の一騎打ち…。

「ぶっ、ぶっ…」

「うっ、うっ…」

完二は少しだけ余裕の表情だが、長瀬は今にもリバーズしそうな状態だ…。

「長瀬先輩…、優勝はもらったあ…！」

「…！？」

完二が右手を突き出し、どんぶりを持ち上げた。

「俺のこの手が真っ赤に燃えるう…！勝利を掴めと…、轟き叫ぶ！食らえ！愛と怒りと…、悲しみのお…！」

完二がどんぶりを一気に口に放り込もうとした瞬間…。

「なんですか…、このバカげた大会…」

！？

通りすがりの白鐘直斗が、会場に現れた。

この時期、まだ直斗は仲間になっていません。

「あ…！」

顔が赤くなつた完二の手から、どんぶりが落ちた…。

「異選手、リタイヤ…！」

！？

どんぶりを落としたことにより、完二は、なんとギブアップ扱いとなった。

「うそぉ！？」

完二は司会者に首を向けた。

「よって、優勝は長瀬選手になります！！」

うおおおおー！！と観客達が湧いた。

なんと棚からぼたもちで、長瀬が優勝した。

司会者が、苦しんでいる長瀬にマイクを向けた。

「長瀬選手、今のお気持ちを…」

「医者を呼んでくれ…」

優勝した長瀬は気絶した。

「が…、が…」

あと一歩だった完二は、悔しさのあまりに白目を剥いていた…。
下手なことが言えないくらいに、完二がピクピクしている…。

「僕…、なにか悪いことしましたか…？」

通りすがったただけの直斗が、ドライな感じに言った…。

このあと、救急車が来て、長瀬と千枝を病院に運んで行った…。

秋になった数ヶ月後の日曜日 晴れ

昼間

「あっ、巽君…」

「あっ…、直斗…」

仲間になった直斗が商店街で完二と会った。

すると…、直斗がモジモジしながら…。

「そういえば、数ヶ月前…、大食いコンテストの時…、僕のせいで

…」

「…!」

なんと、直斗は今になって、大食いコンテストの件について謝ろうとしている。

「あっ! いや、あんときは、おめえは悪かあねえよ…、それに過ぎたことだし…」

「だけど…、優勝を逃すきっかけになったのは僕だ…」

「いや、マジで! 気にしなくていいってよ…」

「…、でっ、でも…」

「…」

「…」

二人の間に、微妙な空気が流れた…。

すると…。

「…じっ…、じゃあ…、詫びとして、愛屋で俺に飯おごれ…」

「へっ?」

完二なりの気遣いなのか、そう直斗に言った。

「おごれってんだよ…、じゃあねえと…、おめえの気が済まねえんだろ…」

「…」

直斗が呆然とした。

そんな直斗の様子、完二がやばっ！と思った。

「あつ…、やっぱ…」

「わかった…、奢らせてもらうよ…」

「へっ!？」

直斗は頬笑みながら、完二の言葉に頷いた。

「じゃあ…、行くうか…」

「あつ…、ああ…」

直斗と完二は、ぎこちないしながらも愛屋の方に足を向けた。

そんな二人の様子を、自分は電柱の影にヤモリのようにしがみつきながら見つめていた。

なかなか、いいコンビになりそうだ…、と笑いながら自分は二人を見つめた…。

「先輩…、なにやってんの?」

通りすがりのりせが、啞然としながら自分を見つめていた。

陽介、T o L O V E るっ!? 編

2011年6月17日(金) 晴れ

林間学校の夜

いろいろあって、現在、自分(ペルソナ4主人公)と陽介のテントには、千枝と雪子が居る(原作ゲーム参照)。
ラブコメならドキドキエッチな展開だが、千枝と雪子はテントの中、荷物などでバリケードを作って眠っている。
自分も疲れていたので、ぐっすり眠っていた…。
しかし、陽介は眠れないでいた…。

(やぶえよ…)

どうやら、陽介はトイレに行きたいようだ…。

(うおお…、ダメだ!漏る!漏る!)

陽介は起き上がった。

だが、バリケードが邪魔をした。これをどかさなければ、テントから出れない…。

しかし、どかせば、千枝と雪子が…。

(漏らして恥かくよか、マシだ!)

開き直った陽介はバリケードの荷物を退かした。
すると…。

「なにやってんだ…、おい…」

！？

陽介がバリケードを退かすと千枝が起き上がった！

「げっ！里中！起きてやがったのか！？」

「なんか、さつきから、ゴソゴソうるさいから…」

かなり千枝は機嫌が悪そうだ…。

そして、千枝は陽介のジャージの襟首を握った。

「あんた…、バリケード退かして、なにしようとした…」

ものすごい眼光で、千枝は陽介を睨んだ。

「ちがつ！勘違いすな！トイレに行きてえただけだよ！」

「…」

千枝は軽蔑の眼差しで、陽介を見つめた。

「んだよ！その目は…！頼むから、トイレに行かしてくれ！」

「しっ！静かにしなさい…」

大きな声を出した陽介の口を、千枝は手で塞いだ。
すると…。

「…、ん…、ん…」

眠っている雪子が唸った…。

(やべっ…)

(ほらぁ！リーダー、雪子、寝てんだから静かにしなさいよ！)

陽介、千枝は小声で話した。

「くう…」

一瞬、雪子は目を覚ましかけたが、また眠りに入った。

陽介、千枝は一安心した。

(…)

陽介は、すやすやと眠る雪子の寝顔を黙って見つめた…。

(やぶえな…、天城の寝顔…。こりゃあ、たまらん…)

陽介が顔を赤くした。

すると、千枝が陽介の耳を引っ張った。

(いでで…)

(おいこら…、なに欲情してんだ…？変態…)

(ちがっ！変な言い方すな！バカ！！)

ん…、んぐ…。

すると…、今度は、眠っている自分が唸り声を出した。

(あっ！やばっ！)

陽介、千枝は互いの口を手で塞いだ。

すると…、自分は『INFORMATION HIGH…』と寝言を言った。

(なんだ、寝言か…)

(なんで、英文で寝言よ…)

陽介、千枝が自分の寝言を聞いていると…。

「千枝…」

!?

(ヤバっ…、起こしちゃったか!?)

雪子に名前を呼ばれた千枝は振り向いた。だが、雪子は普通に眠っている。どうやら、寝言のようだ…。

(びっくりした…)

そして、雪子は…。

「千枝、お手…」

!?

「そつよ…、よくできましたー。えらい、えらい…」

と、雪子は笑いながら寝言を言った…。

(ダバっ!?)

千枝はガビーン!となった。

(お手つて、なんだよ!お前ら、どんな関係だ!)

陽介は鼻息を荒くして、千枝に聞いた。

(ちゃうわ!なに想像してんの!?)

すると…。

今度は自分が、陽介…、と寝言を言った…。

(相棒!?)

陽介が自分に振り向いた。

そして…。

こんなことで、興奮するなんて…、お前は変態だな…、と寝言を言った…。

!?

(シヨウ!)

陽介はガビーン!となった。

千枝の顔が真っ赤になった。

(ちよっ、なに!!なに!!あっ、あんたら…、まさか!?)

(ちげえ!ちげえかな!マジ、ちげえかな!)

すると…、今度は、雪子が…。

「千枝…、ダメじゃない…。首輪外しちゃあ…、もう悪い子ね…。お仕置きしちゃうわよ…」

！？

(ジロン！)

千枝はガビーン！となった。

(…っ！)

陽介は、なにかを悟ったような顔をして鼻血を流し気絶した。

(うがああー！！ちよっ、花村！！なにオーバーヒートしてんの！
?)

千枝は気絶した陽介の身体を揺らした。

すると…、また自分が寝言を言い始めた。

へへへ…、この足か…、そんなに、この足がいいか…。本当に…、
マニアックだな…、陽介はあ…。

と、自分は寝言を言った。

(コスモツ！)

千枝も顔を真っ赤にして、気絶した。

「ふふふ…」

くくく…。

自分と雪子は、素晴らしく良い笑顔で眠っていた…。

千枝は陽介の身体を握ったまま、気絶して倒れた…。

翌朝…

「おはよう…」

テントの中で、自分と雪子が目を覚ました。

自分は大きく背伸びをしながら、陽介と2009年の夏のお台場にあつた等身大ガンダムを見に行く夢を見たと話した。

「へえー」

それで、陽介はガンダムの足に抱きついたりして大変だった、と話した。

「あたしは、犬を飼う夢見たよ。犬の名前は千枝って名前だね…」

雪子も楽しそうに夢の話をした。

…！

ふと、横を見ると、陽介と千枝が抱き合いながら眠って（気絶して）いる…。

「えっ！ちよっ！」

雪子の顔が真っ赤になった。

自分もビククリした…。

まさか、この二人…。

「千枝と花村君…。あたしたちが寝ている間に…、なにを…」

雪子は呆然とした。

自分達は、なにも見なかったことにしよう…、と雪子に言った…。寛容力、伝達力が高まった。

「わっ…、わかった…」

雪子は顔を赤くしながら頷いた。

林間学校は午前中で現地解散になった。

完二を連れて、川原に向かう途中…。

（俺たちは、なにも聞いてない。なにも、聞いてないからな…）

（うん…）

陽介、千枝は小声で会話した…。

(あたし達、なにも見なかったよね…)

と雪子が小声で言ってきたので、静かに頷いた…。

ペルソナの奇妙な冒険 第四部 くイザナギは砕けないく編

2011年8月某日(日) 晴れ

午後

今日の夜、自宅にて肝試しのホラー映画鑑賞をやることに…。自分は激しく嫌な顔をしたが、みんなノリノリなので我慢した。準備のため、二手に別れ、陽介、千枝、完二、りせ、クマはお菓子などの買出しの準備に行き、自分と雪子は肝心のホラー映画を借りに行くことに。

なにを借りるべきか…。

市内のレンタルビデオ屋

「ねえ？なに、あの18歳未満立ち入り禁止ってコーナー？」

と雪子がレンタルビデオ屋の一角に指をさしたので、頼むから間違っても行くなよ…、と言っておいた。

「うーん、どういふのがいいんだろっね…。こっいふの選ぶのって、千枝の方が良かったんじゃない？」

千枝だと、カンフー映画を借りてくるから…、と答えた。

自分の脳裏に、ジャッキーが指でクルミを割ってたりするシーンや、時計台にしがみついたりするシーン、NG集などが浮ぶ…。雪子が一本のDVDを取り出した。

「じゃあ、これとか、どうかな…」

雪子が持っているDVDは『スパ ダーマン』…。いや…、これホラー映画じゃないよ…、と言った。すると、雪子は…。

「そもそも、ホラー映画ってなに？」

ゾンビー…！

自分は、まさかの雪子の発言に頭を壁にぶつけて流血した。血を拭いながら、ホラー映画ってのは『観る者が恐怖感（英語で言うところのHorror、Fear、Terror等）を味わって楽しむことを想定して制作されているものを広く指す（Wikipedia引用）』と自分は説明した。

「へえ…、さすが、歩くWikipedia…」

と雪子に褒められた。

なんで、Wikipediaを知ってて、ホラー映画を知らないんだよ、と自分は言った…。

「怖いと思う映画か…。じゃあ、これもホラー映画だよね？だって、人が壁にしがみつくなんて怖くない？」

と雪子は『スパ ダーマン』のDVDを片手に言った。ソノハツソウハナカタワ…。

いや…、みんなが怖いと思うのがいいかな…、と言った。

「うん！わかった」

雪子は、そう言ってどこかのDVDコーナーに向かい、棚から1本のDVDを持ってきた。

「じゃあ、これとか、どうかな!」

雪子が持ってきたDVDは、ジャッキー・チェン主演の『シイ
ーハンター（実写版）』だ…。

ジュウサンニチノキンヨウビ!!

自分は、床に頭をぶつけて流血した。

確かに、ある意味では見るのが怖いけど違う!!と叫んだ。

なんていうか、おばけや、幽霊、モンスターが出てくる感じの怖
さだよ…、と自分は言った。

「あつ、なるほど!」

雪子は、そう言ってどこかのDVDコーナーに向かい、棚から1
本のDVDを持ってきた。

「じゃあ、これは!」

雪子が持ってきたDVDのパッケージには、千葉県在住のネズミ
が!?

ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド!!

自分は、そのDVDのパッケージを必死に隠した。

うわああーい!!本当に怖ええええ!!と自分は叫び、すぐ

に棚に戻せと叫んだ。

雪子が急いで棚に戻してる間、自分は頭を抱えた…。

このシーンは、後日、消されるかもしれませんが御了承下さい。ていうか、作者が消されるかもしれませんが、御了承下さい。

仕切りなおした…。

なんていうか、おばけや、幽霊、モンスターが出てくる感じの怖さだよ、と自分は言い直した。

「例えば？」

うーん、ゾンビとか…、吸血鬼とかかな…、と答えた。

「あつ、そういうのか！じゃあ、待ってて！」

雪子はなにかを閃いて、どこかに向かった…。

まさかとは思うが、ジョヨの奇妙な冒険、第1、2部を本屋で買ってきて…、これ、確かにゾンビ、吸血鬼出てるけど、ちげえよ！…これ、映画じゃなくて漫画だよー！！って寒いツツコミを自分にさせるなよ…、と釘を刺した。

「…！！」

雪子の足が止まった…。

ku

!

⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮
⋮

せ、る、気、だ、つ、た、ん、か、あ、あ、あ、あ、あ、

あ————！！！！！！と叫びながら、自分は天井までジャンプし、頭をぶつけて流血した。

シリョウノボンオドリ！！

いいかげんしれえええ——！！！！と、血を噴出しながら自分は叫んだ。

「あなただって、さつきから、あたしにばっか任せてるくせに！！じゃあ、あなたが選びなさいよ——！！」

雪子に逆ギレされた……。

！？

そう言われ、自分は黙った……。

「……？」

…。
自分は雪子に背を向けて、実はホラー映画が苦手なんだ…、と小声で呟いた…。

「ぶっ…！」

！？

「ぐぐっ…、ぐっ、ぶはははは！…！はははは！…！」

雪子の爆笑スイッチが入ってしまった…。

んぐぐ…、と自分は顔を赤くして、雪子の爆笑が止まるまで睨んだ。

「ふあー」

雪子はやっと落ち着いた。

「ごっ、ごめんなさい…。でも、あなたにも苦手なものがあったなんて…、ぶぐっ！」

ああ…、肉ガムもな…、と自分は答えた。

すると、雪子は…。

「じゃあさ、みんなには悪いけど、ホラーじゃないの借りよ」

！？

自分は驚いた。

しっ、しかし、今日は肝試しをやるのでないのか…、と言いつつ…。

「大丈夫。苦手なの、無理して見ることはないよ」

そんな雪子の優しさに、自分はポツと顔が赤くなった。ありがとう…、と自分は泣きながら言う…。

「あつ、う、うん…」

雪子も顔を赤くなった。

「じゃあ、行こう…」

仕切りなおして、自分と雪子は違う映画を探した…、かったが、自分はふと腕時計を見ると…。

！！

自分はビクッ!となった。

「どうしたの!?!」

さつきからの不毛なやりとりで時間を潰してしまったため、気づいたら、みんなとの約束時間まで、あと5分しかないことに気づいた!

「えっ!?!うそ!?!」

まずい!!今から選ぶにしても、時間がなさ過ぎる!人がビデオを借りるまでに掛かる時間は、平均5分から30分!(作者調べ。根拠?そんな食べ物しらんクマ)適当に下手な映画を借りてしまえば、みんなからヒンシュクを買っ!?!
どうする!?!?

!!

自分の頭に、電球が浮かび上がった!!
なにも言わずに、自分は走った。

「どこ行くの!?!」

雪子を自分を追った。
そして…。

夜 晴れ

自室

「
…」

陽介、千枝、完二、りせ、クマは呆然とした…。

自分と雪子は、皆に頭を下げた…。

映画のDVDを借りて来ないで『ジヨ ヨの奇妙な冒険』を全巻、
買ってきた…。

迷った末の判断だった…。

「なんで、肝試し大会が、ジヨジヨ鑑賞会になんだよ!!」

と陽介が叫んだ。

数分後…。

「…」

「花村、早く、第4部を貸しなさいよ！」

「次、俺ツスよ！」

陽介、千枝、完二が単行本を取り合っている…。

「どうクマ！」

ドギヤーン！！とクマがポーズを決めた。

「もう少し、右に傾いたら？あと、腰の捻りが甘いかも」

とりせが指摘した。

結果オーライ…、と自分と雪子は笑顔で親指を立てた。

ちなみに、市内レンタルビデオ屋は自分の血で真っ赤になって、
下手なホラー映画より怖い光景になっていた。

ペルソナの奇妙な冒険 第四部 くイザナギは砕けないく編（後書き）

余談ですが、ジヨジヨは第二部、第四部が好きです…。本当に、余談ですね…。うん。

BGMって大切だよね編

2011年8月某日(土) 晴れ

昼間

明日は、ジユネス屋上にて相撲大会があり、クマが出場することになった。

自分はクマにコーチ役を頼まれたので、今日は河原にて、自分と完二がクマの特訓に付き合うことにした。

自分は裸になり、まわしをつけた。

よし！気合い入るよ！最近の日本男子はメディア（回復技じゃないぞ）に踊らされ、草食系男子とか言われ舐められてるから、ここで男を見せてやろうぜ！というか、草も食わないと体に悪いだろうが！！今のメディアはそんなこともわからないのか！！たわけが！とクマに言っただけ気合いを入れさせた。

「おおー！！日本男子、舐めたらあかんぜよ！！」

まわし姿になったクマも気合いを入れた。

完二が、自分とクマのまわしを呆然と見つめた…。

(あれ…、花村先輩のTシャツだ…)

自分は腰に着けたまわし(陽介のTシャツ)をギュツ！と締めながら構えた。

さあ！クマ、かかってこい！と自分は叫んだ。

クマも腰に着けたまわし(陽介のTシャツ)を締め直して構えた。

「センサー、行くクマよ！」

クマも構えた。

「いいツスカ？はっけよーい！のこった！！」

と、完二に開始の合図をしてもらい、自分とクマは正面からぶつかりあった。

ガシイッ！

自分とクマが、激しく両手を掴み合った！

！？

自分とクマの目と目が合う！

はっ…！？

「クマツ…！！」

目と目が合った瞬間、自分とクマの顔が赤くなった…。

「…、あっ……」

強く握り締めた手から、力が抜ける…。

自分とクマは優しく手を握り直し、互いの手から伝わる体温を感じあった…。

「センス…の手…、柔らかいクマね…」

クマがキラキラした目で、顔を赤くしながら言った…。

あつ…、ああ…、クマの手、白魚みたいだな…、と自分は照れながら言った。

「…」

完二が呆然と、自分とクマを見つめた…。

…。

自分はクマから手を離した。

ダメだ！ダメだ！こんなツツパリじゃあ、虫はおるか、シャドウも倒せんぞ！と叫んだ。

「うつ…、ごめんなさいクマ…。つい、センサーの眼差しに吸い込まれたクマ…」

クマは反省した。

(今のなんだ…)

完二は呆然として見つめた。

しばらくすると、雪子がラジカセを片手に現れた。

「あら、本当にお相撲の練習してるわね」

「あつ、天城先輩！ちーツス」

雪子が自分とクマを見つめた。

「どっつ？練習は？」

と雪子は聞いた。

いや全然、身が入ってない、と言った。

(さっきの、そういう問題じゃなかったぞ…)

完二は声にならないツツコミをした。

すると、完二は雪子が持っているラジカセに気づいた。

「あれ？そのラジカセ、なんツスか？」

「ああっ、これはね、普通に練習するだけじゃ辛いと思うから、なんか音楽流しながらやった方がいいんじゃないかなーって？」

と雪子は言った。

「ああー、なるほどー。結構、BGM流しながらだと、気合入るし、テーション上がるツスよねー」

と完二は頷く。

よし！なら、BGMを頼む！と言い、自分は腰に着けたまわし(陽介のTシャツ)をギュツ！と締め直し構えた。

さあ！クマ、もう一度かかってこい！と自分は叫んだ。

クマも腰に着けたまわし(陽介のTシャツ)を締め直して構えた。

「センサー、行くクマよ！」

クマも構えた。

「いいツスか？はっけよーい！のこった！！」

と、完二に開始の合図をしてもらい、自分とクマは正面からぶつかりあった。

ガシイッ!

自分とクマが、激しく両手を掴み合った!

!?

さつきとは違い、気迫十分だ!

「クマアアア…!!」

激しく目と目から火花を散らした瞬間、雪子は持っていたラジカセの再生ボタンを押した。

ポチッ!

『忘れないよ、大事な、みんなと過ごした毎日』 Never More、暗い闇も、一人じゃないさ』

何故か、雪子はBGMとして、このゲームのエンディングテーマ『Never More』を流した。

激しくぶつかり合う、自分とクマの勢いが止まった…。強く握り締めた手から、力が抜ける…。

「センセ…ッ、なんで帰っちゃうクマか!」

クマは涙目で顔を赤くして叫んだ…。

ああ…、と自分はクマを抱きしめた。

「
…」

完二は淡々とBGMを流す雪子見つめた…。

BGMが終わった…。

…。

自分はクマから体を離れた。

ダメだ！ダメだ！こんなツツパリじゃウルフマンはおるか、シャドウも倒せんぞ！と叫んだ。

「うっ…、ごめんなさいクマ…。つい、胸キュンしちゃったクマ…」

クマは反省した。

(なんだ今の…)

完二が呆然としていると…。

「うーっす」

「おはよー」

千枝とりせが現れた。

「おっ、やってる、やってる」

「先輩ー！クマー！頑張れー」

「あっ、里中先輩！久慈川、ちーッス」

千枝とりせが自分とクマを見つめた。

「どっ？練習は？」

と千枝は聞いた。

無論、身が入ってない、と自分は言った。
すると、りせは雪子が持っているラジカセに気づいた。

「あれ？雪子先輩、そのラジカセ、なに？」

「うん。音楽流しながらやった方がいいかなーって思ったんだけど、
どうもダメみたい……」

と雪子は言った。

(解ってるのなら、何故、淡々と流した……)

完二は声にならないツツコミをして頷いた。

「じゃあ、りせが応援ソング歌ったげる！」

「おおっ、いいねー。んじゃ、あたしも歌ったげる！」

とりせと千枝が言う。

よし！なら、気合の入るテーションアゲアゲな応援歌を頼む！と
言い、自分は腰に着けたまわし（陽介のＴシャツ）をギュッ！と締め
直し構えた。

さあ！クマ、全力でかかってこい！と自分は叫んだ。

クマも腰に着けたまわし（陽介のＴシャツ）を締め直して構えた。

「センサー、覚悟クマよ！」

クマも構えた。

「いいツスか？はっけよーい！のこったー！」

と、完二に開始の合図をしてもらい、自分とクマは正面からぶつ

かりあった。

ガシイッ！

自分とクマが、激しく両手を掴み合った！
！？

自分とクマの目と目が合う！
そして、雪子は持っていたラジカセの再生ボタンを押した。

ポチッ！

すると、千枝、りせは持っていたマイクを握る。
完二は驚いた。

ポップな曲調で、千枝とりせは歌い出した。

「オレンジ色に、早くなりたい果実」 キミの光を浴びて」
理想や夢は膨らむばかり、気づいてよね」 「」
理

何故か応援歌として、とら ラのアニメエンディングの『オレンジ』を千枝とりせは歌い始めた！！本人かと思うくらいに二人とも上手い！

自分とクマの手から力が抜けた…。
手を優しく握り直し、自分とクマは互いの手から伝わる体温を感じあった…。

クマがキラキラした目で、顔を赤くして自分を見つめた…。
自分はクマを静かに抱きしめた…。

「オレンジ、今日も食べてみたけど、まだすっぱくて泣いた」
わたしみたいで残せないから、全部食べた」 「」

千枝とりせは息を合わせて歌う…。

「好きだよ　泣けるよ　好きだよ　好きだよ」

完二は淡々とBGMを流す雪子と淡々と歌い上げる千枝、りせを見つめた…。

自分とクマは互いに見つめ、抱きしめ合う…。
そして…。

という内容の夢を、完二は見た…。

「はっ…！」

目を覚ましたと同時に、完二は周囲を見渡した…。

いつもの完二の部屋だ…。

完二は汗を拭った…。

「夢で…、良かった…」

完二は胸を抑えた…。

本当に夢才子と声優ネタばかりしてすまないと思う気持ちと、これ、いろんな方面から反感買うかな…、という複雑な気持ちに完二は襲われた…。

BGMって大切だよね編（後書き）

今回、裸が多いなあ…。

リボンシトロン編

2011年某月某日（金） 雨

夜

雨が降り続けている…。

マヨナカテレビになにか映るかもしれない…。

自分はなにも点けていないテレビの前に立った。

ザーザー、ザーザー！

！？

なにかが映った！？

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！カンフー先生！！』

千枝がいつものジャージ姿で、生徒達の前に立っている！！

「あちよー！ほあちやー！！」

カンフーの動きで、千枝は黒板をチョークで殴り書く！

なにを書いているか、さっぱり読めない！！

先生！読めません！と生徒の一人が叫ぶと…。

「考えるな…、感じるんだ…」

と、千枝はごちゃごちゃに書いた字の解説をしなかった…。

「試験、大丈夫かな…」

生徒が胡椒博士を飲みながら呟いた…。

『新発売！胡椒博士NEO！！』

…。

宣伝かよ！！

自分はりモコンを投げた。

Take 2

夜

雨が降り続けている…。

マヨナカテレビになにか映るかもしれない…。

自分はなにも点けていないテレビの前に立った。

ザーザー、ザーザー！

！？

なにかが映った！？

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！ヤンキー先生！！』

「漢字テストだ、おらぁ！！」

と完二が制服姿で、生徒達に叫んだ。

黒板には『露天魔王』と書かれている。

「おらぁ！二年なら、こんぐれえ読めんだろっがよ！！」

と完二は生徒達を睨んだ…。

一人の生徒が読めないと言つと…。

「ろっ、てん、ま、おうだ！コラァ！！！」

…。

「試験、大丈夫かな…」

生徒が盆ジュースを飲みながら呟いた…。

『新発売！盆ジュース！！』

…。

普通に読めるだろ！！

自分はアルミラックを破壊しながら叫んだ。

Take 3

夜

ザーザー、ザーザー！

！？

なにかが映った！？

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！昼ドラ先生！！』

「で、次の問題は…」

りせが、普通に生徒達の前で授業をしていると…。

ガタン！と戸を開いて自分が現れた。

りせは振り向いた。

「いまさら、なによ！！」

りせが自分に向かって叫んだ。

りせ…、愛してる…！と自分は言った。

「バカア！」

りせは泣きながら、自分に抱きついた。
すると、後ろから雪子が現れた…。

「この泥棒猫…」

「雪子先輩…!!」

…。

「授業しろよ…」

生徒が、やそせんざいを飲みながら呟いた…。

『新発売! やそせんざい!!』

…。

俺のイメージ悪いじゃん!!

自分はテーブルを破壊して叫んだ。

Take 4

夜

ザーザー、ザーザー!

!?

なにかが映った!?

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！革ジャン先生！！』

「この問題が解る人…」

直斗は銃を構えながら、生徒に聞いている…。

「どうすればいいんだよ…」

生徒がリボンシトロンを飲みながら呟いた…。

『新発売！リボンシトロン！！』

…。

本当にどうすればいいんだよ！！
自分はソファアを破壊した。

Take 5

ザザー！

！？

なにかが映った！？

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！ジュネス先生！！』

「買ってくれ…」

陽介がクマと一緒に、ペ シしそ味を生徒達に売りつけようとしている…。

『新発売！ペ シしそ味！！』

…。

また、ペ シしそ味かよ！！どんだけ、在庫あんだよ！！と叫びながら、自分は天井に頭突きをした…。

TakeFINAL

夜

雨が降り続けている…。

マヨナカテレビになにか映るかもしれない…。

自分はなにも点けていないテレビの前に立った。

ザーザー、ザーザー！

！？

なにかが映った！？
鮮明な映像だ…。

『プロテイン先輩！！』

「プロテイン、うめえ！！」

…。

おめえ、誰だよ！！と叫びながら、自分はテレビに頭突きした。
うぎゃああああ！！！！

おまけ

夜

雨が降り続けている…。

マヨナカテレビになにか映るかもしれない…。

自分は何にも点けていないテレビの前に立った。

ザーザー、ザーザー！

！？

なにかが映った！？

鮮明な映像だ…。

『八十神高校2年B組！ ウホウホ先生！！』

「ウホウ…、今から、授業を始めるよお…！」

完二がふんどし姿で、生徒達の前に立っている。
そして、黒板に文字を書いている…。

「こじは、こじで…、あっ…！？ああっ、そこお…、そこ…、ああ
っ…！」

…。

事情により没にしたシリーズ編

20XX年某月某日(日) 雨

夜

眠りのない娯楽の街、八十稲葉街…。

その一角にあるホストクラブ…、『ジュネス』…。

『マヨナカ』という新たなホストクラブが建ったことにより、ホストクラブ『ジュネス』は勢いを失い閉店寸前であった…。

だが、謎の財閥嬢『天城雪子』の登場により、ナンバー1ホストである花村陽介の主導であった『ジュネス』は、新たに天城雪子をオーナーに迎え、見えないところも勝負仕様！ハートもギョツ！となるホストクラブ『天城屋・アマテラス』として転生するのであった…。

「あなた達には、あたしの王子様をやってもらおう…」

天城雪子…。

彼女が崩壊したホストクラブ『ジュネス』…、いや、『天城屋』で、この荒んだ街、八十稲葉に新たな革命を起こすのを…、この時の自分はまだ気付いていなかった…。

連続ファンフィクションドラマ小説

「番長が如く」

『第2話、赤いきつねを紅く染める』

新体制の元、新たに編成を変えると天城雪子から告げられた。オーナー雪子を囲うように、クラブのホスト達が集う…。

「新体制だつてよ…」

「ああ…」

ナンバー4、5のホスト、一条（源氏名、バスケ）、長瀬（源氏名、サッカー）が騒つく。

そんな二人の会話に、巽完二（源氏名、ロツテンマオウ）が入り込む…。

「一条さん…、長瀬さん…、噂じゃあトップを入れ替えるらしいッスよ…」

！？

一条、長瀬が驚いた。

「なに！まさか、花村さんトップから落ちるのか！？」

一条が声を大きくした。

すると、ソファアに座り、盆ジュースをワイングラスで飲んでいる雪子が扇をバチン！と鳴らした。

「静かにおし！！」

雪子の声は、クラブ全体に響いた。

「ひっ!?!」

一条、長瀬、巽完二は口を閉じた。

すると…、ナンバー1ホストであり、今までの主導を握っていた花村陽介（源氏名、エブリデイ・ヤングライフ・ジュネス）は雪子の前に出た。

どうやら、怒りの様子だ…。

「天城さんよ…。資金提供や店の改装に協力してくれたのは感謝している…。だが、店の名前が変わったとはいえ…、今まで通りの俺達のやり方でやらせてもらっ…」

と陽介は雪子に迫る。

だが…、雪子は笑った。

「ふふ…」

「なにがおかしいんだよ!?!」

雪子は逆上する陽介の神経を逆撫でするように、テーブルの上の赤いきつねにお湯を注ぐ。

「確かに…、今までのやり方で、お店を進めても構わないわよ…」

!?!?

陽介の目が揺れた。

しかし、雪子は…。

「ただし…、あたしは…、ナンバー1に相応しい人間こそが、ナンバー1を務めるべきだと思うの…」

!?

クラブ全体が揺れた。

陽介はテーブルを叩いた。

「どういう意味だ!!」

「花村先輩!」

プライドを傷つけられた陽介の暴れる身体を、完二が止める。さっきの衝撃で、赤いきつねの汁が床にこぼれた。すると…。

バツ!

「なに!??」

ホスト達全員が驚愕した。

自分が飛び散った赤いきつねの代わりを持って現れた…。

「なっ、あっ、相棒!??」

「先輩!??」

赤いきつねを持った自分の登場に、陽介、完二が驚く。

自分は雪子の前に代わりの赤いきつねを置く…。

「あち…、じゃなくて…、ふふ…、紹介するわよ…」

雪子は扇を口に当てて笑う。

ちなみに、彼女の足にさっき、床から落ちた赤いきつねの汁が飛び散り、ちょっと熱そうにしている…。

「彼が元ジュネスナンバー2ホストであり、転生したホストクラブ天城屋、アマテラスの新しいナンバー1ホストであり、あたしの新たなる王子様よ…」

「なっ！？なに！！」

陽介を始めとするホスト全員が驚愕した。

「源氏名…、番長…」

雪子は自分をナンバー1ホストとして紹介した。

雪子に紹介され、自分は今日からナンバー1を任された…、皆、よろしく頼む…、とホスト全員に言った。

「あっ！相棒！裏切りやがったな！」

陽介は泣き叫んだ。

今まで、片腕として支えてきてくれたはずの自分がナンバー1ホストの座を奪ったとの現実に、陽介の胸が激しく掻き毟られる…。

果たして、ナンバー1ホストの座を自分にした雪子の狙いとは！？
果たして、何故、自分は大事な親友からナンバー1ホストの座を奪ったのか！？

床にこぼれる赤いきつねのように、八十稲葉の夜は黄金色の暁空を迎えた…。

誰も居なくなった店内に、自分と雪子が残った…。

一緒にポテロングを食べながら、ちなみに、なんで自分に決めたん？と聞いた。

「あみだくじ…」

雪子がポテロングを美味しそうに食べている…。

続かない…

事情により没にしたシリーズ編（後書き）

今回の話を没にした理由：ホストクラブネタした回のアクセス数がやけに低かったため、そっとしておこうと思った…。

テスト内容、地味に難しくね？編

2011年7月25日（月） 晴れ

昼休み

期末テストの結果発表が貼り出されているので、陽介と見に行つた…。

「うがぁー！！まったくわかんなかった！」

「なんで、勉強したところが出ねえんだよ！！！」

「今年の夏も…、補習の夏か…」

提示板前には絶望に打ち拉がれている千枝、一条、長瀬が居る…。そんな三人を見て、陽介は笑った。

「ハハハ！なんだなんだー、お前らー。ちゃんと勉強しねえから、そんな風になんだけー！俺なんか、今回、ちゃんと勉強し…」

「花村、お前、学年最下位だぞ」

と一条が冷静に言った。

「あんがぁー！！？」

陽介は口から、なにか吐いた。

確かに、陽介が最下位と表記されている…。

「こなばなあ！！なんで、めっちゃスラスラ行ったのに！？うっ！名前の書き忘れだど！？」

陽介は提示板にしがみついて泣いた。

…。

そっとおこづ。

さて、自分の順位は…、と泣いている陽介を退かして結果表を見た。

…！？

「こっ！」

「なっ！」

「ばななっ！？」

千枝、一条、長瀬が驚いた。

なんと、自分は学年トップだ！！

翌日 雨

昼間

病院の一室。

ベッドに横たわる少年と、その母親が居た。

少年は虚ろげに窓を眺めている。

「お母さん…、僕、もうすぐ死んじゃうんだろ…」

「そんなことないわ…！」

「嘘だ！知ってるんだ！僕の病気は不治の病なんだって…！」

「そんなことないわ！」

「嘘だ！嘘だ！」

少年は泣き叫んだ。
どうやら、なにか病気を患っているらしい…。
そんな少年の手を母親は優しく握った。

「そうだ…、今日はあなたが大好きな『学年トップ』の人がお見舞いに来てくれたのよ」
「嘘だ！『学年トップ』の人が、僕なんかの見舞いになんか来るもんか！」

少年がそう叫ぶと…。

！？

なんと、病室に自分がスーツ姿で現れた。
少年は驚いた。

「うわあ！本当に『学年トップ』の人だ！！」

やあ、学年トップの人だよ、と自分は少年に挨拶をした。
少年は目を見開いて喜んだ。

「本当の本当に、『学年トップ』の人！？」

無論、と答えた。

「やったあー！！」

少年は元気を取り戻した。
寛容力が高まった。

「うわぁ、サインちょうだい！」

少年にサインにねだられたので、自分はサインボードに『学年トップの人』とサインした。

「やったぁー!!!『学年トップの人』からサインもらったー!」
「よかったわね!」

少年はかなり喜んでいる。

「ねえ、『学年トップの人』?質問していいかな?」

無論、なんでも質問したまえ、と答えた。

「どうして、『学年トップの人』は『学年トップ』になれたの?」

少年はそう質問した。

それに対して、自分はこう答えた。

例えば、学年二位の人と三位の人が居るよね?彼らが学年二位や三位であっても、自分は学年トップなんだ、と答えた。

勇気が高まった。

「すげー、さすが、『学年トップの人』だー!」

少年は尊敬の眼差しで自分を見つめた。

昔はよく学年七位の人からイジメられ、面倒見の良い学年十一位の人の家に泊めてもらったりしたよ、と自分は苦労話をした。
伝達力が高まった。

「へえ…、『学年トップの人』でも、昔は苦労したんだ…」

少年はしみじみとした。

「ねえ！『学年トップの人』！僕も、あなたのような『学年トップ』になれるかな？」

そんな少年の発言を聞いて、プフツ…、と自分は鼻で笑った。

「…」

少年と母親の顔の影が濃くなった。

「センサー！大変だ、クマー！？」

いきなり、背後からクマが現れた。

どうした、と聞いた？

「『学年三位』が、センサーはカンニングしてたと言い張ってるクマー…！」

！？

なんだと！わかった、すぐ行く！！と自分は血相を変えた。

そして、自分は少年に、すまないが、これでオイトマさせていた
だくよ…、と言った。

「うっ、うん！ありがとう、『学年トップの人』！！」

少年は笑顔で自分を見送った。

「センサー！さらに、『学年二位』が連立方程式の途中式での3が5に見えるとも訴えているクマー！」

己「学年二位と三位め！！自分は『学年トップ』だぞ！と叫びながら、病室を後にした。

…。

「」
「」

病室はシーン…、となった。

…。

少年と母親の間に沈黙が流れた。

ちなみに、少年は鯖が当たって入院しただけだ。

日曜夕方6時半は憂鬱テレビタイム編

2011年8月某日(水) 雨

夜

雨が降り続けている…。

テレビになにか映るかもしれない…。

ザー、ザザー！

！？

テレビになにか映った！？

かなり鮮明な映像だ。

テレビには千枝のペルソナ、『トモエ』が映っている！

「トモエでございますー！」

『マヨナカテレビアニメ トモエさん』

『主題歌』歌：自称特別捜査隊

人間捕えたシャドウを追っ掛けてー、眼鏡なしで駆けてくー、陽気なトモエさんー

みんなが(テレビの向こう側から)笑ってるー
黒幕も笑ってるー

るるー、るるー、るるー、るー、雨が降り続けているー

ジュネスに行こうと街まで出かけたらー、財布を忘れてー、花村にツケるトモエさん

みんなが笑ってるー

花村、キレているー

るるー、るー、るるー、るー、霧が出てきてるー

「この番組は、エブリデイ、ヤングライフ、ジュネスの提供でお送り致しますー（CV・里中千枝）」

「致します…（CV・白鐘直斗）」

…。

映像が途切れた…。

ザー、ザザー…!

また、なにかがテレビに映った…!

『マヨナカテレビアニメ クマえもん』

「うわーん…!クマえもんー!」

と、陽介のペルソナ『スサノオ』がクマえもん(?)に泣きつい

てきた…。

「どうしたクマ？スサノオ君ー？」

「ガキ大将…、ていうか、ガキ番長のイザナギと、それに使えるロツテンマオウが僕をイジメるよー」

「なんらと！ゆっ、ゆるさんクマ！」

そう言っつて、クマえもんは自分のぬいぐるみのファスナーを開いて、なにか一枚のカードを取り出した…。

「マールさんー！！」

クマえもんは、ペルソナカード『マール』を取り出した。

「イザナギとロツテンマオウの前で、このカードを出すクマ。すると、マールさんが助けてくれるクマよ」

「うわー！ありがとうー、クマえもん！」

スサノオはマールのカードをもらい、街中に出て行った。
スサノオが空き地に行くと…。

「あっ、スサノオだ！」

「うわっ！イザナギに、ロツテンマオウー！！」

イジメっ子のイザナギとロツテンマオウの姿が…。

「ちょうど良かった！新しく覚えたメギドランの威力をためさせる
ー！！」

とイザナギがスサノオに迫った。

「うわー！そうだ！クマえもんに渡された、このカードで…、えい！」

スサノオはペルソナカード、『マール』を取り出した。
そして…！

ガチャーン！！

！？

なんと、マールが現れた！

「！？」

数分後…。

空き地で、イザナギとロツテンマオウが正座をさせられている…。
マールは、そんな正座をしている二人の前に立った。

「ええか？おまえら…、おっちゃんはな、怒りたくて怒っとるんやないで…」

マールはタバコをふかしながら、イザナギ、ロツテンマオウに説教をしている。

「おはんらが、弱い者イジメしとるゆーから…」

「あの…」

説教中のマールに、イザナギが手を挙げた。

「なんや！？今、人が話しとるやんけ！黙ってきかんかい！まった

く！お前らは、まだ若手のペルソナやる！？こっちは、まだ初代P
S、セガサ ーンが現役の頃から女神転生シリーズで悪魔、ペルソ
ナとして、アト スさんから飯食わしてもらってんやど！！今や、
立派な中堅ペルソナやど！！」

マールは激怒して、血管を浮き上がらせた。

「ええか！おっちゃんはな、昔、人々から『ご立派様』、『ご立派
様』と呼ばれ続けな…」

すると、イザナギが…。

「見た目が、ご立派なセクハラってことツスカ？」

と手を挙げて言った…。

「なんやと！コラ！？先輩に対して、よくそんな口叩くんか！？人
が優しく説教しておれば…！ド頭、カチ割ったるで、この学ラン！
！」

イザナギの言葉に、マールが全身に血管を浮き上がらせてキレた！
だが、イザナギはとっさにマールに向かってメギドランを放った
！！

アベサアーン！！という激しい衝撃音を残して、マールは消え去
った…。

「
…」

クマえもん、完

…。

映像が途切れた…。

イゴさん!!編

2011年7月某日(月) 雨

夜

今週一杯は、雨続きらしい…。
雨が降り続けている…。
テレビになにか映るかもしれない…。

ザザー、ザー!

テレビになにかが映った!
かなり鮮明な映像だ!!

『イゴールアワー 笑って良いでしょう!?!』

マヨナカタイムはウキウキウオッチ〜 あちこちそちこち、良い
でしょう〜

軽快なメロディと、ベルベットルームをバックに、イゴールが現
れた…。

「こんばんは…。イゴールです…」

イゴさん!との、黄色い観客達の声がどこからか聞こえる…。
そして、イゴールは椅子に座った。

『マヨナカテレビショッピング』

タイトルバックが出てきた…。

「ペルソナの輪で広がる『マヨナカテレビショッピング』のコーナー…。こちらは、アシスタントのマーガレットです…」

「マーガレットです…。お見知りおきを…」

イゴールに紹介され、マーガレットが挨拶をした。

「先週の金曜ゲストの『オルフェウス』さんからの紹介で、今日のゲストは『イザナギ』さんですー」

とイゴールに呼ばれ、イザナギが紙袋と名札を持ってベルベットルームに現れた。

「どーも、イゴさん。イザナギですー。これ、八十稲羽のビフテキス(CV・浪川 輔)」

イザナギは紙袋をイゴールに渡すと、同じく椅子に座った。

「イザナギ君？髪切った？」

「いや、切ってないツスよwwwていうか、切れないツスwww
ww」

「オルフェウス君からのメッセージで『またタルタロスに、ラーメン食べに行きましょう』だそうです」

「どーも、オルフェウス君！」

「オルフェウス君と仲良いの？」

「ええー、オルフェウス君、前作の主演ペルソナなんで、今回、4の主演ペルソナに選ばれた僕に色々アドバイスくれるんツスよー。

めっちゃ、いい人ツスよー。『合体素材』になるの覚悟しとけとか
www

「おほほ…」

「あと、君、弱点が一個でいいね…、とオルフェウス君に言われま
したwww」

イザナギは画面越しに、オルフェウスに手を振った。
すると、イゴールが…。

「えーと、そろそろ…、お友達の紹介を…」

「はやつ！」

どうやら、もう尺が迫ったらしい…。

観客達が、ええー？と叫んだ。

「ありがとうツスwww」

イザナギが観客達に手を振った。

「えーと、じゃあ、ジライヤで…」

イザナギがそう言うと、きゃー！と観客達が騒ぎ始めた。
マーガレットが、イザナギにコードレス電話を渡した。

「あっ、もしもしー。ジライヤ？」

イザナギはジライヤに電話を繋いだ。
すると…。

「いやったあー！…ついに、『良いでしょう！?』出演だ！…（C

V・森久保 太郎)

電話の向こうのジライヤは、『良いでしょう!?!』に出れて喜んでいる…。

イザナギはイゴールに電話を渡した。

「火曜…、来てくれますかな…?」

「良いでしょう!?!?!」

とジライヤは叫んだ。

「お待ちしております…!」

パチパチ!と観客達が拍手をした…。

…。

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

翌日(火) 雨

夜

またマヨナカテレビには、『笑って良いでしょう!?!』が…。

『マヨナカテレビショッピング』

「えーと、昨日のイザナギ君からの紹介で…、ジライヤ君です。ど
うぞー」

とイゴールに呼ばれ、ジライヤが紙袋と名札を持ってベルベットルームに現れた。

「やつほー！イゴさん。ジライヤですー！これ、ジュネスブランドのTシャツス」

ジライヤは紙袋をイゴールに渡すと、同じく椅子に座った。

「ジライヤ君、髪切った？」

「切りました…。って！切ってないのwww」

「イザナギ君からのメッセージで『なんで、あのとき身代わりになつてくれなかった…』だそうです」

「ごめーん、イザナギっち！」

「イザナギ君と仲良いの？」

「ええー、イザナギっち、こないだ、お前らは『合体素材』にならなくていいよな…。って愚痴ってましたwww」

「おほほ…」

「なんか、俺だけ転生しないとかも言っていましたwww」

すると、イゴールが…。

「えーと、そろそろ…。お友達の紹介を…」

「はやつー！」

どうやら、もう尺が迫ったらしい…。

観客達が、ええー？と叫んだ。

「えーと、じゃあ、トモエっちで…」

ジライヤがそう言うと、きゃー！と観客達が騒ぎ始めた。マーガレットが、ジライヤにコードレス電話を渡した。

「あっ、もしもしー。トモエうち？」

ジライヤはトモエに電話を繋いだ。すると、トモエが電話に出た。

「あたし、転生してスズカゴゼンなんだけど…（CV・堀江 衣）」「うそ！いつ転生したの！」

驚きながら、ジライヤはイゴールに電話を渡した。

「水曜…、来てくれますかな…？」

「良いでしょうー！！？」

とトモエ改め、スズカゴゼンは叫んだ。

「お待ちしております…！」

パチパチ！と観客達が拍手をした…。

…。

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

翌日（水） 雨

夜

またマヨナカテレビには、『笑って良いでしょう!?!?』が…。

『マヨナカテレビショッピング』

スズカゴゼンとイゴールがトークをしている。
すると、イゴールが…。

「えーと、そろそろ…、お友達の紹介を…」
「はっつ!」

どうやら、もう尺が迫ったらしい…。
観客達が、ええー?と叫んだ。

「えーと、じゃあ、次はロツテンマオウ君で」

スズカゴゼンがそう言うと、きゃー!と観客達が騒ぎ始めた。
マーガレットが、スズカゴゼンにコードレス電話を渡した。

「あっ、もしもしー」
「もしもし…」

スズカゴゼンはロツテンマオウに電話を繋いだ。
そして、イゴールに電話を渡した。

「木曜…、来てくれますかな…?」
「いいの、ホイホイ誘っちゃって?(CV・関一)」

明日は、ロツテンマオウが来るようだ…。
パチパチ!と観客達が拍手をした…。

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

翌日（木） 雨

夜

今日は寝ることにした…。

翌日（金） 雨

夜

またマヨナカテレビには、『笑って良いでしょう!?!』が…。
気のせいか、イゴールがゲッソリしている…。

『マヨナカテレビショッピング』

「えーと、昨日のロツテンマオウさんからの紹介で…。いたた…、
ヒミコさんです。どうぞー」

何故か、腰を押さえているイゴールに呼ばれ、ヒミコが紙袋と名
札を持ってベルベットルームに現れた。

「どうも、みなさんー！ヒミコでえーすー！これ、りせちーフィギ
ユアー（C.V.くぐれね）」

ヒミコは紙袋をイゴールに渡すと、同じく椅子に座った。

「髪切った？」

「切りましたー。アナライズをより正確にするためー」

「ロツテンマオウ君からのメッセージで『女には興味ない…』だそうです」

「だからなに…？」

すると、イゴールが…。

「えーと、そろそろ…、お友達の紹介を…」

「はやつー！」

どうやら、もう尺が迫ったらしい…。

観客達が、ええー？と叫んだ。

「えーと、じゃあ、キントキドウシちゃんデー」

ヒミコがそう言つと、きゃー！と観客達が騒ぎ始めた。

マーガレットが、ヒミコにコードレス電話を渡した。

「あっ、もしもしー」

ヒミコはに電話を繋いだ。

するど…。

「うほほーいいー！…ついに、『良いでしょう！？』デビューだクマ

ー！…！(C.V.出口(平))」

ヒミコはイゴールに電話を渡した。

「来週の月曜…、来てくれますか…？」

「行くクマー!?!」

「…」

「行くクマー!?!」

「…」

キントキドウシは、あの言葉を叫ばなかった…。

…。

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

オチは？

完!!

イロサーン！編（後書き）

コノハナサクヤがハブられてる件については…。御察し下さい…。

番長文学集編（前書き）

ペルソナ4の小説（公式）、購入記念作品。

番長文学集編

同人誌ペルソナ4文集『落ち着け』（四目内書房刊）

「我輩は番長である」

我輩は番長である。

理由？

そんな食べ物しらんクマ。

「走れジュネス」

ジュネス（陽介）は走った。

熊田さん…、家電コーナーで暴れていますよ…。

ジュネスは激怒した。

これ以上、俺の気苦労増やすなど。

「肉の踊り子」

千枝は肉を食べた。

彼女は肉で世界を変えられると、本気で信じているからだ。

「注文の多い天城屋」

先輩！ニンジン、もっと細く切ってください！

ニンジンを切る雪子を見て、完二は叫んだ。

大丈夫。

雪子はニンジンを切り始めた。

先輩！ニンジン、四角いッス！

完二はまた叫んだ。

うるさいな…。

雪子は包丁を構えた。

「ああ、ウホウ」

ウホウ！と叫びながら、完二は本当の自分を曝け出した。

ウホウ！ウホウ！

完二は嬉しそうに叫んでいる。

ウホウ！ウホウ！ウホウ！

よく見たら、ゴリラだった。

「八十の瞳」

八十稲羽市にあるマルキュー豆腐店。

ここでは、今日もおばあちゃんが元気にお豆腐を作り続けている。

『豆腐』

不況に煽られ、荒んで行く現在社会と食生活において、低カロリー、高たんぱく、ミネラル豊富な豆腐は、まさに救世主。

今や、日本の食生活においてなくてはならない食品の一つである。街角の八十稲羽市の市民に、豆腐について訊ねてみました。

・あーっ、ガンモ旨いつすよね。あれ餅入ってるっけ？（ジュネス、Y・H氏）

・そんなことより、肉はないのかよ、肉は（高校生、T・S）

・豆腐と言えば、お揚げ…、お揚げと言えば…、あたしのお揚げ…

（女子高生女将、Y・A）

・豆腐ツスカ…。豆腐…。いや…。豆腐…（高校生、K・T）

・弾ける！汗！飛び散る豆腐！着慣れない浴衣が着崩れて…。夏…

（ジュネス店員、K）

・えっ？なんですか？豆腐…。待てよ…。豆腐と言えば…。ほら？

覚えてますか！ポートピア殺人事件の犯人は…（少年探偵、N・S）

・落ち着け（ペルソナ4主人公）

さあ、あなたもレッツ！豆腐トライ！！

『マズイ門』

カレーは甘いとか、辛いとかだろうが！？これにくせえーんだよ

！！

うおん！まるで溶岩のように辛い…。舌の上で鈍痛がしてきた…。

なんていうか、おふを生で噛ったみてえな…。
うん、普通にマズイ。

『八十墓村』

崇りじゃー。

崇りじゃー。

崇りじゃー。

たぶん、シャドウの仕業だ…。

『罪と罰』

ペルソナ2のタイトル。

『フランダースの番長』

イザナギ…、疲れたろう…。

僕もなんだか疲れたよ…。

だから、今日はもう早めに休むことにした。

番長文学集編（後書き）

かなり遅れましたが、ペルソナ4発売してから一周年経ちました…。
おめでとございます！

それ以上いけない編（前書き）

いつもは主人公視点で話が進みますが、今回は、違う第三者目線での展開になりますので、ご理解下さい。

それ以上いけない編

2011年8月某日（水） 曇り

昼間

俺の名は、井の頭公園ジロー。

今日はだいたらさんとの商談のため、八十稻羽商店街に訪れたが、オヤジさんが話を聞いてくれなかったので、まったくの無駄足だった…。

それに最近、殺人事件とか物騒な事件が起きたせいか、よそ者に対する周りからの視線が冷たい。

とにかく腹が減っていた…。

しかし、目につくような店が見当たらない…。

焦るんじゃないジロー…。

俺は腹が減っているだけなんだ…。

しばらく歩くと、愛屋という中華料理屋を発見した。

雨が振り出しそうな天気になってきたし、他に入れそうな店もない…。

仕方ない、ここで食事をしよう。

「いらつしゃいー!」

店に入ると、中には店主。そして、カウンター席に緑のジャージを着た女の子が一人居た。

適当にテーブル席に座り、メニューを見た。

どう見ても、普通の中華料理屋のメニューだ…。

バーコー麺…。

なになに、最初から麺を打つため、かなり時間が掛かる…？
これは気になる…。
すると、カウンター席の女の子が手を挙げて注文し始めた。

「オヤジさん！肉丼大盛り一つに、肉豆腐、肉餃子に…。ていうか、名前に肉の付くもの全部」

！？

肉と肉が被ってるぞ、この女の子！！

というか、一人で全部食べる気なのか！この子！？

まあ、いい…。

自分も店主に注文することにした。

バーコー麺に、チャーシューメンを注文した。

注文は的確にハッキリと言うのが、俺の信条だ。

じゃないと、店員に聞き返されるからだ。

「アイヤ？ごめん、もう一回言って？」

…。

改めて、もう一回言った。

「バーコー麺、時間掛かるアルよ？」

店主が聞き返してきた。

構わないと答えた。

待つのも食事の楽しみ方の一つだ…。

(3時間後…)

翌日（木） 晴れ

昼間

警察署から解放された…。

にしても、腹が減った…。

先日から、なにも食べていない…。

しばらく歩くと、ジュネスがあった。

ここのフードコートで食べることにした。

エレベーターに乗り、フードコートに向かった。

到着すると、日差しが強く、汗が出た。

すぐに自販機で、胡椒博士NEOを購入。

そして、一気にごくっ！ごくっ！と喉に流し込む。

このわざとらしい、胡椒味…！

すると、元気のいい女の子の声が聞こえた。

「さあ！肉で熱い夏を乗り越えましょう！肉はあなたを裏切らない
っ…！」

昨日、愛屋に居た女の子がフードコートでアルバイトをしている。

そして、厨房内では変なクマみたいな着ぐるみが焼きそばを作っ
ている…。

うむ…、なにを頼もうか…。

フードコートの受け取り口に近づいた。

「いらっしゃいますー。お客さん、なにします？」

あの女の子が注文を聞きに来た。
オススメはなにか？と、聞いてみた。

「オススメは、やっぱり、肉っ！肉は人を、人類を、世界を、宇宙を、銀河を…、天限突破に裏切りませんよー！！」

女の子は、かなり熱く肉を勧めてきた…。
なので、ビフテキを頼むことにした。

「毎度ありー！クマ君ー、ビフテキーっー！」
「了解クマー。少々、お時間掛かるクマよー」

厨房の着ぐるみが、そう言ったので座って待つことにした。

（五時間後…）

まだかよー！！

もう五時間も経ってるし！

昼間

警察署から解放された俺は泣きながら、八十稲羽商店街を歩いた。ちくしょう…、俺が…、俺が…、なにをしたってんだ…。ちくしょう…、一昨日から、なにも食べてないじゃないか…。商店街近くの駐車場に止めていた車を取りに行こうとした時…。

「あっ！昨日のお客さん！！」

！！

昨日の肉の女の子と、偶然に会った。女の子は申し訳なさそうな顔をして…。

「昨日は、ごめんなさい…。あたしが番号札忘れたばかりに…。これ、お詫びと言っちゃなんですが…。お惣菜屋さんの特大ビフテキ串です…」

と言って、女の子は特大ビフテキを渡し、そのまま去って行った。…。
食べてみた…。

うっ、旨い！旨すぎる！！

固く筋張ったビフテキが、五臓六腑に染み渡る！！

思わず、涙が出てきた…。

天使だ…。

うおん！あの緑のジャージの女の子は、肉の天使や…、肉神様や

！！

俺は周囲を気にせず、特大ビフテキ串を泣きながら食べた。

ブローローン!!

ビフテキ串に感動したあと、俺は車を動かした…。

あれ、ガソリンが少ない…。

MOEL石油でガソリンを詰めることにした。

「らっしやーせー!!」

ガソリンスタンドの店員が出てきた。

ハイオク満タンを頼んで車から降りると、ガソリンスタンドの店員が近づいてきた…。

「お客さん、どちらか…」

ガシィ!!

気がつくと、俺はガソリンスタンドの店員にアームロックを決めていた。

しばらく歩くと、ジュネスがあった。

こここのフードコートで食べることにした。

エレベーターに乗り、フードコートに向かった。

到着すると、日差しが強く、汗が出た。

すぐに自販機で、ペシシそ味を購入。

そして、一気にごくくっ！ごくくっ！と喉に流し込む。

このわざとらしい、しそ味…！

うおおおおえええー！！！！

ビチャビチャー！！

それ以上いけない編（後書き）

元ネタ『孤独のグルメ』…。美味し
ぽより好きです、このマンガ。

振り返れば番長が居る…編

2011年7月某日（金） 晴れ

昼間

八十稲羽駅から降りた陽介が紙袋を片手に、そわそわしていた…。かなり挙動不審になっている。

「ど…、ど…しよ…」

陽介は脂汗を流した…。

そして、チラッと紙袋の中身を見た。紙袋の中身は美少女フィギュアだ…。

「ちくしょう！！沖奈市に行った途中、寄ったコンビニで、ちよつとエツチなマンガ『Z・L・O・V・Eるっ!?』のくじやってたから、冗談で一回引いたら、まさか一等賞のフィギュアを当てちまうなんて…！」

陽介は美少女フィギュアを手に入れてしまった理由を、わかりやすい独り言で説明した。

しかも、その美少女フィギュアは、かなり露出度が高い…。だから、陽介は挙動不審になっていた。

陽介は頭を抱える。

「不味い…。こんな物を…、持ち歩いている姿を仲間達に見られたら…」

陽介はガクガクと震えた。

「とりあえず…、誰とも接触せずに帰宅しなきゃな…」

陽介がそう思った瞬間…。

「あっ…！はっ、花村！？」

！？

なんと、タイミング良く駅から、一条が現れた。

「いつ、一条おおおお！！！」

誰とも会わないと誓った瞬間のタイミングだったので、陽介はビツクリした。

「どっ、どうした？花村！？」

あまりの驚きっぷりに、一条も驚いた。

「あっ、なんでもねえから！アハハ、アハハ！」

「そっ、そっか…！」

陽介は紙袋を背後に隠した。

「！」

一条の片手をよく見ると紙袋があった…。

「いつ、一条…。その紙袋なんだ？」

そう言った瞬間、一条はビクツ！とした。

「あつ！いや、なんでないから！」

一条も紙袋を背後に隠した…。

「ていうか、花村も、なんか背後になんか隠したじゃんか！なにそれ？」

「なんでもねえから！マジ、なんでもねえから！」

陽介は脂汗をたくさん流した。

一条も…。

「…」
「…」

重い空気が流れた…。

二人は無言で、背後に紙袋を隠しながら睨み合った。
すると…。

「おーっす！花村に、一条君じゃん！なにやってんの？」

「げっ！里中！」

「さ、里中さん！！！」

！？

陽介と一条は絶句した。

なんと、さらにタイミング悪く、千枝が二人の目の前に現れた。

「人の顔見て、げっ！とはなによ…、あんたら…。っーか、なに駅

の前で睨み合ってたのよ…」

まさかの千枝の武力介入に、陽介、一条は滝のように汗を流す。
そして…。

「あれ？二人とも、後ろになに隠してんの？」

！？

なんと、千枝は陽介と一条の背後にある紙袋の存在に気付いた。

「ロックオン！」

「ストラトス！」

陽介、一条は妙な叫び声を上げた。

「なになに？見せて、見せて」

千枝は、二人が持っている紙袋の中身に興味を持ってしまった。
そして、千枝は陽介の背後に近づいた。

「なんでもぬえから！！マジ、なんでもぬえから！！本当に、なんでもぬえからああああああ！！！！」

陽介は、まるで断末魔のように凄まじい叫び声を出した。

「なんでもないなら、見せろってーの」

千枝は強引に陽介の手にある紙袋を掴んだ。

「うわああああ！！バカ！触るなあああああ！！！！！！マジや

めろおおおお!!」

陽介は泣き叫んだ。

「なんで、なんでもないので泣くのー?」

陽介は千枝の手から紙袋を離そうと、おもいつきり紙袋を引っ張った。

しかし、千枝は好奇心と負け気からか反発した。

陽介と千枝は紙袋を引っ張りあつた。

「さっ、里中さん!やめなよ!なんか、花村が可哀想だよ!」

一条は泣き叫ぶ陽介に同情してか、千枝を止めようとフォローに入った。

しかし、その際、一条は握っていた紙袋を手から滑らせた…。

ボスン…

一条は紙袋を地面に落とした…。

「あっ…」

一条が落とした紙袋から、美少女アニメキャラのフィギュアが顔を覗かせた…。

それを見た千枝は、固まった…。

これは、陽介と同じくコンビニくじの景品、『ZOOLOVEるっ!?』の美少女フィギュア…。

どうやら、一条も冗談でやって、美少女フィギュアを当ててしまったらしい…。

「いつ、一条君……。なっ、なにそれ……」

「ちがつ！違う、誤解だよ！里中さん！」

一条は必死に弁解しようとしている……。

ビリッ……

すると、千枝と陽介が引っ張っている紙袋がビリビリ……、と破れ始めた。

二人で引っ張りあっていたため、紙袋が耐えられなくなったのだ……。
そして……。

ビリッ！

とうとう、陽介の紙袋が破れた。

「あっ……」

中から美少女フィギュアが飛び出した。

ポスン……

地面に美少女フィギュアが転がった。

「……」
「……」
「……」

陽介、千枝、一条の時間が停止した。

鮫川

河原には体育座りをした陽介と一条の姿があった。
二人の横には破れた紙袋と、美少女フィギュア2体…。

「なあ、一条…。里中の奴…、マジでドン引いてたな…」
「ああ…。アレは、マジでドン引いてる目だった…」

陽介と一条は遠い目をしながら、先ほどの千枝の反応を思い返した。

「なにが一番辛かったってたら…、里中の奴…、普通に謝るもんなあ…」
「うん…。むしろ、こっちが謝らなきゃならないのに…。なんか、里中さん、普通に謝るから…、辛かったよ…」

陽介、一条は頭を抱えた。

「うがああああ！みんなに合わせる顔がねえよ！！」
陽介は泣き叫んだ。

「うつつ…、さっ、里中さんにき、嫌われた…。くっ、うわあああああ！！」

一条はマジ凹みしながら、泣き叫んだ。

そして…。

「俺たちはダメダメ人間だあ！！」

陽介、一条は声を揃えて叫んだ。
すると…。

二人の背後から、あれ、陽介と一条じゃないか？との声が聞こえた。

「この声は相棒？」

陽介、一条は声に気付いて振り向いた。

二人の背後には、ふんどし姿の裸で銚子を片手に浮き輪を着け、もう片方の手にはランカ・リーのフィギュアを持って仁王立ちする自分の姿があった。

陽介、一条は固まった。

これから鮫川で魚を捕まえるんだが、君らもやる？と自分は二人を誘った。

「「いいえ……」」

陽介、一条は横に首を横に振った。

そうか…、と言いながら、自分は鮫川に飛び込んだ。

バツシャー！

陽介、一条はそんな自分を見つめた。

「「俺たち、ダメじゃないかも……」」

二人は一瞬で立ち直った。

スイカ!もぎれ!ピーム編(前書き)

今回の話はネタバレが含まれていますので、『生田目を
た』場合は…、今回の話を飛ばしてください。
に

スイカ！もぎれ！ピーム編

2011年某月某日（土） 曇り

昼間

直斗とりせが街中を歩いていると…。

「救うんだ…、俺が救うんだ…」

いきなり生田目が2人の前に現れた。

！？

生田目がりせと直斗に襲い掛かってきた。

「またまた、来たよ…」

「またまた、あなたですか…」

りせ、直斗が冷静に嫌そうな顔をした。

「千円あげるから…。とりあえず、適当に叫んで…」

「お金はいいよ…。仕方ないなあ…」

「わかりましたよ…」

と生田目の頼みを、二人は嫌々承諾した。

「きゃあああ！！助けて！！」

りせが叫んだ。

すると…、誰かの足音が…。

「待てい!!」

と誰かが叫んだ。

「誰だ!? 邪魔をするな!」

生田目が振り返ると、そこには陽介、千枝、雪子、完二、クマ、5人の姿があった。
すると…。

「アカレンジュアイ!!」

と制服を着た陽介がポーズを決めた。
次に、制服の完二が…。

「アオレンジュアイ!」

と盾を持ってポーズを決めた。
次に、千枝が緑のジャージを着て前に出た。

「ミドレンジュアイ!」

と千枝はポーズを決めた。
次に、クマが着ぐるみで…。

「キレンジュアイ!クマ!」

とポーズを決め叫んだ。
次に、雪子が紅いカーディガン姿で前に出た。

「モモレンジュアイ！」

と扇を持って、雪子がポーズを決める。

「5人揃って、ジュネス戦隊！」

と陽介が言ったのに続いて、みんなが叫んだ。

「…………ペルソナレンジュアイ！」…………

そして、全員でポーズを決めた。

「…………」

生田目が呆然としている…。

「さあ！早く逃げるんだ！！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

と陽介が、りせと直斗を逃がした。

そして、全員で生田目に向かい構えた。

「さあ、靴あとだらけになりたいのは誰！」

「覚悟なさい！」

「行くぜ！」

「ボッコボッコにするクマー！！」

と千枝、雪子、完二、クマが生田目を睨んだ。

すると…。

「あれ？一人、少ないけど…。いや、戦隊物は大概、5人だけどさ…。いつも仮面ライダーで現れる少年は？」

生田目がそう言った…。

確かに、6人目の自分が居ない…。

すると、陽介の血管が浮き上がった。

「おめえーがこないだから、あいつばつか責めっから、あいつ凹んで今日来なかつたぞ！！」

「ええ…！！！！」

陽介の言葉に、生田目は衝撃を受けた。

「そうよ！！リーダー、意外と繊細なんだから！！」

「さりげない一言が、人を傷つけるのよ！！」

「てめえ、覚悟できてんだろうな！！」

「許さんクマ！！」

怒り心頭の千枝、雪子、完二、クマは、凄い気迫で生田目を責めた。

「ちょっと、待て！僕は一般的な意見をだね…」

生田目は必死に弁解したが…。

「一般的な意見なら、人を傷つけてもいいのかよ！！」

陽介にキレ返された。

雪子はコノハナサクヤのカードを握る。

「絶対許さない…!」

「ちよっと、それはダメだって!!雪子!!」

「離してよ!千枝!」

雪子は千枝に止められた。

「…」

生田目は言葉を失った。
すると…。

!?

みんな、どうした?と、アロハシャツ姿の自分が普通にホームランバーを食べながら、みんなの目の前に現れた。

陽介、千枝、雪子、完二、クマ、生田目は驚いた。

「あつ、相棒!!」

「リーダー!!」

「今まで、どこ行ってたのよ!!」

「心配したツスよ!!」

「センサー!センサー!」

陽介、千枝、雪子、完二、クマは目を潤ませながら、自分に抱きついた。

おいおい、どうしたんだよ…?今日は、思いっきりオフを楽しんでただけなのに、と自分は笑いながら言った。

「
…」

生田目は呆然とした。
全員で生田目に頭を下げた。

「お疲れさまでしたー」

「えっ、ああ…、お疲れ…」

こうして、みんな現地解散した…。

よくことを理解できない生田目だけが残った…。

「
…」

すると、自分が生田目の目の前に現れた…。
自分は無言で生田目にスイカバーを渡した。

「あっ、ありがとう…」

生田目はスイカバーを食べた。

キミの記憶編 特別編 (前書き)

今回登場するキャラクターについては作者仕様の独断や偏見になっており、不快に思われる描写や表現があります。以上を理解された上、作者をテレビの中に突き落とさないという約束出来る方向でお願いします。

キミの記憶編 特別編

2011年8月某日(土) 晴れ

昼間

ジュネスでのアルバイトの休憩中。

陽介が千枝とクマと自分を倉庫裏に呼び出した。

「なによ、いきなり、んな暗いところに呼び出して…」

千枝は嫌な顔をした。

「ヨースケ…。クマは…。覚悟出来てるクマよ…。優しくお願いしますクマ…」

クマは顔を赤らめながら、着ぐるみを脱ぎ始めた。

「殴られる覚悟か？」

陽介が拳を鳴らすと、クマは着ぐるみを脱ぐのをやめた。

そして、陽介は懐から、懐中電灯を取り出して顔に光を当てた。

「どーも…。陽介アワーのお時間です…」

「誰の真似だよ…」

わけのわからない陽介の行動に、千枝は戸惑った。

陽介は顔にライトを当てながら、淡々と話を始めた。

「実はさつき、バイト仲間から、すげー『怪談話』を聞いたんだがな…」

！？

「えっ！」

「クマッ！」

千枝、クマは驚愕した。

自分は顔を赤くして、こんな時に『Y談』なんてやめるよ…、と言った。

千枝とクマは白い目で陽介を見つめながら、本当、やーね…、とヒソヒソ話をした。

「Y談じゃねえ！怪談だ、バカヤロウー！！」

陽介は叫んだ。

気を通り直して、陽介はまた話を始めた。

「えーと、その怪談つてのは…、商店街の神社があるだろ…？あそこ…、夜に出るって話だぜ…」

「えっ、なっ、なにが…」

千枝は苦い顔で聞いた。

すると、陽介は一呼吸して口を開いた。

「ユーレイが…」

！？

自分、千枝、クマは驚愕した。

陽介は更に話を進める…。

「そのユーレイってのは…、なんか前髪が長く、俺らぐらいの年頃の男の子のユーレイでな…。夜になると…、釘バットを片手に人を…」

「や、やめなよ！花村！」

「怖いクマ…！」

千枝とクマは、陽介の話にブルブルと体を震わせた…。

「なあんてーな！まあ、これホラ話だって、ホラ話。怪談だけに、ホラー話…。なんつてー、アハハ！」

陽介は懐中電灯のスイッチを切って笑った。

脅かすな…、と自分は言った。

「アハハ、悪い、悪いー」

陽介はしたり顔で笑う。

「チエちゃん！オバケ怖いクマー！」

「うわっ！」

クマは恐怖のあまり、千枝の足に抱きついて震え上がった。

「ちょ、クマ君！離れなさいよ！」

千枝の顔が赤くなった。

「チエちゃんの足…、まるで大根みたいに、太くたくましいクマね

「

とクマは千枝の足の感想を言った。
…。
クマの顔面が靴あとだらけになった。

夜 晴れ

ジュネスの今日のアルバイトを終え、自分は帰宅路の商店街を一人歩いていた…。

歩いている途中、神社の前を通った。

自分の脳裏に、さっきの怪談話が思い出された…。

前髪の長い、釘バットを持った男の子…。

まさか…、馬鹿馬鹿しい…、幽霊なんて居るわけが…。

!?

すると、自分の背後になにかを感じた。
なんだ?と思い、振り向いた!
そこには…。

「コーン!」

神社のキツネが居た…。

なんだ、脅かすな…、と自分は息を吐いた。

「コーン！」

キツネは自分の周囲を走り回った。

ハイハイ…、また今度な…、とキツネに言った瞬間…。

スタツ…

！？

また、自分の背後から人の足音が聞こえた。

キツネの仲間か？と思い、振り向くと…。

…。

前髪の長い、釘バットを持った少年が居た。

…。
…。
…。
…。
…。
…。
…。
自分は固まった。

少年ははつきりとはなく、まるでペルソナのように透けて見える…。

しかも、陽介の話通りの姿…。

少年の登場に放心状態になった…。

そんな自分をよそに釘バットを持った少年が、刻一刻と自分に迫る…。

そして…。

「君…、訊ねたいことがあるんだが…」

へっ…？

透けた少年は、普通に話し掛けてきた。

「道に迷ってね…。ここはどこだ？辰巳ポートアイランドは、ここからどう行ける？こないだから、いろんな人に聞いてみたんだが…、話しかけても気づかないか、逃げてしまう…」

少年はキョロキョロと周囲を見渡しながら聞いた。

…。
…。
ここは八十稲羽で…、辰巳ポートアイランドは電車で行けるけど…、ここ田舎だから、もう終電はないかな…、と自分は言った。

「そうか。まあ、お盆に間に合えばいいからな…」

少年は残念そうな顔をした。

…。

どこから、どう見ても…、少年は透けて見える…。

何故、透けている…。

まさか、彼はユーレイ…。

いや、世の中、ペルソナやシャドウが存在しているんだ…。

もしかしたら、ユーレイじゃなく、ただの透けている人かもしれない…。

世の中、広いんだ…、透けてる人ぐらい居るさ…。

意を決して、なんで透けてるの？と少年に聞いてみた。

すると…。

「ユーレイだから」

ほらあ、やっぱり、ユーレイだった！ペルソナやシャドウは存在しても、透けてる人なんか存在しないよねー！と、自分は生まれて初めて全力でセルフツッコミをした。

…。

しかし、あまりにもハッキリと見えすぎていて、怖くはなかった。

とりあえず、自己紹介をした。

「やや…、ユーレイになってから、自己紹介されたのは初めてだ…」

少年がそう言った。

「自分は、キタロー（仮）。通りすがりのユーレイだ」

ああ、よろしく。と自分とキタロー（仮）は握手した。

コーレイのキタロー（仮）との間に、ささやかな絆の芽生えを感じた。

というか、何故か、初めて会ったとは思えない妙な親近感があった…。

！

そつだ、これもなにかの縁だ、今日、自分の家に泊まらないかと？と、キタロー（仮）に聞いてみた。

「どうでもいい…」

それって、拒否しないってことだなよな…。

…。

とりあえず、釘バットを置かないか。とキタロー（仮）に言った。

「やや…、釘バットを置けだど？」

キタロー（仮）は、ムツとなった。

なにかマズイことを言ってしまったのだろうか…。

「いいよ」

キタロー（仮）は釘バットを捨てた。

…。

なんだ、この下り…。

掴みづらい奴だな…、と思った…。

じゃあ、ついてこいとキタロー（仮）に言った。

キタロー（仮）は耳にヘッドホンを当て、首に下げているポータブルプレイヤーのスイッチを押した。

…。
キタロー（仮）のヘッドホンから漏れる音楽は、2、3年前の『Burn my Dream』という曲だ…。
…。
1、2年前くらいに亡くなったのか…？

堂島宅

「あっ、お帰りー」

帰宅すると、菜々子が出迎えてくれた。

「お邪魔します…」

キタロー（仮）はヘッドホンを外して、菜々子に挨拶した。

「あれ？お兄ちゃんのお友達？」

そんなところだ、と菜々子に言った。

菜々子にも普通に見えているようだ…。

「…」

…！

菜々子の表情をよく見たら、暗い…。

なにかあったのだろうか…。

「やや…、元気がないようだが…、どうかしたのか？」

と、キタロー（仮）が菜々子に聞いた。

「へっ…？」

菜々子は驚いた。

…。

そういえば、堂島が居ない…。

確か、今日は帰ってくる予定だったが…。

「あっ…、えつとね…。今日、お父さん、夜にジュネスに連れてってくれる約束だったんだけど…。お仕事で…」

どうやら、今日、菜々子と堂島はジュネスに行く約束をしていたらしいが、仕事でダメになったらしい。

「なに？ジュネス!？」

キタロー（仮）がジュネスに反応した。

「ジュネス…。ジュネスとはなんだ？」

知らねえで反応したのか…。

「お父さん…、お仕事だし…、仕方ないよ…」

そう言う菜々子の表情は沈んでいる…。
すると…。

「よし！菜々子とやら！ジュネスとやらに連れて行ってやるっ」

!?

なんと、キタロー（仮）は菜々子を今から、ジュネスに連れていくと言った。

「えっ！いいの!？」

菜々子は目を見開いて驚いた。
ダメだと言える状況ではない…。

「やったー！ありがとうー！」

菜々子は喜んでいる。

「そっだ？お名前は？」

「キタロー（仮）と呼びたまえ」

菜々子とキタロー（仮）は意気投合している…。
自分、菜々子、謎の幽霊、キタロー（仮）の三人でジュネスに行くこととなった…。

ジュネスの食品売場。

菜々子とキタロー（仮）は、楽しそうに話をしている。

「エビデイー、ヤンライフ、ジュネスー」

と菜々子が歌うと…。

「海老で、ヤングジャンプ？なんだ、その歌…」

キタロー（仮）が、そう反応した。

…！

「おつ、相棒！それに、菜々子ちゃんも！」

なんと、いきなり陽介が現れた。

「そっぴやよー、昼間の怪談話をしたら、クマの奴、ビビりまくって大変だぜー」

と陽介が笑いながら言った。

その怪談話の張本人が、近くに居るのを陽介は気付いていない…。

「菜々子ちゃん、なんか楽しそうだなー。なんかあった？」

…？

いや、今、そこに居るキタロー（仮）と楽しく話してるだけだ？
と言った。

「えっ？キタロー（仮）？菜々子ちゃんの隣には、誰も居ないぜ…。
お前、怖いこと言っつなよ…。もしかして、昼間の仕返し？」

…？

どうやら、陽介には見えていないらしい…。
見える人間と、見ない人間が居るのか…。
すると…。

「おい…、お前…、CDコーナーはどこだ？」

とキタロー（仮）が聞いてきた。
二階だと言った。

「そうか。今から、菜々子と行ってくる」

ああ、迷子になるなよ、とキタロー（仮）に言った。

「…」

陽介は呆然とした。

菜々子とキタロー（仮）は二階に行った…。
…。

陽介は青い顔をした。

ん？どうした…、と陽介に言うと…。

「おっ、お前…、今、誰と話してた…」

いや、キタロー（仮）と…。

聞こえなかった？と陽介に言った。

「ちよっ、マジなに！？明らか、お前誰かと喋ってるみたいだったぞ！マジ怖いからやめろよ！！」

陽介には、キタロー（仮）との会話が聞こえなかったらしい…。
かなり驚いている。
すると…。

「おい、お前。五千円貸してくれ」

キタロー（仮）が再び現れた。
持っていないのか？と聞くと…。

「幽霊だから、持ってるわけないだろ」

しょうがないな…と、キタロー（仮）に五千円を渡した。

「すまない」

無駄遣いするなよ、とキタロー（仮）に言った。

キタロー（仮）は五千円札を受け取り、また菜々子と二階へ向かった。

…。
陽介の方に首を向けると…。

「五千円札が宙に浮いてる…」

…。
陽介は泡を吹いて、失神した…。

…。
そうか…、キタロー（仮）が見えない人には、五千円札が宙に浮いてるように見えるのか…。

…。
気絶した陽介は、そっとしておこう…。

鮫川

帰宅路を、自分、菜々子、キタロー（仮）と歩いた。

「キタロー（仮）さん、ありがとー!!」

菜々子はさっきCDコーナーでキタロー（仮）から、りせのCDを買ってもらって喜んでいる。

キタロー（仮）も、なにかのCDを一枚買っている。

「そうか、菜々子のお父さんは刑事さんか」
「うん！」

キタロー（仮）と菜々子の会話は弾んでいる。

「そういえば、お母さんはどうした？」

「…!」

!?

しまった…。

キタロー（仮）に話していなかった…。

菜々子の母親は…。

「お母さんは、死んじゃった…」
「…!?!」

菜々子はうつむきながら言った。

キタロー（仮）は困惑した。

「すつ、すまないことを聞いた…」

キタロー（仮）は菜々子に申し訳なさそうに謝った。

「でも、菜々子。寂しくないよ…。今、お父さんにお兄ちゃん達や、お姉ちゃん達…、クマさんが居るから!!」

菜々子は笑顔で言った。

「…、そ、そうか…」

キタロー（仮）の顔が、少し曇った。
…。

「そつだ！ねえ、キタロー（仮）さん！おいかけっこしよ！お兄ちゃんも！ビリの人は罰ゲームで…」
「ああ、いいだろ」

菜々子とキタロー（仮）は、明るい表情に戻った。
…。
自分、菜々子、キタロー（仮）はおいかけっこしながら帰宅した。

深夜 晴れ

菜々子は遊び疲れて、よく眠っている…。
自分はキタロー（仮）を連れて、部屋に上がった。

…。
時間は午前0時。

気のせいかな、やけに、今日は静かだ…。
ソファーに座るキタロー（仮）に、リボンシトロンを渡した。

「先ほどは、すまなかったな…」

キタロー（仮）はリボンシトロンを受け取りながら、さっきのことについて謝った。

いや、気にするな…、と言った。

「あんなに小さいのに…。寂しいのを堪えているんだな…。まだ母親に甘えたい年頃だろうに…」

キタロー（仮）は重々しく、リボンシトロンの蓋を開けた。

「死ぬと言うのは…、死んだ本人より、残された者の方が辛いんだな…」

…。

キタロー（仮）は、なにかを思い出しながら語っている。

まるで時間が止まったように静かな街並を窓から眺めながら、キ

タロー（仮）は言った。

…。

自分はキタロー（仮）の隣に無言で座った。

「…」

キタロー（仮）は隣に座った自分に顔を向けた。

そっだ…、あなたの生前の話を聞かしてくれ…、とキタロー（仮）に言った。

「…！」

キタロー（仮）は驚いた。

「話したところで信じるか…？ 言うておくが、俺は生前、普通じゃなかったぞ…」

キタロー（仮）は鼻で笑った。

信じるか、信じないかは、自分の自由だと言った。

「ハハハ！」

キタロー（仮）は笑った。

…。
キタロー（仮）は少し間を置いてから、生前の話を語り始めた。
かなり突拍子のない話だった…。

キタロー（仮）と他愛のない話をして過ごした…。

翌日（日） 晴れ

朝

！？

目が覚めた。

そういえば、キタロー（仮）の話を聞いている途中、何故か、急に眠くなって…。

…！

部屋を見渡すと、キタロー（仮）の姿がない…。

時計を見ると、始発電車が走っている時間帯だ…。

…。

帰ってしまったのか…。

!!

テーブルの上に、なにか置かれている…。
袋に入っている物を開けてみた。

これは…、昨日、キタロー（仮）が買ったCD…。
数年前に発売された『キミの記憶』という曲だ…。

…。
CDには、なにか手紙が挟まっている…。

『ありがとう』

その文字だけ書かれている…。

自分はクスツ…と笑った。

手紙には、さらになにかが書かれている。

『あれもお前にやる』

…。
よく見ると、部屋のドアには釘バットが置かれている…。

一階の台所に、菜々子が居た。

「あれ？キタロー（仮）さんは？」

菜々子に、キタロー（仮）は帰ったよ…と話した。

「そ…、そっ…」

菜々子は寂しそうな顔をした。
…。

「ねえ、また逢えるかな？」

ああ…、逢えるさ…、と菜々子に言った。
菜々子は笑顔で頷いた。

電車内…

辰巳ポートアイランドにむかつて走る電車にキタロー（仮）は腰を置いていた。

キタロー（仮）は耳にヘッドホンを当てて、『Never More』を聴いている。

『八十稻羽を出ましてー』

車内アナウンスが聞こえた。

「…！」

キタロー（仮）はボンヤリと電車の窓から見える景色を眺めていると、ジュネスの看板が入った。

「…」

キタロー（仮）は、ジュネスの文字を見つめた。

「ぶっ…」

キタロー（仮）は思い出し笑いをした。

「海老で… ヤングジャンプ… ジュネス…」

菜々子から教えてもらったジュネスのCM曲を口づさみながら、キタロー（仮）はポートアイランドを目指す…。

かつて、キタロー（仮）が生前、かけがないの時間を過ごした場所に…。

昼間 晴れ

「本当に、見たんだよ！五千円札が宙に浮くのを！本当だって、なあ！相棒！！」

ジュネスに行くと、陽介が昨日の不思議体験を千枝とクマに話していた。

「ハイハイ…、わーっだから…」

「今日のヨースケのY談、怖くないクマ」

千枝とクマは陽介の話信じなかった…。
信じるわけないのは当たり前だ…。

陽介は泣きながら、自分にすぎった。

「相棒！なんとか言ってくれ！」

…。

どうでもいい……と答えた。

偶然、ジュネス店内の有線放送から『キミの記憶』が流れてきた。

キミの記憶編 特別編 (後書き)

今回、登場したキタロー(仮)については読者の判断にお任せします…。

幽霊が怖いんじゃない。祟られるのが怖いんだ編

2011年8月某日(月) 曇り

昼間

自宅で過ごしていると、青い顔をした陽介が現れた。とりあえず、部屋に連れて行くと…。

「こ…、こないだ…、みんなで夏祭り行ったる…。そんときの写真なんだがよ…。」

陽介は恐る恐る写真を数枚、テーブルの上に置いた。確かに、夏祭りの時に撮った写真だ。

その中の一枚、菜々子の浴衣姿の写真を見て、自分はホッコーリした。

寛容力が高まった。

「ホッコーリしてる場合じゃねえよ！見ろ、この写真！」

陽介が一枚の写真を、自分に突き付けた。

！？

なんと、自分が写っている写真に謎の人影が写っている！

「他にも、まだあるぞ！」

陽介が出した自分が写る写真すべてに、妙な人影が写っている…。これは…、間違いない…。

心霊写真…。

「しかも、お前のばっかだ…。この妙な人影が写ってんのは…」

陽介は震えながら言う。

「なあ、これって、ヤバくないか？お前、お被いとかしたら？」

と、陽介が心配そうに言ったが…。

別に大丈夫だよ…、と自分は平然と答える。

「なに強がってんだ！こーいう心霊系って、舐めてると怖い目に遇うぞー！」

いや、強がってなどいないと陽介に答えた。

実は言うところ、昔から、よく写真に幽霊が写るんだよ…、と自分はしれっ…と言いながら、本棚から一冊のアルバムを取り出した。

「なんだよ、これは？」

自分の昔のアルバムだよ、答えた。

中学時代の頃から、よく心霊写真が多かったよ…、と言いながら、自分は一枚の写真を陽介に見えた。

陽介に見せた写真には、自宅で制服姿で片手にラーメンを持つ中学時代の自分が写っていた。

「えっ？どこにも、幽霊見当たらねえぞ…。まっ、まさか、この後ろに居る人影か！？」

いや、違う…。

このとき、自分はラーメンなんか持つてなかったんだよね…、と答えた。

陽介は転けて、テーブルに頭を打った。

「このラーメンのどんぶりが幽霊かよ!？」

ああ、と答えた。

霊能力者が言うには、食べられる前に地面に落ちて食べてもらえなかったラーメンの無念、だと自分は話した。

「虚しいけど、怖くないよ、しょぼいな!」

陽介は叫んだ。

あと、さらにもう一枚…、と言いながら自分は写真を陽介に渡した。

「ん?」

今度のは中学の修学旅行の写真で、奈良の大仏をバックにしてピースしている自分の写真だ。

「なんだよ、今度は、この奈良の大仏がか?」

実は、自分…、筋肉痛を理由にして修学旅行を行かなかったんだよね…、と答えた。

陽介は転けて、テーブルに頭をぶつけて流血した。

「おめえーの生霊かよ!?!ていうか、筋肉痛で修学旅行、行かないつてなんだよ!行けよ!」

思春期だったからね、と自分は笑いながら言った。

「なんだよ、その損な思春期!？」

霊能力者が言うには、修学旅行に行きたいけど…、でも、こんな修学旅行ごときにハシヤグなんて格好悪いから行きたくない…、という思春期の心情が表現された良い一枚だと誉めてくれたよ、と言いながら、自分は自分の生霊写真を見て微笑んだ。

「なんか趣旨ずれてんぞ！」

陽介は叫んだ。

まだまだあるよ…と言いながら、自分は顔の影を濃くした。

この写真は、霊能力者がヤバイ！ヤバイ！としか言わなかったよ…。

「えっ…、まっ、マジか…！」

陽介はツバを飲んだ。

この一枚はシャレにならないと言いながら、自分は写真を陽介に渡した。

「!?!」

陽介は驚愕した。

こちら葛飾区亀有公園前派出所全巻、ジョジョの奇妙な冒険全巻、ガラスの仮面全巻、そして、ゴルゴ13の単行本による重みに耐えられず崩壊した本棚の写真だ。

「うわあああーい！！漫画買いきー！！！」

陽介は額から血を飛ばしながら叫んだ。

「しかも、幽霊関係ねえええー！！！」

こんなに漫画集めたのも思春期だったからなあ…、と自分は笑いながら言った。

「思春期に、ゴルゴ集めるとかどんな思春期だよ！ていうか、心霊写真じゃねえよ！これ！！！」

…！

自分は顔の影を暗くした。

「…！！」

陽介はビクッ！となった。

自分は恐る恐る口を開く…。

実は言うと、ゴルゴ13を買ったことなんかないんだよ…。

つまり、この本棚には、古本屋に売られたゴルゴ13の単行本の無念の怨霊が…。

だから、これはゴルゴ13の単行本の生霊…。

「生霊の概念を塗り替える生霊だな、おい！」

霊能力者が言うには、リアルタイムで読んだ時のジョジョ第四部のキラークイーン戦は、マジシャレにならなかった…、と自分は震えながら言った。

「そんな感想求めてねえよ!!」

陽介は叫んだ。

ハハハ…、と笑いながら、自分はアルバムを見つめていた。

パラパラ…、とアルバムにある自分の写真を眺めた。
…。

急に、自分はしんみりとなった。

「どうしたよ…。急に、しんみりして…」

自分は陽介が持ってきた夏祭りの写真を手に取った。

「？」

呆然とする陽介をよそに、昔の自分の写真と、夏祭りでの自分の写真を見比べた。

やっぱり、今の自分の方が楽しそうだ…、と夏祭りの写真を見ながら自分は呟いた。

「そりゃあ、そーだろ」

陽介は笑った。

「俺だって、辛いこともあつけど、今が一番楽しいぜ…。里中、天城に、完二にりせ、クマ公が居て…。川原でバカみたいに殴りあつたお前も居て…。なんつーか、今は心の底から大切だと思える仲間達が居るから…」

そんな陽介に言葉に、そうだな…。と答えた。
すると、陽介の顔が赤くなつた。

「…。なんか、俺…。今、恥ずかしいこと言つたよーな…」

陽介は少し照れている。

ハハハ、と笑いながら、自分は夏祭りの写真を見て思い出に浸つた。

!?

自分は例の人影の写真を見て、ハッ!となつた。

「なっ、どうした!相棒!?!」

自分は写真を持って、ガタガタ震えた…。

この写真に写っている…。謎の人影…。

よく見ると、見覚えがある…。

この人影の正体は…。

イザナギだ…。

「
…」

陽介は言葉を失った。

「
…」

自分も呆然とした。

「
…」

…。

「
…」

…。

「
…」

…。

沈黙が続く…。

そんな沈黙を破るかのように、自分の口が開いた…。

ぶつちやけ、ペルソナとか、シャドウとかを見てきたから、幽霊とか言われても怖くないんだよね…。

陽介は静かに頷いた。

肉で銀河が救えるわけないでしょ編(前書き)

今回の話は、いろいろとごめんなさい…。

肉で銀河が救えるわけないでしょ編

2011年8月某日（水） 雨

夜

雨が降り続けている…。

テレビになにか映るかもしれない…。

ザザー、ザー

！？

鮮明な映像で、なにかが映った！

『カウントダウンマヨナカTV!!』

なにやら、バラエティ番組が始まった。

「こんばんわー」

「ヤッホー！クマクマよー」

テレビには、雪子とクマ映っている！？

「暑さも吹き飛ばす見えないところも勝負仕様の音楽CDマヨナカヒットランキング！」

「今週は脅威の新人、エキセントリック少年ジュネスの登場でランキングは大荒れの予感クマ！」

「それでは、今週の10位から1位までを…」

「「カウントダウン！」」

と雪子とクマが叫ぶと、画面は切り替わった。
ランキングは以下の内容だ…。

10位『オレンジ／里中千枝&久慈川りせ』

9位『世界に一つだけの肉／里中千枝』

歌詞：肉屋の店先に並んだ、いろんな肉を見ていた〜 人それぞれ
好みはあるけど〜 どれもみんなステーキだね〜

8位『イナバノミカタ〜ジュネスカラキタヨ〜／堂島美容室』

7位『トモエさんの主題歌／自称特別捜査隊のみなさん』

6位『食間飛行／里中千枝』

歌詞：肉汁が揺らぐ〜 肉の輪が広がる〜
触れ合った舌先の、青い電流〜
焼いてみるだけ〜、孤独な火力とか〜
一瞬に焼け焦げる、お肉が好きよ〜

あなたの名、肉汁みたいに無限のリピート〜
肉らしく店の方に〜、肉を頼んでみる〜

ニクッ

身体ごと肉となりー、栄養が偏るー
ノーカーン（トリー）のお肉だけど、あたしたち、また食べてるー
魂に肉が流れてくー

5位『放課後テレビタイムノ八十神高校軽音楽部』

4位『クマノ里中千枝&天城雪子』

歌詞：肉食べてたい！肉食べてたい！

まだ食べてたくなるー

愛屋の店先でー 今、肉見合ったー

おあげ食べてたい！おあげ食べてたい！

おあげ、愛してるー

リーダーがー、おあげ返してくれるまでー、あたし眠らないー

3位『フタリノ記憶ノ久慈川りせ』

2位『エキセントリック少年ジュネスのテーマ曲ノエキセントリック少年ジュネス隊』

1位『ああ、エキセントリック少年ジュネスノエキセントリック少

年ジュネス隊』

…との結果だった。

再び、画面が雪子とクマに切り替わった。

「超肉食アイドル、里中千枝ちゃんがランキングを独占する中、今週の1位、2位はなんと！人気急上昇のエキセントリック少年ジュネス隊のみなさんでした！」

「そして、な、なんと！今日のゲストは、見事、1位、2位を獲得したエキセントリック少年ジュネス隊のみなさんクマー！！お願いしますクマー！！」

と言って、画面がまた切り替わった。

テレビに映っているのは、陽介だ…。

「どーも、カウントダウンマヨナカTV御覧の皆さんー。エキセントリック少年ジュネスのボーカル、花村ですー」

と言って、陽介は頭を下げた。

「今回、1位、2位を獲得しましたー」

パチパチー

「フアンのみなさん、ありがとうございますー」

と陽介のインタビュー映像が流れた…。

「えーと、今回の曲はですねー。日々のフランテーションと、ムド

対策したのにハマで一撃だったときの切なさや…、テンタラファーが全スカした時の絶望感を表現しましたので、お聴き下さい。エキセントリック少年ジュネスで、『エキセントリック少年ジュネスのテーマ曲』です…。どうぞ…!」

『エキセントリック少年ジュネスのテーマ曲』

歌：エキセントリック少年ジュネス隊

歌詞：エキセントリックー！エキセントリックー！エキセントリックー！エキセントリックー！少年ジュネス

今日も稲羽が平和なのはー エキセントリックー！（少年！）ジュネスが居るからさー

強いぜー、強いすぎるぜー、ペルソナ、ジライヤー

魔法技充実、嬉しいなー 仕置きの手段さ！

「テンタラファー！」

呼べばー、答える腐れ縁ー ただれた仲間さー

口実虚しい人材ー

「相棒！」

落ち着け…！

「里中！」

「肉はあなたを裏切らない…！」

「完…！」

「てめえら、しめんぞ！キュツとしめんぞ！」

同棲相手はクマ吉二号ー

今はフリーのわけありー、クマー

「クマ…、大人の階段、登っちゃった…」

敵か？味方か？白鐘直斗ー

「関わってたことは否定しないんですか？」

だけどー、辛いこともあるー

「久保の顔は、二度と見たくない…」

頑張れ！ジュネス！頑張れ！ジュネス！

俺は限界だー！

くらわせる！くらわせる！

俺も知らない謎の小袋、風船爆弾！

エキセントリックー エキセントリックー

エキセントリック少年ジュネスー

鼻眼鏡が流行ってるのは、エキセントリック（少年！）ジュネス
が居るからさー

怖いぜー、怖すぎるぜー シャドウ達ー

中には、貴重な奴居るけれどー 正義の刃だ！

「ブレイブザッパ―！」

肉の薫りと、口当たり―

腹持ちの良いジュネスのお菓子―

「肉ガム！」

甘味は効いても、シュガー入り

「お母さまも安心して、お子さまにオススメください（直斗）」

だけど、悲しいこともある―

「柏木には…、会わせる顔がない…！」

丸いぞ！ジライヤ！丸いぞ！ジライヤ！

そこまで、丸くない―

くらわせる！くらわせる！

俺も知らない謎の小石、脈打ってる石―

エキセントリック！エキセントリック！

エキセントリック少年ジュネス―

なんか、霧が出てるのは― エキセントリック（少年）ジュネス
が居るからさ―

淡いぜー、淡すぎるぜー ハイカラ肌着―

勝利の雄叫びしたいけど― 正義のとどめさ―！

「スクカジャー!!」

淡い香りと、肉加減―

腹持ちの良い、ジュネスのお肉―

「ビフテキ…!!」

甘味も効いてて、高カロリー―

「これなら、お子さんも安心して食べられるかも知れません(直斗)

」

だけどー、気になることもある…

「完二はやっぱり…、あっち系なのかな…?」

ダルいぞ!身体!ダルいぞ!身体!

SP、もう切れた―

くらわせる!くらわせる!

俺も知らない謎の食品、ミステリーフード!

「中身はテイクアウトしても構いません(直斗)

」

エキセントリック!!エキセントリック!!

エキセントリック!!少年!ジュネスー!!

…。
ここで映像が途切れた…。

おまけ

『ああ、エキセントリック少年ジュネス』
歌：エキセントリック少年ジュネス隊

最近…、だんだんわかってきた…
俺がボケやつても、誰も笑わない…
いろんな物が見えてきた…
見たくはないものばかりだけ…ど…

クマ吉は、すぐどこで仕事をサボるのさ…
完二が後ろに立つと、変な汗が出るさ…
天城は鼻眼鏡だらけー
お前にどうして、鼻眼鏡が居るー、うー

ああ、エキセントリック少年ジュネス
里中の奴、またツケにしたー
でも、言えない！里中には言えやしないー
聖龍伝説、弁償してないからー

りせはアイドルだが、料理が辛いー

りせはアイドルだが、料理に一味かけるー

めっちゃ、腹立つ…！めっちゃ、腹立つ…！

おまえら、全員…、ジュネスでバイトしろや…

「女装コンテストの写真ばらまかれたら、終わりだ…。うわぁ！知らないうちに、こんなに出回ってる!？」

最近…、だんだんわかってきた…

俺の仲間は、全員…、特殊…

家に帰れば、イタズラメールが36件…

今日も、アドレス変えてみる…

相棒はフラグだらけー

里中は肉を食べては旨いというー

天城は俺のギャグでは笑おうとはしない…

なんで、ツボらないのかー、あー!!

ああ、エキセントリック少年ジュネス

マヨナカテレビが気になって、眠れなーい

ああ、惣菜しか食べる気しなーい

えっ!?!? 今月、まだ1週間も雨続きー!?!?

ああ、雨降りなんかならなきゃいいのにー

ああ、雨降りなんかならなきゃいいのにー

どうせ、今夜もマヨナカテレビチェックー

三日連続、マヨナカテレビチェックーうー

肉で銀河が救えるわけないでしょ編（後書き）

余談ですが、『ああ、エキセントリック少年ジュネス』の歌詞を
書いてる時、本当に悲しくなりました…。

オシャレ番長編〜エンドレス仕様〜

2012年8月某日(金) 晴れ

昼間

今日は、部屋に完二が来ている。
いやー、今日は暑いなー、と言った。

長袖、長ズボン、冬用コート、帽子の厚着姿で。

さあ、(ギャグに)ツッコめ、完二。
なんで、そんな厚着だけなんスカ!!そりゃあ、暑いに決まっ
んだろ!あんた!?!とツッコむのだ、完二...。
すると...。

「確かに、暑いッスね。結構、俺、薄着してきたんッスけどね...」

!?

(ギャグに)ツッコまない...。

暖房付けてで、窓を閉めにして、自分は厚着でいるのにツッコま
ない...。

「というか、実は、暑いんだぞ…。」

「そつだ、先輩…、今、冷房器具が大特価で売られてるんで、一緒に、ジュネスに見に行きませんか？」

完二と、ジュネスに行くことになった…。

無論、自分は厚着で…。

ジュネス、家電コーナー。

「いやー、ジュネスはクーラー効いてて良いツスねー」

完二はそう言うが、厚着の自分にはクーラーなど無意味に近い…。
何故だ…、猛暑の中、ジュネスまで厚着で来たのにツッコまないなんて、ある意味、暴力だぞ…。

「おつ、先輩！扇風機ツスよ！」

お前を、扇風機の前に置いて『ワレワレハウチュウジンダ』と言わせてやるつか！？

しばらくすると、陽介、クマが現れた。

「うーっす！」

「うーっすクマー！」

どうやら、手伝いを終えて、たまたま鉢合わせしたようだ…。

よし…、このファンフィクション作品にて、ナンバー1のツッコミ担当である陽介なら、公衆の面前で厚着の自分にツッコミを…。
主人公内ツッコミキャラランキング一位、陽介。2位、完二。3

位、千枝。逆にツッコミに困るキャラランキング1位、天城雪子。

「おっ、相棒。クーラー探してんのか？」

「センサー、フリーザー探してるクマねー」

「クーラーだよ、バカ」

ツッコめええええ!!!

何故だ!?

何故!?

いつもなら…。

「(いつもの陽介)うおおい!!!なにやってんだよ!!!なんで、厚着してんだよ!バカ!」

「(いつものクマ)センサー、セクシークマー!」

「(いつもの陽介)露出度のどろころが、セクシーだ!」

となるはずだ…。

何故だ…、完二といい、まったくを持って厚着姿の自分にツッコミを入れない…。

「おー、完二、これ買えよ。この夏の新作」

「うわ!高いッスよ、花村先輩!」

「買うクマー!カンジ、買うクマー!」

しかも、家電で盛り上がっている…。

もっと、自分の厚着姿に盛り上がるべきだろうに…。

「よし、今日は特別おごるぜー」

「ヨースケ、ふとっばらクマー!」

「花村先輩、ふとっばらクマー!」

勝手に、なに盛り上がりすぎてやんだ！貴様ら！
お前達を、太っ腹にしてやるうか！？
みんなで、フードコートに行くことになった…。
無論、厚着のまままで…。

フードコート…。

日差しが降りしきる中、陽介達とフードコートに来た…。
暑い太陽の光が、我が体温を上昇させ身体から水分を奪う。

「おっ！里中、天城、りせじゃん！」

「うほほーい！みんな居るクマーー！！！」

！？

なんと、フードコートに女性陣が居る…。

さすがに、女性陣ならツツコミを入れるだろう…。

予想

「（予想の千枝）てうわあああ！？なっ、なんで、厚着してんのよ
！！」

「（予想の雪子）ちょ、ちょっと！」

「（予想のりせ）せっ、先輩のエッチ！」

と、なるにちがいなっ…。

「おーっす！いつものメンバーが揃ったねー」

「あら、今日はどうしたの？」

「先輩、隣来てー」

誰も、ツッコまねえ!!!

勢い余って倒れ、テーブルを破壊した…。

猛暑の下、りせの隣に座った…。

本当に、誰も自分の厚着姿にツッコミを入れない…。

「そうだ！今から、鍋焼きうどん食べないー？夏に食べる鍋焼きうどんとか美味しいよねー」

「相変わらず、バカだな…里中は…」

「でも、面白そうよねー」

「どうせなら、一味とうがらし一本分入れた鍋焼きうどんは？」

「ちよっ、天城に、りせ!？」

「俺も、賛成ッス！」

「クマも、賛成ー！」

ツッコミを入れないどころか、この猛暑の下、なんか変な真似を
始めようとしている！

まずい！根気が、ブツダ級とはいえ、この猛暑に厚着姿で、一味
唐辛子一本入り鍋焼きうどんは自殺行為だ！

「お前はどつする？」

と、陽介が聞いてきた。

いいかげんしろ！と、立ち上がって叫んだ。

みんな、驚いている。

なんで、この真夏の昼下がりに厚着してんだー！っつて、ツッコめよ！何カ月、この業界に居るんだよ！っつていうか、鍋焼きうどん売ってるわけねえだろ！っつと叫んだ。

みんな、静まり返った…。

すると…、陽介が…。

「あつ、本当だ」

！？

「確かに、先生、厚着してるクマ」

「本当だ、厚着ッスね…、あのサウナ思い出しますッスね…」

陽介、クマ、完二のノリが軽い…。

「あつ、確かに、厚着だ」

「うん、厚着よね」

「先輩、暑くない？りせが扇いであげよっか？ふふっ」

千枝、雪子、りせの反応も薄い…。

なつ、なんだこれは…。

うわあああああ！っつと泣きながら、フードコートから出て行った。

無論、厚着のまま…。

八十稲羽商店街…。

泣きながら、厚着姿のまま商店街に来てしまった…。
ん？

だいたら屋の隣に、ベルベツトルームの扉がある…。

…。

さすがに、イゴール、マーガレットならツッコんでくれるだろう

…。

そう思い、扉を開けた。

ガチャツ…、ギイイイ…。

「おやおや…、お客人…、なんの御用で…」

「ようこそ、ベルベツトルームへ…」

ツッコまない…。

なんでもないよ！と泣きながら、ベルベツトルームから飛び出した…。

このあと、厚着姿で、あらゆるコミュニティメンバーの所に訪ねたが、誰もツッコミを入れてくれなかった…。

今日は、もう帰ることにした…。

無論、厚着姿で。

自宅

「おつ、おかえり…。今日、外暑かつたろ？」

堂島が迎え入れてくれた…。

やはり、厚着姿の自分にツッコミを入れない…。
だが…。

「って、おい！お前、なんで、厚着してる…！」

！？

堂島がツッコんでくれた！！しかも、ノリツッコミだ！！
やったー！やったぞー！と泣きながら叫んだ。
堂島との仲がかなり深まった…。

深夜 雨

市内病院…。

自分は病院に運ばれた…。

厚着で猛暑の中を歩き回り、水分補給をしなかったからだ…。

ドガン！！

外で大きな雷が鳴った。

『手術中』のランプが点いた手術室前で、陽介、千枝、雪子、完
二、りせ、クマが椅子にもたれている…。

千枝は大きく泣き叫ぶ。

「あつ、あたしのせいだ！！あたしが厚着してるリーダーにツッコ
ミを入れなかったから！！たまに、ボケ放置も悪くないかなーって
思ったから！！」

「千枝！」

「落ち着けよ！里中！俺だって、そう思ったよー！！」

泣き叫ぶ千枝を、雪子、陽介が落ち着かせようとしている。
「ガン！と完二は壁を殴った。」

「違う！俺の、俺のせいだ！！俺があの時！！あの時…、ツッコんでいればー！！」

「完二ー！！」

「誰も悪くないクマよー！！」

荒れる完二をりせ、クマがなだめる。

陽介が立ち上がった。

「落ち着けよ！んなより…、今は、無事、相棒の手術が終わるのを待つしかねえだろが…」

「ヨースケ…」

陽介は震える声で、みんな言った…。

みな、後悔をした…。

猛暑の中、厚着の自分にツッコミを入れなかったばかりに起きた悲劇に…。

「読者のみんな！このように、夏は危険がいつぱいだ！だから、これからのお盆とサマーシーズンを安全に快適にお過ごし下さい！」

急に、陽介はカメラ目線で声を出した。

すると、手術室から自分が出てきた。

自分達、自称特別捜査隊はクスリも戦争も反対です！と叫んだ。

真夏を安全に快適に過ごそう！八十稲羽教育委員会からのお知らせ

せでした。

…という内容の夢を見たのを、無理矢理、ジュネスのフードコートに集めた陽介、千枝、雪子、完一、りせ、クマに聞かせた…。
みんな、力尽きた顔をしている…。

P4クライマックス番長 オシャレ番長編に続く…。

オシヤレ番長編〜エンドレス仕様〜(後書き)

クスリ、ダメ絶対。

自分の中で、なにかが起動した…。
解った！よし、明日は、うなぎ祭りだ！と菜々子に叫んだ。

「えっ！？本当…！」

菜々子は嬉しそうだ。

翌日 晴れ

朝

連日、猛暑が続く…。

さて…、今日は探索に行くか…。そして、帰りにうなぎを…。
みんなに連絡を取り、ジュネスフードコートに向かった。

外に出た…。暑い…。

かなり強い日射しが、降り注ぐ…。

間違いない…。

温暖化だな、これは…。

もっと、我々、地球人は地球のことを考えないとな…、と思った。
寛容力が高まった。

ペルソナ4は環境問題について、真剣に考えています。

ジュネス屋上。フードコートに着いた。

日射しが直撃して、かなり暑い…。

陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマのみんながテーブルに居る。
だが…。

「よお…、あいぼじ…」

「お…っす…、りーだ…」

「おはよ…」

「ちっす…、せんぱい…」

「せんぱい…、おはよ…」

「せんせ…、あなたのくまくまよ…」

みんな、ゲツソリしている…。

どうした…？みんな…、と言っと…。

「れっ、連日…、猛暑が続いて…、みんな…、なっ、夏バテだ…。
しかも、今日は…、とどめと言わんばかりに暑くて…、みんな…、
意識が…」

暑さに負けた陽介は弱々しくテーブルに、体重を預けながら言った。

「肉なんか食べたくない…、そ…、そーめん食べたい…。みつかんの
おいがっおで…」

！？

暑さに負けた千枝は弱々しく、そう言った。

肉魔神の千枝が肉を食べたくない！？自分は耳を疑った。

お前が肉を食べなくなったら、お前のアイデンティティーとキアラ
はどうなるんだよ！？と叫びながら、千枝の身体を掴み揺すった。

「そーめんは…、あたしを裏切らない…」

そんなカロリーの薄いもん食べんなよ！と千枝に叫んだが、もは

や、千枝の意識はうわの空だった…。

「温泉なんか、全部、水風呂になってしまえばいい…」

暑さに負けた雪子は呟いた。

「先輩…、俺、今の俺なら、テレビン中での俺を受け入れて…、ふんどし着れそうッス…」

「言いながら、暑さに負けた完二は服を脱ぎ始めた。

！？」

お馬鹿！もう一人のお前の解釈を間違える人が居ますか！と叫びながら、服を脱ごうとする完二を抑えつけた。

「あつ、完二も脱ぐんだ…。なら、あたしも脱ぐ…。まるっと脱ぐ…。」

「言いながら、暑さに負けたりせも服を脱ごうと手を動かし始めた。

！？」

お馬鹿さん！年頃の娘がはしたない真似するんじゃないやありません！と叫びながら、服を脱ごうとするりせを必死に抑えた。

「クマも…、脱ぐ…、クマ…」

「と言って、暑さに負けたクマは着ぐるみを脱ぎ始めた。
…。」

「別にお前は脱いでいいよ、と言った。

「俺が…、いや、俺たちが…、ジュネスだ！！」

「そーめん、そーめん…、あはは…、そーめんはいいよー、そーめんは…。そーめんは宇宙を裏切らない!!」

「うちの旅館、世界初の水風呂旅館になればいいのにー!!」

暑さに負けた陽介、千枝、雪子は暴走を開始した…。

「ウホ！」

「キャハハハハー!!」

暑さに負けた完二、りせは服を脱がなくなったもののシャドウと変わらないテーシヨンになった…。

とてもじゃないが、みんな探索に連れていける状態ではない…。

「センサー！みんな、どうしちゃったクマか!？」

普通に戻った私服姿のクマが、自分に駆け寄った。

着ぐるみをキャストオフして涼しくなったせいか、クマは夏バテから立ち直った…。

みんな…、夏バテで理性を失い、シャドウみたく暴走を始めてしまったんだ…、とクマに説明した。

「それじゃあ、みんな、このまま夏バテにやられて、助からないクマか!？」

クマが心配そうに自分に聞いた。

…。

こうなれば…、涼しい場所に連れていくしかない…と言って、みんなをジュネス店内に連れて行った。

ジュネス店内…。

店内は日射しを回避出来るし、クーラーが効いてて涼しいはずだ…
…と思った。

案の定、冷房が効いてて店内は涼しい。

これなら、みんな夏バテから立ち上がるはず…。
だが…。

「俺が、ジュネスだ…」

「みんな、そーめん食べればいいのに…」

「水風呂は乙女のロマン…」

「ウホ…」

「キャハハハ…」

陽介、千枝、雪子、完二、りせの夏バテを回復させるに至らなかつた…。

クマはガクガクと震えた。

「せつ、センサー！みんな、元に戻らないクマー！！ヤバイクマー！！」

落ち着け…、と慌てるクマに言った。

さつきよりは、みんなの暴走具合が静かになったから、一応は冷房は効いている…。だが、あと一つ…、みんなを夏バテから立ち上がらせるには足りないものがある…。

それは、たぶんスタミナのある食べ物だ…。

スタミナのある食べ物といえば…。

「センサー？」

自分は立ち上がった。

そして、クマに首を向け…。
夏バテ対策と言えば、うなぎだ…。うなぎを食べさせれば、みんな回復する…と言った。

「うっ！うなぎ！？あの夏の風物詩、うなぎクマか！？」

クマは驚いた。

うなぎを食べれば、みんな立ち直る！と叫んだ。

よし！うなぎを手に入れるぞ！と自分は食品コーナーに向かおうとした瞬間。

「センサー…！」

クマが自分を呼び止めた。

どうした…？

「じ、実は昨日、テレビでうなぎ特集したせいか、うなぎが完売したクマよ…」

なに…！？

「だから、ジュネスにはうなぎはないクマ…」

仕方ない…。

自分が、どこかでうなぎを手に入れてくるから、クマはここでみんなを見守ってくれ…、と言いながら、自分は財布を握り締め駆け出した。

いざ！みんなのため、うなぎを！！と叫んだ。

（センサー…）

クマは遠い目で、自分を見つめた。
こうして、夏バテに倒れた仲間と、なにより菜々子のため、うなぎを手に入れる一夏の冒険が始まった…。

昼間

S県H市は、うなぎの炎に包まれた…。
人々はうなぎを求め、血で血を洗う戦いを繰り返す。木や草は枯れ、暴力がうなぎを支配する世の中と化した…。
人々は求めた…、誰もが、安心してうなぎを購入出来るようにしてくれる…、救世主を…！

『北斗の番長』

主題歌

「ウナ、シヨック!!」

歌：ペルソナ4主人公

歌詞：ウナ、シヨック!!うなぎで空が落ちてくるー
ウナ、シヨック!!うなぎで俺の鼓動、早くなるー

菜々子との約束守るためー お前は旅立ちー
自分を見失ったー

弱火で焼いたうなぎなど、食べたかないさー
うなぎを取り戻せー

「ひゃっはー！！たまんねえな！」

「ふはは、このヌメヌメで、ツルツルしてて…、うねうねしてて…、最高だぜえー！！」

「きゃー！！お願いやめてえ！」

「おい！俺にも、うなぎ握らせるよー！！」

モヒカン頭の身長が2メートルくらいある筋肉質の男たち二人が若い女性から、生きたうなぎを奪った。

若い女性は泣きながら、うなぎを返してもらおうように叫ぶ。

「お願い、返して！」

「金は渡すから、このうなぎ渡せってんだよ！」

「いやああ！！誰か！誰か！」

すると…。

やめないか…？と、誰かがモヒカンの男たちの背後に立った。

「だっ、誰だ！てめえ！」

！？

モヒカンが振り向いた先には、クーラーボックスを片手にうなぎを買いに来た自分の姿が！

「なっ、なんだ！？てめえ！」

悪党に名乗る名などない…、通りすがりの番長だ…！覚えておけ

！と言いながら、自分は拳を鳴らした。

「名乗ってんじゃねえか!？」

「おい、やっちまおうぜ!」

そう言って、モヒカン二人は自分に襲い掛かってきた…!

静かに、自分は『イツポンドラ』のペルソナカードを握った。

ガシャーン!

「ぎゃあああー!!」

「ぎゃあああー!!」

出現したペルソナ、イツポンドラはモヒカン二人を遙か彼方に投げ飛ばした。

うなぎ一つで理性を失うとは…、なんて世の中だ…と言いながら、自分はイツポンドラを元に戻した。

うなぎを取り戻した女性が自分に近づいた。

「あつ、ありがとうございます…!」

気にするな…と言った。

寛容力が高まった。

それより、一体、この街はどうなっている?と聞きながら、ビルは荒廃し砂漠と化した街並みを見つめた。

「実は、世紀末患者スパオウという男が、この街のうなぎを買い占めたのです…。さつきの男たちも、スパオウの部下…。スパオウは一子相伝の拳…『極東神拳』の使い手で…、その『極東神拳』の力で世界中のうなぎを我が物にしようと企んでいるのです…!」

と、女性は解りやすい説明をしてくれたので、自分の為すべきことがわかった…。

なるほど、つまり、そいつを倒せばいいんだな…と言って、自分はスパオウのアジトに向かった。

ちょうどよく、目の前に、スパオウのアジトと書かれた看板を見つけた。

数分後…

スパオウのアジトのビルの頂上に到着し、そこに居たスパオウをペルソナ『マール』さんで倒した…。

うなぎをよこせ！とスパオウの襟首を握って叫んだ。

「我が生涯に一片の悔いあり…」

と血まみれのスパオウ（CV・内 賢二）が言った。
んなことええから、うなぎ渡さんかい！と自分は叫ぶと…。

「ふふふ…。地球人も、ここまで強くなりましたか…」

背後に宇宙人（CV・中尾 聖）が現れた！

「私の名は、フリーズ…。言っておきますが、私の戦闘力は53000パ…」

ペルソナカード『ベルゼバブ』を握った。

ガシャーン！！とカードが割れて、ベルゼバブが光臨した。

『北斗の番長』

f i n

主演

ペルソナ4主人公（イツポングラ、マールさん、ベルゼバブ、伊邪那岐大神）

花村陽介

里中千枝

天城雪子

巽完二

久慈川りせ

クマ

モヒカン二人

うなぎを奪われた女性

スパオウ

フリーズー

p i o

主題歌

「ウナ、シヨック!!」
歌：ペルソナ4主人公

夜 晴れ

八十稲羽市に帰還した。

悪の帝王を倒し購入したうなぎが入ったクーラーボックスを抱え、
自分はみんなの居るジュネスに向かった。

戦いの疲労でへろへろになりながらも、自分は歩く…。
今にでも倒れそうだったが、これでみんなが元に戻るな…と思っ
た。

みんながうなぎを食べて元気を取り戻す姿と、菜々子が美味しそ
うにうなぎを食べる姿を思い浮かぶと、疲れた身体に力が湧いた…。
よし、みんな待ってる!

その頃…。
天城屋旅館…。

「うんめえええー!!」

陽介がうなぎを食べて、元気良く叫んだ。
天城屋旅館では、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマ、菜々子

たちが、うな重を食べていた。

みな、夏バテから回復し元気を取り戻した…。

「うんまー！やっぱ、夏はうなぎだねー。いやー、夏バテで我を失
つてたけど、雪子んちが、うなぎやってて良かったー」

「まったくフヨ！おかげで生き返ったツフよー」

「完二、食べながら喋るな！もうー」

「カンジ、汚いクマー」

元に戻った千枝、完二、りせ、クマは美味そうにうなぎを頬張る。

「菜々子ちゃん、うなぎどお？」

と雪子が菜々子に聞いた。

「うん！とっても美味しいよー！」

「良かったー」

菜々子は美味しそうに、うなぎを食べた。

雪子の家は旅館…。旅館といえば、料理…。当然、うなぎなど普
通にあった…。

自分は、そのことをすっかり忘れていた…。

「そういえば、お兄ちゃん、どこ行ったのかな…？」

と、菜々子はうなぎを食べながら言った。

雪子はハッ！とした。

「あっ、そういえば…、どこ行ったのかしら…」

その頃…。

ジュネスフードコートにはクーラーボックスを抱えたまま、燃え尽きた自分の姿があった…。

すべて壊し、すべてを繋げ！編（前書き）

『仮面ライダーダイケド オールライダー対大ショッカー』公開
記念作品。

すべて壊し、すべてを繋げ！編

世界の破壊者、番長。

9つの世界を巡り、その瞳はなにを見る？

『陽介の世界』

2011年某月某日（月） 晴れ

放課後

教室でカバンに『空我くわがによる物理変化』の教科書を入れていたら、陽介が自分の目の前に現れた。

「なあ、相棒？壊れるほど愛しても、3分の1も伝わらないって本当か？」

本当だ…。まるで、お前と俺みたいだな…と答えた。

陽介は複雑な表情をした。

陽介の世界、完

『千枝の世界』

2011年某月某日（火） 曇り
放課後

今日は千枝と、高級すし屋『顎門』あぎとで食事をすることにした。

「いやー、たまには肉じゃなく、おすしもいいよねー」

千枝は喜んでいる。

すると、すし屋の店主が…。

「へい！お嬢さん、なに握りやシヨツカー！？」

と聞いてきた。

千枝は笑顔で答える。

「じゃあ、肉で」

千枝の世界、完

『雪子の世界』

2011年某月某日（水） 晴れ
夜

天城屋旅館の露天風呂に雪子が一人浸かっている。
タオルを巻いています。

「はあ…」

雪子はため息を吐いた。
なにやら、思い悩んでいるようだ。
すると、脱衣所の戸がリュウキ…と音を立てて開いた。
どうしたんだ？元氣ないな…と学ラン姿の自分が湯に浸かる雪子
の前に現れた。
顔面に洗面器をぶつけられた。

雪子の世界、完

『完二の世界』

2011年某月某日（水） 雨
朝

AM5:55…。

完二は目を覚ました。

「はっ…！」

目を覚ましたと同時に、完二は周囲を見渡した…。
いつもの完二の部屋だ…。
完二は汗を拭った…。

「なんか、俺…。すっげえ怖い夢見た…」

完二は胸を抑えた…。

どんな夢だった？と完二の横に居る自分が、完二に聞いた。

「何故か、先輩が、俺の布団の中に居る夢なんツスけど…」

…。

「あつ、夢じゃなかった」

完二は良い笑顔をした。

完二の世界、完

『りせの世界』

2011年某月某日（木） 曇り

放課後

りせが部屋に来ることになった。

「あつ、お布団発見！やっぱり、アレはお布団の下に隠しているの
でしょうか？」

と、りせは自分の布団をじろじろ見つめている。

解っているなら、しょうがない…と言いつつ自分は布団の下からアレ
を取り出した。

「きゃっ、本当にアレだー！」

ああ、見ての通りのアレだ。

自分は手に持ったアレをテレビに剣を刺すように接続した。そして、アレの端子をコンセントに剣のように差し込む。

「うわー、アレだねー」

と言いながら、りせはカバンから『ボートピア殺人事件』のカセットとコントローラーを取り出した。

自分はテレビに接続したアレに『ボートピア殺人事件』のカセットと、コントローラーを剣のように差し込む。

そして、りせはコントローラーを握った。

「きゃー！すっごい、アレだー！！」

りせの顔がさらに赤くなった。

犯人はヤスだ、と思った。

りせの世界、完

アレとは、初代ファミコンのことです。なにを想像してるんです？

『直斗の世界』

2011年某月某日（金） 晴れ

放課後

「ひびきっ!!」

下校中、直斗はくしゃみをした。

直斗は鼻をこする。

「誰か、僕の噂してるんでしょうか…?」

その頃…。

ぐあっ!!

自分はバスケの部活中、シューズの紐がほぐれ転んだ。

このような現象はカオス力学系において、通常なら無視してしまうような極めて小さな差が、やがては無視できない大きな差となる『バタフライ効果』と呼ばれる現象である。

ちなみに、直斗のくしゃみが主人公の靴紐をほどいたわけではないので誤解なく。

直斗の世界、完

『クマの世界』

2011年某月某日(土) 晴れ

放課後

クマがお風呂に入ってる間、クマの着ぐるみの中を探ってみた…。

!!

何故か、着ぐるみからカブト虫が出てきて、自分の鼻にぶつかった…。

鼻血が出てきた…。

数日後…

「最近、センサーが冷たいクマ…」

とクマが陽介に相談した。

クマの世界、完

『菜々子の世界』

2011年某月某日(日) 晴れ

朝

「お兄ちゃん、おはよー。昨日借りてきた電王のDVD、一緒に観よ?」

と、菜々子が眩しい笑顔で挨拶した。

…。
鼻血が出た。

菜々子の世界、完

『堂島の世界』

2011年某月某日(月) 晴れ
夜

今日は、堂島と川原でキャッチボールをすることにした。

「よし！キバって投げて来い！！」

と堂島がグローブを叩いて叫んだ。

ボールを軽く投げた。

ぼろっ…と堂島は自分の投げたボールをグローブから落としたり。

堂島はキャッチ出来なかった…。

その頃…。

直斗の自宅。

「あっ！！しまったあ！！」

借りてきた新作DVDが1泊2日で、返却が昨日だったのを直斗は思い出した。

このような現象はカオス力学系において、通常なら無視してしまふような極めて小さな差が、やがては無視できない大きな差となる

『バタフライ効果』と呼ばれる現象である。
ちなみに、堂島が主人公のボールをキャッチ出来なかったから、直斗は返却を忘れたのではないので誤解なく。

堂島の世界、完

…。

以上の内容の絵日記を書いた。

夏休みの宿題の絵日記が終わったぞー！と自分は喜んだ。

ちなみに、今日は夏休み初日…。初日に、絵日記を書き終えた…。つまり、この内容は今週の出来事なのだ。

さて、明日は『オールライダー対大ショッカー』でも観るかと思いながら就寝した。

まさに世界の破壊者、番長！！

肉をかける少女編

2011年8月某日（水） 晴れ

朝

陽介から電話が来た。

「なあ、今から、一条と長瀬、完一とクマでバーベキューやるんだけど来る？」

と誘われた。

いいが…、何故、男だらけ？と聞いた。
すると…。

「『肉魔人』が来るから…」

…。

その陽介の一言で、大体、よく解った…。

「それに、たまには野郎共だけで遊ぶって、最近なかったジャンかよー。とりあえず、昼間、鮫川に来いよ。野郎だらけで、暑苦しくやるっぜー！」

今日は菜々子は遊びに出かけたし、やることもないので、バーベキューに行くことにした。

数時間後の昼間 晴れ

さて、そろそろ約束の時間だ…。
自宅を出た。

まあ、たまに暑苦しい面子で遊ぶの悪くない…と思った瞬間。

「あら？奇遇ね…」

タイミング良く、雪子に出会った。
頭を抱えた。

「これから、どこか行くの？」

と、暇そうな雪子は聞いてきた…。

マズイ…、雪子に話したりしたら、確実に『肉魔人』に情報が伝わり、バーベキューに現れ、悲劇が始まる…。

可哀想だが、雪子連れて行くわけには行かない…。
振り切られねば…！

「どっしたの？」

なんと言って振り切ろうか…。

そうだ…！

実は今から、医者に行くんだよ…と嘘を言った。

「えっ！？どこが悪いの！」

雪子は顔色を変えた。

よし、医者ならついて来れないだろ…。

ああ、とりあえず、今から間黒夫先生に見てもらおう…と、また嘘を言った。

「本当に大丈夫なの!？」

雪子は不安そうに、自分を見つめた。

心配しすぎ…と思いつつも、そんなに心配しなくても、間黒夫先生なら大丈夫だ…と、またまた嘘を答えた。

「うっ…、うん…」

雪子は、かなり心配してくれてるようだ…。

…。
多少、罪悪感が芽生えつつも、なんとか雪子を振り切れた…。

そして、鮫川に到着…。

「おせーぞー!相棒」

「うーっす!先輩!」

「よお!」

「おう!」

「センサーが来たクマー」

「おーっす!」

鮫川では、バーベキューセットの用意を完了させた陽介、完二、一条、長瀬、クマ、千枝の姿があった。

バーベキューセットに詰め込まれた炭は激しく燃え、十分に鉄板は熱くなっている。

「じゃじゃーん!ジユネスの高級お肉ー!」

と、陽介が肉をクーラーボックスから取り出した。
クーラーボックスにあるには、どれも結構な値段の肉だ。

「うおおおおー、すげー!!!」

「さすが、ジユネスのガツカリ王子!」

「さすが、花村先輩!!!」

「うほほーい!!!」

「やたー!肉だ!肉!!!」

一条、長瀬、完二、クマ、千枝のテーションが最高潮だ。

「よし!今から、男だけによる、男のためのバーベキュー大会…、
スタート!!!」

陽介が腕を高く空に掲げ、バーベキュー大会の開催を告げた。

「うおおおおー!!!」

「うおおおおー!!!」

「うおおおおー!!!」

「うおおおおー!!!クマ」

一条、長瀬、完二、クマのテーションがピークに達した。

「前置きはいいから、さっさと焼きなさいよ」

箸を構えながら、千枝が言う。

「ははは!悪い、悪い、里中」

笑いながら、陽介は肉をパックから出して鉄板に乗せた。

みんなも和気あいあいと笑う。

「今日は、『肉魔人』が居ないから、十分に肉を食べるぞ！そーいや、以前、あいつと食べ放題の焼肉パーティーしたとき、本当にトラウマになるくらい……」

さくぶん

たいとる『にくがきえたひ』

さく：はなむらようすけ

きょう、ぼくはあいぼう、いちじょう、ながせ、かんじ、くまきちと、さめがわでバーベキューをしようとおもいました。

みせからバーベキューセットをかりて、みんなでじゅんびをしました。

なかなか、すみにひがつかなくて、みんなくせんしました。すみにひがついたとおもったしゅんかん、みんなのおがすみのせいで、まっくろになつてて、ぼくは、みんな、すごいおになつてーとわらいました。

そしたら、みんなもわらいました。

ははは！と、みんなでわらいました。

みんな、とてもたのしそうです。

『 奴が来るまでは……。』

「うわああああ！！！」

何故か、呼んでもいない、むしろ呼び出せない千枝が居て、陽介は鼻水を出しながら叫んだ。

「なっ、なんで！！！」

陽介が、千枝に指をさして叫んだ。

「おっ、焼けた、焼けた。いっただきますー！」

千枝は焼けた肉を問答無用に食べ始めた。

一番高い肉数枚を金魚すくいみたいな要領ですくいあげ、タレに

つけた。

「勝手に食うなああああ！！！しかも、凄い量！」

陽介は泣き叫んだ。

自分は、誰か千枝に連絡をしたか？とみんなに聞いた。

長瀬、完二、クマは思いっきり首を横に振った。

「…」

…。

一条だけ、無反応で滝のように汗を流している…。

まさか…。

「おつ、おい…、いちじょ…、まさか…、てめ…」

陽介は一条を睨んだ。

一条は後退りをしながら、口を開く…。

「あつ、いや…、じつ、じつは…、男だらけで嫌だったし…、ははは…。それより、なにより…、やっぱり、肉といえば…、里中さんだし…、ハハハ…！あつ、あと…、夏休みの思い出が野郎だらけのバーベキューなんてにが…、にが…」

陽介に涙目で睨まれた一条は口籠もった。

…。

そして…。

「そつ、その…、ごめんなさい…。来る途中、里中さんに会って、普通にバーベキューやると言っちゃいました…」

一条は素直に事情を話した。

「なんてことしてくれてんだ、てめえええええ！！男祭りでやるつと
いったやんけ！！」

陽介は一条の襟首を掴んで、泣き叫ぶ。
すると、一条は少し開き直った…。

「べつ、別にいいだろ！そんな減るもんじゃないし！！」
「減るんだよ！かなり減るんだよ！！！！」

泣き叫びながら、陽介は肉を食べている千枝の方に指さした。

「おい…、肉はないのかよ…、肉は…」

早くも千枝は3パック分の肉を平らげた。

「おしまいだ…。肉の終曲…、世界の崩壊や…」
「…」

陽介は握っていた一条の襟首を離して地面に伏せた。

一条は簡単に肉を消し去る千枝の姿に絶句した。

千枝は完二、クマの襟首を両手で握った。

「おい…。あんたら…、なんで…、肉食べるのに、あたしを誘わな
かった…」

千枝は凄まじい眼光で呼ばれなかった理由を完二、クマに聞いた。

「はっ…、花村先輩に…」

「…脅されてクマ…」

千枝に襟首を握られ苦しむ完二、クマは陽介を簡単に裏切った。

「てめえら、それでも人間かあああああ!？」

陽介は泣き叫んだ。

「は、な、む、らああ…」

千枝は握っていた完二、クマの襟首を離して、陽介を睨み付けた。

「うわあああああ!?!」

陽介は逃げた。

だが、目にも止まらぬ速度で駆ける千枝があっさりと陽介に追いつき、陽介の後頭部にハイキックを浴びせる。

「あまがみつ!?!」

陽介は後頭部に千枝の足がヒットしたため、意識は吹っ飛んだ。

「はあああ…」

まるで、スーパーサイヤ人のようにオーラを放つ千枝…。
ギロツ!と、千枝は自分を睨んだ。

!?

なぜか、自分が次の標的に定められている!?

「リーダー…。なんで…。あたしを誘わなかったあああああああ！？」

怒りのオーラを放ちながら、千枝が自分に襲い掛かった。

まっ、マズイ！これでは、自分も陽介同様にやられてしまう！

自分はずかさず振り返って、この場から逃げようとした。

だが…。

「へえ…。お肉食べると治るって言われたんだー。間黒夫センサーに…。」

！？

なんと、いつの間にか、目の前には雪子が！？

しかも、さっきの嘘がバレたためか、もの凄く怒ってる！！

「許さない…。」

雪子は自分の目の前に迫った…。

背後からは、千枝が迫る…。

(雪子…！)

(千枝…！)

一流のスポーツ選手、一流のプロレスラー、一流のお笑いコンビなどは言葉や合図がなくとも、互いの視線、呼吸音で意志疎通を図る。これは互いに数々の境地、修羅場を潜り抜けた先にある究極のコミュニケーション方法と言われている。

それを普通(?)の女子高生、里中千枝、天城雪子は普通に行っていた。

「どりゃああー!!」
「はああああー!!」

千枝と雪子は自分の首を挟み込むようにしてラリアット…、クロ
スポンバーをした…。

キミキスツ!!と叫びながら血を吐いて、自分は気絶した…。

数時間後…。

「さあー、みんなー、焼けたわよー」

と、千枝が鉄板に焼かれた肉を見て言った。

「やっほー!!」

あとから、千枝に呼び出せられたりせは笑いながら肉を取った。

「はいはい…、慌てない。はい、完二君達も…」

と言いながら、雪子は笑顔で、完二、クマ、一条、長瀬に皿を配
った。

「おおー、いただきます!!」

「サンキュー!!」

一条、長瀬は嬉しそうに鉄板から肉を取って食べた。

「いただきますッス…」

「いただきますしゅ…」

完二、クマは暗い表情で肉を食べ始めた。

「どうしたの…？二人とも？元気ないわね…」

元気のない完二、クマを雪子は気にした。

千枝はガツガツと肉を食い漁っている。

「いや…、なんつーか…」

「食べずらいクマ…」

完二、クマはチラッと土手に目をやった。

…。

土手には肉が食べられず、体育座りして泣く陽介と自分の姿が…。
二人とも、さっきの件で、千枝と雪子から肉をお預けされたのだ…。
何故か、一条、長瀬、完二、クマは除外。

「…なあああ、ゆきいいいい…、ねえ、心まで…」

自分と陽介は滝のような涙を流しながら体育座りで、レミオメ
ンの『粉雪』のサビの部分をリピートで歌った。

そんな光景を見て、りせは…。

「ねえ…、もういいんじゃないかな…。先輩と花村先輩も充分なく
らい反省したみたいだし…」

あまりに気の毒な自分と陽介を気にしたのか、りせがそう言った。

「…」

りせにそう言われ、雪子は首を自分と陽介に向けた。
千枝は無我夢中で肉にかぶりついている。

「こなあああ、ゆきいいい…」

土手では体育座りで、ハモる自分と陽介の姿が…。

「ったく…」

「…」

ため息をつきながら、千枝と雪子は土手に向かった。
そして、体育座りをする自分と陽介の前に立った。

「たく…、仲間外れすんなてーの…。あたしら、仲間でしょうが…」

と千枝は言った。

その言葉に陽介は、黙り込んだ…。

「それに、いくら、あたしでも全員分の肉食べないてーの」

千枝は肉を山盛りに盛った皿を片手に、陽介に言った。
説得力ねえ…と思った。

「ああ、すまん…。悪かったよ…」

陽介は苦い顔で、千枝に謝った。

「ふん…。解ればヨシ！」

千枝はそう言って、陽介を許した。
今度は、雪子が自分の前に立った。

「嘘は良くないと思う…。あなたが、お医者さんに行くって言った時、どうしたんだろって…。すっごく心配したんだから…」

雪子は、うつむきながら言った。

…。
「…。
すまない…。自分はそう静かに謝った。

「うん…。今度は、ちゃんと話してね…」
「そうそう…！」

雪子は、自分を許した。

横で千枝は首を振って頷く。

こうして、肉によって起きた悲劇は無事に一件落着いた…。

「よし！バーベキュー再開だね！！」
「おおー！」

千枝と雪子は笑いながら、川原へ向かった。

「たく…。結局、こーなんのか…」

陽介は苦い顔で言う。
だが…。

「でも、悪かねえーな…」

と陽介は笑いながら言う。

ああ…、と自分は笑いながら言った。

「すみません…。先輩らの話が長かったんで…」

「ごめんなさい、お肉がクマを…、クマを誘ったクマ…」

…。

あのやりとりの間、完二、クマは陽介が持ってきた肉をすべて平らげてしまった…。

「」

「」

「」

自分、陽介、千枝、雪子の顔の影が濃くなった。

一条、長瀬、りせは川原から逃げ出した。

夜 晴れ

陽介は寝る前に思った。

- ・ 里中 3パック分の高級肉 + 山盛りの肉を食べた。
- ・ 完二、クマ かなり食べた。
- ・ 一条、長瀬、りせ それなりに食べた。
- ・ 天城 肉苦手だから、あまり食べなかった。
- ・ 相棒 まったく食べられなかった。
- ・ 俺 まったく食べられなかった上、肉や野菜は全部自腹（金は後で割り勘で、みんなから集めるつもりだったが、あのドサクサで誰も払わなかった）。

「俺、すごい損してるうっうっうっ!!!!」

その陽介の叫びは、八十稲羽市内すべてに響き渡った。

事情により没にしたシリーズ編2

2011年7月某日(日) 晴れ

昼間

千枝と雪子が川原近くを歩いていると…。

「あ！もしかして…、天城さん？」

「あつ、剛史…」

千枝の幼なじみの河野剛史(千枝コミュ参照)が現れた。

彼は確か、雪子に想い馳せているヘタレだ。

しかし、雪子は誰？という顔をしている…。

「いやー、久しぶり…。覚えてる？小学校から千枝と幼なじみの…」

「えっと…、確か、代表曲『おやつは熱いお湯』のグループ、NORISUKEのバックダンサーさん？」

「違うから！ほら、小学、中学一緒だった剛史よ！」

千枝にそう言われて、雪子はピン！と来た。

「ああ！思い出した！確か、ドミノ倒し大会で、ドミノ積み上げる途中、くしゃみして全部のドミノ倒して、みんなに泣きながら謝った河野剛史君！」

「名前以外、違うわ！」

雪子は、ようやく彼を思い出したようだ。

「久しぶりね、河野君。まだ『カバディ』続けてるの？」
「続けてもないし、やったこともない…」

剛史は汗をかきながら、雪子に指摘した。
「どうやら、河野は雪子の記憶曖昧、もしくは、記憶にはぐぞいま
せんらしい…」。

「で、あんた、なんの用よ…。悪いけど、今、忙しいから…」

千枝がそう言ったが、剛史は無視して、雪子に近づいた。

「いやー、にしても、相変わらず、キレイだね…。天城さん…」
「えっ…、なに？」

剛史は顔を赤くして、雪子を見つめた…。
雪子は少し困っている…。

「あの…、良かったら、今から、俺とお茶にでも…」
「ちよつと、あんた…、いい加減に…」

剛史が雪子を誘おうとしているのを、千枝が止めようとした瞬間
…、釣竿を片手にした自分が現れた。

「あっ、リーダー！」

千枝、雪子、剛史は自分の方に首を向けた。

「あら、どうしたの？」

雪子に聞かれ、河原に釣りに来たと自分は話した。

「…！」

すると、河野は自分の顔を見てハッ！とした。

「あつ、確か、こないだ、千枝と一緒に居た（千枝コミュ参照）奴だよな」

どうやら、剛史は、千枝と一緒に居た自分のことを覚えていたようだ。

ああ、確か、君はカバディ部所属で、ドミノ倒し大会で、ドミノ積み上げる途中、くしゃみして全部のドミノ倒して、みんなに泣きながら謝った代表曲『おやつは熱いお湯』のグループ、NORIS UKEのバツクダンサーさんだよな…、と自分は言った。

「違う上に、そんな経歴ねえから！あんたら、打ち合わせでもしてんの！？」

千枝が豪快に叫んだ。

「ねえ、どんなお魚捕るの？」

雪子は、自分にそう聞いてきた。

とりあえず、カジキマグロかなー、と自分は言った。

千枝、剛史は呆れながら自分を見つめている…。

そんな千枝と剛史をよそに、自分と雪子は楽しそうにトークを弾ませた。

当然、剛史にとって、雪子が違う男とトークを弾ませているのが面白いわけはなく…。

「おい…、千枝…」

河野が表情を強ばらせ、千枝に首を向けた。

「なに？」

「天城さんと、あいつ…。仲よさげだけど…」

「うん…、雪子とリーダー、波長が合うのよ…（天然だから）」

そう千枝が言うと、剛史はビクッ！となった。

「まっ、まさか…、あの二人…、付き合ってたりにしてないよな…」

剛史は脂汗を大量に流し始めた。

仲よさげな自分と雪子を見て、誤解し始めたようだ…。

「いや、ちが…」

違うと言おうとした瞬間、千枝の脳裏になにかが走った。

以下、千枝の心の声…。

（待てよ…。剛史の奴…。昔から、雪子をしつこく誘ったりして、迷惑なのよね…）

どうやら、剛史は天城越えに挑む、血を吐きながらマラソンを走るような悲しきチャレンジらしい。

すると、千枝は悪知恵が思い浮かんだ…。

（そうだ…。雪子を剛史から守るには…、これがいいかも…）

千枝はクスクス…、と黒い笑いをした。

「なあ！おい、あの二人、付き合ってるのか！？」

痺れを切らした剛史が、千枝に問い詰めた。
すると…。

「うん！あの二人、付き合ってるよ！」

！？

なんと、千枝は嘘を言った。

「うっ、嘘だろ！？お前、こないだ居ないって、言ってたろ！」

剛史は、凄まじくショックを受けた。

「こうかばつぐんだ！」

どうやら、千枝は雪子と自分が付き合っていると嘘を言い、剛史に雪子を諦めさせようする作戦らしい。

(うおっ！効果あり！)

千枝は腹の底で笑った。

「いやー、リーダーと雪子、ほんつとに、ラブラブよー！！こないだ、二人で『ディステニーシー』に行ったらしいしー」
「せつな！」

千枝の追い打ち嘘に、剛史は更にショックを受けた！

「いやあー、もうほんつと、ラブラブ！！そのうち、石覇ラブラブ天驚拳を放つんじゃないかくらいラブラブ！！」

「えふっ！」

千枝のさらなる追い打ち嘘に、剛史は更にショックを受けた！
というか、剛史はなにか吐いた！

「いやぁー、リーダーが雪子に告白する瞬間は感動だったわぁ…。
走っている宅配トラックの前に、リーダーが飛び出して…」

千枝はハンカチを片手に、涙を拭きながら嘘を続けた。

「それで、こう雪子に叫んだのよ…。『ぼくはあ、死にましえーん
！あなたと、結婚するまで…、ぼくはあ、死にましえーん！！めっ
ちや、スキッキねーん！！オヌシがめっちや、スキッキねーん！！』
って叫んだ姿に全八十稲羽市民が泣いたわ…」

「せいえい！！」

千枝の追い打ち嘘に、剛史は更にショックを受け、とうとう血を
吐いた！

「ゼーハー、ゼーハー」

剛史はショックで、今にでも倒れそうだ。

（まさか、血まで吐くとわ…）

あまりの剛史のダメージっぷりに、千枝は引いた。
しかし、大事な友達の雪子を守るため、千枝は容赦しない…。

（次で、仕留めねば…）

千枝は剛史に止めを刺すタイミングを狙った。すると、弱々しく剛史は口を開いた…。

「あつ、あの二人…。その…、ど、ど、どのくらいの仲』なんだ…」
「…！」

ずいぶんと野暮なことを、剛史は千枝に聞いた。しかし、千枝にとってはチャンスだった。これで完全なる止めを刺せる…と千枝は目を光らせた。

「あの二人、赤いきつねを食べっこしてたよ」

グアテマラッ！！！

千枝の止めの一言により、剛史はショックで全身から血を噴き出した…！！

「ぐばああああ…！」
「ちよっ！あんた！大丈夫！？」

全身から血を噴き出す剛史の姿に、千枝はビククリした。

すると、剛史の目には、さっきから会話に夢中で、周りを見ていない自分と雪子の姿が目に入った。

自分は、なんなら雪子も釣りをするか？と聞いた。

「うん！」

雪子は嬉しそうに返事した。

この雪子の表情に、剛史はショックを受けた！

「まっ…、マジで仲良さそうだ…」

剛史はガクガクと震えた。

「じゃあ、行く」

自分と雪子は鮫川に向かった。

偶然とはいえ、この光景は、剛史にさらなる大ダメージを負った！

「くそっ！！！」

「あっ、剛史！？」

剛史はこの場を走り去った。

「やば…、やりすぎだったかな…」

泣きながら去って行く剛史の後ろ姿に、千枝は罪悪感を感じた。

だが…、千枝の脳裏に、こないだの剛史の言葉が思い出された…。

『天城さん、こないだ見たら、全然イメージと違ってるしよ！なんか影しょってる感じが良かったのに！お前の影響だろ！！』

と言った剛史の台詞が思い出された（千枝コミュ参照）。
これにより、千枝の罪悪感は薄まった。

「剛史の奴…、これで雪子に迫らなくなるというけど…」

これで剛史は雪子から身を引けばいいかな…と千枝はそう思った。

事情により没にしたシリーズ編2（後書き）

没にした理由：このあと、剛史が主人公に逆恨みし勝負を申し込むという展開になる予定でしたが、まったく話が弾まずグタグタだったため没に…。グタグタになったのは私の未熟さが悪いのですが、剛史は、千枝ちゃんを傷つけたり、悲しませたりしたので、このP4で数少ないムカつくキャラの一人です（笑）まあ、話の流れるには必要なキャラではあるとは思いますが…。

緊急マヨナカ特番編 特別編 (前書き)

今回の話は、とある情報が入ったため、ペルソナ3をネタにしています…。あらかじめ言いますが、3も大好きですので、以下の内容は否定的な文ではなく、あくまでネタで書いています…。純粋な3のファンのみなさん、すみません…。

緊急マヨナカ特番編 特別編

2011年8月某日(?) 大雨
夜

マヨナカテレビになにかが映った!?

『P3がPSPで、リメイク!?!』

『主人公は、男の子と女の子!?!』

『エリザベスが男に!?!』

『11月発売予定!?!』

ここで、マヨナカテレビの映像が途切れた…。

翌日 雨

昼間

ジユネスフードコートにみんなが集まった。
みんな険しい顔をしている。

「みんな…、昨日のマヨナカテレビ…、観たよな…」

陽介がそう言うと、千枝、雪子、完二、りせ、クマが頷いた。

「うん…」

千枝が手を震わせながら言う。

「あたし達、まだフェス出してないのに…」

雪子がテーブルに顔を伏せて言う。

「3は追加ディスクのフェスとか…、その続きをアニメ化とか…、
いっぱい関連メディア商品出したってのに…。今だにドラマCDだ
って出してるじゃん…」

りせは弱気に言う…。

「4だけドラマCD出るのが、やけに遅かったクマ…。というか、
第2弾の発売日ハッキリさせるクマよ…」

クマはしぼんでいる…。

「というか…、なにより、問題なのは…、今回、女の子が主人公に
選べるってことだろ…。これによって、『ある選択肢』が大幅に変

わる…」

陽介が言った。

すると、千枝がハッ！となった。

「えっ、まさか…！あのプロテイン先輩とか、テレツテと、特別な関係ルートを歩けるってこと！？」

千枝は頭を抱えた。

「プロテイン先輩はまだしも、テレツテだけは、マジ勘弁だわー」

「千枝…」

雪子は千枝の肩を撫でた。

一気に空気が、どんよりした。

みんな、沈んでいる…。

すると、完二が立ち上がった。

ダン！

！？

完二はテーブルを叩いた。

「先輩ら！なに、ウダウダ弱音吐いてんツスか！？」

完二の一喝で、みんなが驚いた。

「確かに俺ら4だけ、関連グッズやドラマCD出るのが遅かったり、鬼難易度の初代ですら10年越しのリメイクであったのに、2006年に出て追加も出して、2009年でいきなりリメイクの3の待

遇の良さに、絶望したくなるのわかるツスけど…、一番辛いのは、初代、3がリメイクされてるのに、まったく、なんの音沙汰のない2なんじゃないツスカ!？」

!？」

その完二の言葉に、みんなの目が覚めた!!

「そつ、そつだな…」

陽介が目を輝かせている。

「そつだよね…。いつまで経っても、あたしのフィギュアが出てないから弱気になっちゃったけど、完二君の言う通りよね!」

千枝は目を輝かせた。

だが、千枝のその言葉に、雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）は何故か気まずい顔をした。

ああ、完二の言う通りだ…と、自分は雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）を見つめながら言った。

「へへっ…、完二のくせに生意気だ」

「なんツスカ、それ!？」

と、陽介と完二は、雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）を見つめながら言う。

千枝は雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）を見つめながら元気良く立ち上がり…。

「よし!じゃあ、みんなでペルソナ3のリメイクが成功するように、肉食べ行くこうか!」

と叫んだ。

「なんで、肉だよ……」

「まあ、いいじゃねえツスカ」

じゃあ、食べに行こうか…と笑いながら、自分は雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）を見つめながら立ち上がった。

千枝、陽介、完二、自分は笑いながら、肉を食べにジュネスを後にした。

…。

雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）はジュネスのテーブルにうなだれた。

「あたし達……」

「なにか悪いこと……」

「したクマか……」

雪子、りせ、クマ（フィギュア出した組）は、自分、陽介、千枝、完二（フィギュア出てない組）の背中を見つめた…。

おまけ

2009年8月21日(金) 雨

学生寮

マヨナカテレビご覧のみなさん、こんにちは…。
自分の名は、ペルソナ3主人公(CV・石 彰)…。
いつも、ペルソナ4主人公がお世話になってます…。

今回、PSPで自分達が活躍するらしいとのことで挨拶に伺いました。

パチパチー

先輩である2より、先にリメイクとのことで、大変光栄に思います。

フアンのみなさん、ありがとうございますー。

今回のリメイクは、多少のゲームシステム変更や改善、女の子主人公って選択肢になります…。

それはまだしも…、エリザベスが男ってなにさ…。目玉の親父とこの男エリザベスで、相当にベルベットルームが暑苦しくなるんじゃないでしょうか…。

ていうか、リメイクされて、また自分が最後に んだら、自分がぬためにリメイクされるもんじゃありませんか…。

この辺、4みたく選択肢に…。BADで、俺が みたいな感じに…。

長くなりましたが、とりあえず、P4共々、P3の応援よろしく
お願いします…。

「誰と話てるであります?」

背後から、アイギスが現れた。

緊急マヨナカ特番編 特別編 (後書き)

というわけで、ペルソナ3リメイク、おめでとうございます。しかし、本当にいきなりでしたね…。あと、2がリメイクまだなの何故？

オープニング編 特別編 (前書き)

P3リメイクが出て燃料投下したので…、また再スタート…。ちょうど、時期が夏期なので、夏をテーマにしております。作者をタルタロスに放置しないと約束出来る方のみ、お進み下さい…。

オープニング編 特別編

原作

『ペルソナ3』など

制作

『小説家になろう』

月光館学園教育委員会

脚本

霧紙子

提供

桐条グループ

辰巳ポートアイランド

主演

ペルソナ3主人公こと、キタロー

2009年某月某日(月) 晴れ
昼間

「やっほー！やっば夏と来たら、海っしょー！海ー！」

真っ白な砂の上と太陽の下で、水着姿の順平が雄叫びを上げた。

「そうよねー。夏といえば、やっぱり海ー！」

ゆかりも水着姿で、開放的に両手を広げた。

「おいおい…、ハシヤギすぎだぞ…」

美鶴も水着姿で青空を見つめた。

「なんで、俺だけ、ふんどしだ…」

真田は自分だけ、ふんどしなのを気にした。

「みんなー！バレーやりましょうー」

風花が水着姿でビーチボールを持って現れた。

「真っ白な砂…、降り注ぐ紫外線…、着慣れない水着がポロリする
であります」

アイギスはわけのわからないことを言った。

「よし！キタロー！バレーやろうぜー！」

と順平がパラソルの下で、サングラスをして太陽を睨むキタロー
に言った。

キタローはサングラスを外し、アロハシャツ姿でパラソルから出
た。

「…」

皆、開放的に夏を楽しんでいるというのに、乾だけ制服姿で呆然としている。

「どうした、乾？なんで、お前だけ制服だよー」

「そうだよー、せつかく、海来たのにー」

制服姿の乾を見て、順平、ゆかりがそう言う。

キタローは乾に近寄り、どうした？顔色が優れないぞ？と乾に言った。

魅力が高まった。

すると…。

「あの…」

乾はモジモジしながら、口を開いた。

「あつちで、すごい睨んでる人たちが居るんですが…」

乾が指差した先には、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマ、自分のP4メンバーが鉄格子に噛みつくようにしがみつく姿があった…。

P4メンバー全員が涙目で、P3メンバーを睨んだ…。
羨ましいのだ…。海に行けて、リメイクで新作と来たから…。
真田が乾の目を手で塞ぎながら、口を開いた…。

「あれは…、見なかったことにしろ…」

P3メンバーは愕然としながら、ビーチバレーを始めた…。

…。
という夢を見たのを、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマに聞かせた。

みんな、力尽きた顔をしている…。

そんな中、陽介が手を挙げて立ち上がった。

「というか、まず…、順平とか、キタローって誰だよ…」

…。
誰だろう…。

まあ、夏の不思議体験ってことで細かいことはこらえてくれ…。

ファンフィクション作品『P3 PPPのギターpart2
真田とグローブ』人がタルタロスに迷う瞬間を見てしまった…、
夏『…ではなく、引き続き』P4 クライマックス番長part
2 花村とクローバー』人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった
…、夏』をお楽しみ下さい…。

オープニング編 特別編 (後書き)

P3リメイク記念ということで、前回と今回は許して下さい…。次回から、通常更新です。夏ももうあと僅かですが、よろしくお願ひします。

若さって、若さってなんだ！？諦めないことさー！編

2011年8月20日（土） 晴れ

夜

今日は夏祭り…。

…だが、クマの策略（原作ゲーム参照）に引っ掛かり、陽介、完二、自分の男三人は負のオーラ全開で祭り会場に立ち尽くす…。

「負けじゃね？俺ら、負けじゃね!？」

陽介は、悔しそうにオウムのように同じ言葉を呟く。

「まあ、いいじゃねえツスカ。このまま、野郎三人で過ごしましよ
うや」

「なんで、てめえだけポジティブなんだよ…」

「いやー、真の漢ツスからねー」

まだクマの策略に引っ掛かっているのか、完二だけ嫌にポジティブだ。

「ああ…、つたく…。でも、くよくよしてても仕方ねえ…。よし、せつかくの夏祭りだ！楽しもうぜ！」

「おおーツス！」

陽介、完二は開き直って、夏祭りを楽しむことにした。
そして、陽介は型抜きの屋台を見つけた。

「よっしゃー！まずは、夏祭りといえば、型抜きだろー!！」

「おおー！型抜き！！夏祭りの定番じゃないツスか！！成功したら、おこづかいアップスよ！」

陽介、完二、自分は型抜きをすることにした。

百円を払い席に座り、店のおじさんから型を渡され、陽介、完二、自分は型抜き用の針を握る。

「よっしゃあ！！行くぜ！」

「へへっ！俺、こつ見えても型抜き得意なんツスよね！」

陽介、完二は自信満々だ。

三人同時に型に針を刺す。
すると…。

パッリン
パッリン
パッリン

「…」
「…」

…。

針を刺した瞬間、三人同時に型を真っ二つに割ってしまった…。

0・01秒で型抜きに失敗してしまった…。

「…」
「…」

みんなの上がっていたテーションが、ものの数秒で下がった…。

「まつ、まだまだ！」

「そうッスよ！おい、オヤジ！もう一回！！三人分！！」

陽介、完二、自分は諦めずに、再び型抜きに挑戦した。
だが…。

パツリーン

パツリーン

キラッ

「…」

「…」

…。

針を刺した瞬間、また三人同時に型を真つ二つに割った…。

また、0.01秒で型抜きに失敗してしまった上に、自分だけ割れたときの擬音が変わだ…。

「まつ、まだまだ！！諦めたら、そこで型抜き終了だ！！」

「オヤジ！三人分…、いや…、三人で10回分くれ！！」

ムキになった陽介、完二、自分達は三千円を出して、10回の型抜きに挑むことにした。

…1分後…

負のオーラ全開で、陽介、完二、自分は型抜き屋をあとにした。

「…」

「…」

結局、誰一人として型抜きに成功したものは居なかった…。

沈黙が続く…。

すると、突然、陽介が拳を握り…。

「まっ、まだまだ！まだ俺達の夏は終わっちゃいねえ！」

と開き直って叫んだ。

すると、完二はハッ！となった。

「そうツスよ！花村先輩の言うとおりツスよ！あっ、あそこに、金魚すくいがあるツスよ！」

完二は金魚すくいを見つけた。

「よっし！じゃあ、金魚すくいやろっぜ！！」

「おおーっ！」

再び、勢いを取り戻した陽介、完二、自分は金魚すくいに向かった。

5分後…。

「…」

「…」

負のオーラ全開で、陽介、完二、自分は金魚すくいを手ぶらであとにした…。

10回やって、誰一人として金魚を一匹もすくえなかった…。
金魚すくいだけに、救えない結果だった。

「誰が上手いこと言えと…」
「…」

陽介、完二はナンパした女性が実は男だった時のようなテーションになっている…。

…。

沈黙が続く…。

すると、突然、陽介が拳を握り…。

「まっ、まだまだだ！まだ俺達の夏は終わっちゃいねえ！」

と開き直って叫んだ。

すると、完二はハッ！となった。

「そうツスよ！花村先輩の言うとおりツスよ！あっ、あそこに、たこ焼き屋があるツスよ！」

完二はたこ焼き屋を見つけた。

「よっし！じゃあ、気合い入れるため、たこ焼き食おうぜ！」
「おおーっ！」

再び、勢いを取り戻した陽介、完二、自分はたこ焼き屋に向かっ

た。

5分後…。

「…」
「…」

買ったたこ焼きには、どれもたこが入っていないかった…。
たこ入ってないなら、これなんなんだよ…と自分は考えた…。
知識が高まった。

…。
沈黙が続く…。
すると、突然、陽介が拳を握り…。

「まっ、まだまだまだだ！まだ俺達の夏は終わっちゃいねえ！」
と開き直って叫んだ。
すると、完二はハッ！となった。

「そうツスよ！花村先輩の言うとおりツスよ！あっ、あそこで、お
面売ってるツスよ！」

完二はお面屋を見つけた。

「よっし！じゃあ、気分転換にお面買おうぜ！…」
「おおーっ！…」

再び、勢いを取り戻した陽介、完二、自分はお面屋に向かった。

5分後…。

「
…」

お面屋には、シヨツカーのお面しか置いていなかった。

…。
三人共、シヨツカーのお面を購入して頭に着けた…。

なんとなく、『劇場版仮面ライダーディケイド オールライダー
対大シヨツカー』、2009年8月に公開してました…と宣伝した。
寛容力が高まった。

…。
沈黙が続く…。

すると、突然、陽介が拳を握り…。

「まっ、まだまだまだ！まだ俺達の夏は終わっちゃいねえ！」

と開き直って叫んだ。

すると、完二はハッ！となった。

「そっツスよ！花村先輩の言っとおりツスよ！あっ、あそこに、く
じ引き屋があるツスよ！」

「よっしー！じゃあ、くじ引きで運試しだー！」
「おおーっ！」

再び、勢いを取り戻した陽介、完二、自分にくじ引きに向かった。

5分後…。

「…」
「…」

三人共、くじ引き屋でのど飴を当てた。

「…」
「…」

陽介、完二、自分は無言でのど飴を舐めた…。

…。
沈黙が続く…。
すると…。

「うああああー！！んじゃこりゃあああー！！なんで、さっきから苦い思いばっかしてんだよー！！」

心なしか、美声になった陽介が力強く叫んだ。
すると、完二はなにかを発見した。

「あっ！」

「今度はなんだ！」

完二が指をさした先には、射的屋があった。

「くそ！今度こそ！」

先程から、ろくな目にあってないので、陽介、完二、自分は勢い良く射的屋に向かった。

「いらっしやい」

すると、店のおじさんが出迎えてくれた。

射的屋の景品を見ると、ジャックフロスト人形、ポータブルゲーム機、貯金箱などがあった。

「よし、ここなら普通に楽しめそうだぜ！」

と陽介が意気込むと…。

「ん？」

完二はなにかを発見した。

「どうした？完二？」

「いや、あの…、あれ…」

完二の顔が急に赤くなった。

陽介は、そんな完二の目線の先を見た。

すると、そこには…。

「なっ！？」

陽介は驚愕した。

なんと…、射的屋の景品の一つに『密着！お祭りで着崩れ浴衣娘が…』というタイトルのDVDが…。

あれは、間違いなく…、あれは…。

「なっば！？」

陽介は顔を赤くして叫んだ。

よい子の読者は存じないだろうが、地方や田舎での射的屋の景品に…、ゴホン！ゴホン！なビデオがあるのはよくあることである（本当である）

地方の中学生や高校生は、それ欲しさに射的に大金を注ぎ込み、失敗、挫折し、悔し涙を流し、大人への階段を踏むのだ（本当である！）

また、著名な射撃手やオリンピック選手は、中学、高校時代に訓練として、この景品を狙い集中力、精神力の強化を図ったと言われている（ウソである）

ある意味、射的屋にゴホン！ゴホン！ビデオがあるのは伝統競技である（ウソである！）

「さっ、さすがにアレは…」

完二は顔を赤くして、身を退いた。

自分も、さすがにこれはない…と言いながら、身を退いた。

だが…。

「ちくしょう！やってやるぜ！」

！？

なんと、陽介は血相を変えて、射的屋に千円を渡した。

「ちよつ！花村先輩…！！なにムキになってんツスカ！？」

完二は、ゴホン！ゴホン！なビデオを狙おうとしている陽介を止めた。

しかし、陽介は止まらなかった。

「お前らは悔しくねえのかよ！！夏祭りだつてのに、さつきから、苦い思いばかりかして！夏祭りだつてのに、なんも残らねえで、悔しくねえのかよ！！これじゃあ、俺たちの青春に、なんも残らねえじゃねえかよ！！」

陽介は銃を構えながら、泣き叫んだ。

「いや、だからって、んなビデオ取ることに必死にならなくていいしっしょ！というか、泣くことないしょ！！」

「じゃあかしゃ！」

陽介は完二を振り切って、ゴホン！ゴホン！なビデオに狙いを定めた。

完全に、陽介は暴走状態になっている…。

そして、陽介はゴホン！なビデオに向かって撃った。

パン！

外して、ジャックフロストの人形を当てた。

「ちくしょう！もう一回だ！！」

そう言って、陽介はもう一発、弾を込めた。

「…」

完二は完全に引いていた。
陽介はもう一発、撃った。

パン！

今度は、ジャックフロストの人形に当たった。

「ちいい！もう外れたあ！」

陽介は、また弾を込め直した…。

ポン…と自分は完二の肩に手を当てた。

「…？」

あつちで、りんご飴を食べようか…と自分は完二に言った。

「あつ…、はい…。付き合っス…」

射的屋に陽介を残して、自分と完二はりんど飴を食べに行った…。陽介は、またゴホン！なビデオに狙いを定め、弾を撃った。

パーン！

だが、狙いは外れ、ネコシヨウゲンとキングフロストの人形を同時に当てた。

「あんがー！！くそう！！！」

陽介が悔しそうに弾を込め直していると…。

「あつ、花村！」

「あら、花村君」

「あつ、花村先輩だ！」

「ヨースケ、クマー！」

！？

なんと、射的をやっている陽介の後ろに、千枝、雪子、りせ、クマの四人が現れた。

「ハッ！」

陽介は我に返った。

「あれ？リーダーと完二君は？」

「へえー、花村君、射的やってるんだー」

と言いながら、千枝、雪子は陽介に近づいた。

「あつ、まあ、まあな…」

陽介は汗を流しながら、ゴホン！なビデオに必死になった顔を隠そうと、さつき当てた人形達で顔を隠した。

すると、りせ、クマは驚いた。

「えっ、それ花村先輩が、全部当てたの!？」

「おおー！ヨースケ、すごいクマー！ゴルフ3か、シティーハーターみたいクマー」

陽介が目標から外して当てた人形達を見て、りせ、クマは驚いた。

「へえー、やるじゃん」

「すごいわ」

千枝、雪子も驚いている。

「あつ…、ああ…。よっ、良かったら、おまえらにやるよ…」

と、陽介は動揺しながら人形を千枝、雪子、りせ、クマに渡した。

「えっ、いいの?」

「嬉しい!」

「うわー！やさしー、花村先輩ー!」

「ウホホーイ！ヨースケ、最高クマー!」

千枝、雪子、りせ、クマは陽介から人形をもらって喜んだ。

「あんがと、花村」

「ありがとうね、花村」

「花村先輩、ありがとうー」

「ヨースケ、ありがとうクマー」

「あつ…、ああ…、どういたしまして…」

陽介は苦い顔をして、みんなの感謝の言葉に答えた…。

（結果オーライってか…）

陽介は罪悪感を感じながら、小声で呟いた。

しばらくしてから、帰宅した…。

「お兄ちゃん、お帰りなさいー。お祭り楽しかったねー！」

浴衣から着替えた菜々子が、笑顔で迎えてくれた。

…。

菜々子になにか渡したかったが、ろくな物を手に入れなかったため…、仕方なく、ショッカーのお面を渡した…。

「あつ、ありがとう…」

菜々子は、苦い顔でショッカーのお面を受け取った…。

若さって、若さってなんだ！？諦めないことさ！！編（後書き）

余談ですが、射的の景品にゴホン！ゴホン！なビデオがあるのは、私の地元では本当にありました。

さらば、ペルソナレングジュアイ…。生田目編完結

2011年某月某日（日） 曇り

昼間

直斗と生田目が街中を歩いていた。

「へえ、今は家業のお手伝いを…」

と、直斗は生田目の身の上話を聞いている。
すると、生田目は時計を見た。

「あつ…、そろそろ救済の時間だ…」

そう言いながら、生田目は構えた。

「とりあえず、また適当に叫んで…」

「わかりました…」

と生田目の頼みを、直斗は嫌々承諾した。

直斗は大きく息を吸った。

「うあああー、助けてー（棒読み）」

直斗が叫んだ。

すると…、誰かの足音が…。

「待てい…！」

と誰かが叫んだ。

「誰だ！？救済の邪魔をするな！」

と叫びながら、生田目が振り返ると、そこには…。

「アカレンジュアイ！！」

と制服を着た長瀬がポーズを決めた。
次に、制服の一条が…。

「アオレンジュアイ！」

とバスケットボールを持ってポーズを決めた。
次に、秀が私服を着て前に出た。

「ミドレンジュアイ…」

と恥ずかしそうにポーズを決めた。
次に、あいが制服姿で…。

「キレンジュアイ…」

と、やる気なさそうにポーズを決め叫んだ。
次に、結実が制服姿で前に出た。

「モモレンジュアイ！」

と、案外ノリノリでポーズを決める。

「5人揃って、ジュネス戦隊！」

と長瀬が言ったのに続いて、みんなが叫んだ。

「…………ペルソナレンジュアイ！」…………

そして、全員でポーズを決めた。

「…………」

生田目が呆然としている……。

「さあ！早く逃げるんだ！！」

「ありがとうございます！」

と、長瀬が直斗を逃がした。

そして、全員で生田目に向かい構えた。
すると……。

「あれ……、色はいいけど……、メンバーちがくないかい？」

生田目がそう言った……。

すると、長瀬が手書きの紙を生田目に渡した。

『今日は用事があって出れません。代打を送ります。by主人公
PS・仮面ライダーディケイドの最終回、どう思います？』

「…」

生田目は呆然とした。

そして、生田目は長瀬達の方に首を向けた。

「えっ、君ら、代打？」

と長瀬に聞いた。

「あいつ（主人公）から頼まれました…、アカレンジュアイ…！こ
と、長瀬大輔だぜ…！」

と、意外にノリノリで長瀬はポーズを決めながら叫んだ。
すると…。

「なんで、お前、そんなノリノリなんだよ…！」

と一条が長瀬に言った。

「いや、なんつつーか、やっぱ、こーいうのって男のロマンだろ？
なあ、秀君？」

「え、ええっ…！」

長瀬の言葉に、秀は嫌々頷いた。

ノリノリな長瀬に対して、一条、秀は乗り気ではないようだ…。
すると、一条が…。

「ロマンだかマロンだか知らないけど、付き合わされる、こっちの
身にもなれよ…！」

と、青筋を立てて怒った。

そんな一条に対して、長瀬はムツと来た。

「文句なら、あいつに言え！俺に八つ当たりすんなよ！」

「なんだと!？」

「うっ、うわぁ、喧嘩はやめてください!！」

長瀬と一条は喧嘩を始めた…。

秀は二人を抑えようと必死になっている。

「…」

生田目は呆然とした。

今度は、あいと結実の方に首を向けた。

「つーか、レンジュアイだかなんだか知らないけど…。なんで、あたしが黄色よ…」

と、あいが結実を睨んで言った。

「あなた、あんまりやる気なさそうだったから、あたしがピンクに…」

そう結実が言つと…。

「勝手に決めないでよ!!あたしはピンクがやりたかったの!」

なんと、あいはピンクをやりたかったそうだ。
だから、イマイチ乗り気でなかったのか。

「！」

！？

生田目が大声で叫んだ。

それには驚いて、みんな喧嘩をやめて黙った。

そして、みんなの目の前に立った。

「こんなくだらないことで喧嘩をして、君らは、それでもヒーローか！？」

！？

この言葉に、長瀬、一条、秀、あい、結実は無言で黙り込んだ。

生田目は語りだした。

「いいかい……。戦隊物っていうのわね……。5人でひとつ……。5人で1人なんだよ……。5人の個性が混ざり合って、初めてひとつのヒーローなんだよ……。仮面ライダーでも、ウルトラマンでも、フェザーマンは1人だけど……。戦隊物はね、5人の心が一つになることで、一つのヒーローになれるんだよ……」

生田目は涙ながらに語る。

「なのに、君らは自分のことばかりで、互いを認め合おうとしない！いいかい！君らは、5人でひとつなんだよ！！自分のことよりも仲間を尊重し認め合ってこそ、真の戦隊物なんじゃないのか！？」

！？

生田目の必死な言葉に、長瀬、一条、秀、あい、結実は無言で黙り込んだ。

「そうだったのか…」

「ああ…、この人の言うとおりだ…」

「はい…」

「ふっ、ふん…」

「あたしが間違ってた…」

長瀬、一条、秀、あい、結実は感動して涙を流し始めた。
どうやら、みんな目が覚めたようだ。
それを見て、生田目は涙を拭った。

「ふっ…、どうやら解ってくれたようだね…」

生田目の必死な説得に、みんなの心が揺らいだ…。

「ありがとうございます！今度、よくみんなで話し合います…」

長瀬が、生田目に深々と頭を下げた。

「ああ…、解ってくればいいんだよ…」

長瀬、一条、秀、あい、結実で全員が生田目に頭を下げた。

「お疲れさまでしたー」

「ああ…、お疲れ…」

こうして、みんな現地解散した…。

しばらくすると、この場所に自分が現れた…。

「ん？君は！？今日は、用事があったんじゃないのかい！？」

生田目が自分に気付いた。

自分もさっきの生田目の言葉を聞いていたのか、涙を流している。

「君も、さっきの僕の言葉を聞いてくれたのか…？」

生田目は嬉しそうに言う。

そして、自分は生田目にごう言っただ…。

その情熱を仕事に傾ければいいのに…と。

生田目は頭を抱えて塞ぎ込んだ。

さあ、お前の罪を数える編（前書き）

かなり間が開いてすみませんでした…。えー、とりあえずは9月い
っぱいよろしくお願いします…。

さあ、お前の罪を数える編

?月?日(日) 晴れ

昼間

ジュネスの駐輪所。

いつものメンバーだが、今日は陽介に呼ばれた…。すると、陽介が原付バイクに乗って現れた。後ろには、クマがいる。

「よお！みんなー！！」

「よお！みんなクマー！」

！？

満面の笑顔で、陽介、クマがみんなに手を振っている。すると、雪子が前に出た。

「花村君…、警察に行きましょう…。今なら、まだ罪は軽いはずだし…、だから、みんなと一緒に…」

「違うわ！ノツケから盗んだの前提!？」

どうやら、陽介が乗っている原付バイクは盗んだものじゃないらしい…。

すると、満面の笑みで陽介は原付の免許をポケットから取出し、みんなに見せびらかした。

「いやー、取ったのよ！原付免許！しかも、今までのバイト代降ろして、バイクまで買ったしー！！」

どうやら、自分の免許とバイクの自慢のために、みんなを呼び出したようだ…。

「んなことで、呼んだのかよ…」

「うわ…、うざー」

と完二、千枝が呟いた。

「へえ…、あらあら、里中君、完二君…。嫉妬してんの？」

「誰が、原チャリごときに…。ていうか、マジうぜー」

余裕の表情で、陽介が千枝に笑いかけている…。

日曜 時半の　　ちゃん並のクオリティにうぜえ…、と言った。

勇気が高まった。

「そこまで、ウザくねえよ!? まあにしてもいいだろ…。このバイク、中古だけだな」

陽介が笑っている…。

すると、りせが食い付いた。

「まあ、花村先輩は置いておいて…、確かに、バイクってカッコいいー!」

「そう思うか!? りせ!」

今度は完二が食い付いた。

「花村先輩と族はうるさいけど、バイクはいいッスよねー」

「完二、てめえぶっ飛ばすぞ…」

次は、雪子が前に出た。

「まあ、花村君がうるさいのは今に始まったことじゃないし、今後の自分たちの受け止め方や努力でなんとかなるとして、確かに、バイクってカッコいいね！」

「なに、その人の傷を深くえぐる前向きな悪口！」

苦い顔で、千枝がバイクに近づいた。

「まあ、確かに、バイクはいいよね……」

「だろだろ！」

いつの間にか、みんなが陽介のバイクで盛り上がった。

自分だけが置いてきぼりを食らっている。

ふん…、たかが、バイクの一台だろうが…と言ったが…。

「花村先輩！。ちょっと、座ってみてもいい？」

「いいぜー、いいぜー。ただし、アクセル握るなよ」

りせが乙女の目で、陽介のバイクを見ている…。

しかも、これをキツカケに…。

「あつ、あたしも乗ってみたい！」

「あつ、あたしも！」

「俺もいいツスカ！花村先輩！！」

「クマも！クマも！」

千枝、雪子、完二、クマが盛り上がった…。

自分だけ置いてきぼりを食らっている。

「わああああー!」と叫んで自宅に帰った。

自宅の自室

泣きながら、ソファーにつづくまった…。
すると…。

『み、ん、な、の、よ、くの友!』

「たまたま、つけていたテレビでは『時価ネットのたなか』がやっている…。」

「そういえば、今日は日曜でテレフォンショッピングの時間だ…。テレビの中で、田中社長が今日のオススメ商品を紹介した。」

『今日のオススメ商品はこちら!』!』

!?

自分の目を疑った。

翌日 朝 晴れ

ジュネスの入り口前で、陽介、千枝、雪子、完二、りせがバイクの話で盛り上がっていた。

「いやー、バイク最高だろ!」

「うん、まあ、おもしろかった!」

千枝を始めとするみんなが楽しそうだ。

「そういえば…、彼はどうしたのかしら？」

すると、雪子が自分のことを思い出した。

「ああ、先輩のこと忘れてツスね…」

「あつ、りせも忘れてた…」

「なんか、悪いことしちゃったクマね…」

さすがに、完二、りせ、クマが自分をハブったのを思い出し反省をしていると…。

バルバルバル！！！！

けたたましい爆音が鳴り響いた。

その音に驚いて、みんなが振り向くと、そこには…。
！？

なんと、みんなの前に自分がベントツに乗って現れた。

「なっ！？」

陽介が唾然となった。

すると、一気に、千枝、雪子、完二、りせが自分に近づいてきた。

「うあ！すごい！」

「ちよつと、どうしたの！？」

「すごい！ベントツじゃねえツスカ、先輩！！」

「先輩、超カッコいいー！！」

一気に自分のベンツが、みんなの気持ちをわしづかんでいる。昨日、時価ネットたなかで売られていたので買ったと言った（しかも、速達で）。

数え切れない数の諭吉を出したと言った。

「がつ…、が…」

陽介が口を魚のようにパクパクしている…。そんな陽介を半笑いで見つめた。

「キミの隣に…。そつ、その乗っても…、いつかな…、ハハ…」

千枝が顔を赤くして、自分に近づいてきた。

「だっ、ダメよ！千枝が先だなんて！」

雪子が千枝を止めた。

「先輩…、りせが最初に…、先輩の隣でいいかな…」

りせが顔を赤くして、自分に迫るのをクマが止めた。

「ダメクマ！！ここは、クマクマよ！」

完二も顔を赤くして、自分に迫った。

「先輩…、優しくお願いします…」

陽介を除いて、みんなが自分のベンツで盛り上がっている。

「…」

…。

昨日、原付で調子に乗っていた陽介がガツクリしている。

ベンツに乗ったら気分爽快になると思ったが、陽介のガツクリしている姿を見ると爽快ではなかった…。昨日、ハブられて寂しかったせいだろうか…。

運転席から降りて陽介の前に歩み寄った。

「笑いたきゃ…、笑えよ…」

陽介が卑屈になっている。

あまり人に自慢ばかりするのは良くないと論じた。

寛容が高まった。

伝達力が高まった。

「ああ…、悪かったよ…。やっぱり、お前は最高だぜ…、相棒！」

陽介は涙を拭いて立ち上がった。

こうして、みんなが自分のベンツを中心に一つになった。
すると…。

「そーだ！みんなで、今から海に行かない!？」

と、りせが言った。

みんなが驚いた。

「今から、海!?!うはー!いこいこー!」

千枝はノリノリだ。

「海…。もしかして、また水着って流れ…」

雪子は、チラッと完二を睨んだ。

「なんで、俺を見るんスカ！？なんも、やましいこと考えてねえツスよ！！」

と必死に言っているが、案の定、完二は鼻から血を流している。バチン…！！と雪子のスナップの効いたビンタが辺りに響いた。

「おおー！！やっぱ、夏つつたら海だよな！！」

「そうクマー！海ー！海ー！」

陽介、クマは嬉しそうだ。

こうして、みんな海に行くことになった。

自分が運転するベンツと陽介の原付は、海を目指し出発した。

助手席には、クマ。後部座席には、千枝、雪子にりせ…。陽介、

完二は2ケツの原付でベンツの後ろを走る。

俺達は見慣れた街を離れ、風となって海を目指す。

どこまでも長く続くテールランプが眩しくて、俺達は瞬きもせず
に真っ白な光の渦に巻き込まれて行った…。

数時間後…。

八十稻羽警察署の留置所の中で、自分、陽介、千枝、雪子、完二、

りせ、クマが体育座りをしている…。
そういえば…、自分は…、無免許だった…。
俺達は瞬きもせずに、現実という名の真っ黒な渦に巻き込まれて
行った。

2011年8月某日(日) 晴れ

昼間

ジュネス屋上

「つてなるから、バイクなんか買わない方がいいって」

と、千枝が以上の作り話を陽介に言った…。

「無駄になげえよ!!」

陽介が叫んだ。

自分と雪子は、その話を聞いて出た涙をハンカチで拭う…。
あくびで出た涙を。

さあ、お前の罪を数える編（後書き）

無免許運転、ダメ絶対！

ペルソナW編 特別編 (前書き)

今回のネタが解りにくいと思われるので、以下の元ネタは、アニメの銀魂の地デジのお知らせです…。

ペルソナW編 特別編

?月?日(?) 雨

夜

マヨナカテレビに、なにかが映った!?

非常に鮮明な映像だ!

陽介、クマ、りせが映っている。

「えー、小説家になろうからのお知らせで、今御覧になっている小説家になるうは、近日内にリニューアルで移行いたしますー」

「いたしますー」

「いたしますクマー」

と、やる気になそうに陽介、りせ、クマが言った。

「はあ…」

と陽介がため息を吐いた。

「ヨースケー、なんで、そんなにやる気ないクマか?」

とクマが聞いた。

すると…。

「だって…、この作品…、近日内までやってないアル…」

となぜか、片言な喋り方でりせは言った…。

クマの顔が凍った。

「そっ、そうクマね…」

ここで映像が途切れた…。

翌日

またマヨナカテレビに、なにかが映った!?
非常に鮮明な映像だ!
陽介、クマ、りせが映っている。

「えー、小説家になるうからのお知らせで、今御覧になっている小説家になるうは…」

と、やる気になそうに陽介が言っていると…。

「ヨースケ…。よく考えたら、このファンフィクション作品がお知らせする必要ないクマ…」

クマがそう言った。

ここで映像が途切れた…。

字数が足りなくて投稿出来なかったので、オマケ。以下、P3
Pのプロモをモチーフにしており、想像で書きました。

2009年7月21日(火) 晴れ

屋久島

柏木典子(年齢不詳)が、休日のバカンスを屋久島で過ごしている…。

「やつ、やあ！お姉さん、今、暇なの？」

柏木の目の前に、前髪の長い少年と、帽子を被った少年に筋肉質な少年が現れた。

「どうやら、ナンパのようだ…。」

「なあに？坊や達…？もしかして、ナンパ？いけない子達ねえ…。」

柏木は胸を強調して、少年達と向かい合う。

「さっ！真田先輩、ここは任せたっす！」

柏木の色仕掛けに焦った帽子の少年は、筋肉質な少年の後ろに隠れた。

「おい！俺に振るな！くっ…、ここはお前に任せる…。」

と筋肉質な少年は、前髪の長い少年にパスした。

前髪の長い少年は困っている。

「なんなの…。坊や達…。早くう…。言いたいことがあるなら言いなさい」

と、柏木が急かした。

すると、前髪の長い少年がこう言った…。

うなぎ、好きですか？

屋久島の時間が停止した。

それから、2年と数か月後の八十神高校で、柏木はこの話を教壇でした…。

うなぎについて語っている途中、そんな昔話を思い出したらしい…。

「てわけなのー！あー、あの時の前髪の長い鬼太郎ぽい子、素敵だったわあー。久慈川とか言うガキンちよアイドルに夢中なあなた達

と違って、見る目があったわぁねえー。ふふふ……」

と、柏木が一人で興奮している。

「あいつをナンパするって、どんな物好きだよ……」

陽介がボソツと言った。

ペルソナW編 特別編 (後書き)

小説家になろうの運営様、ネタにしてみませんでした…。あと、P3Pに柏木先生がゲストって…。逆パターンだなあ…。

パロススペシャル編

？月？日（？） 雨

夜

マヨナカテレビに、なにかが映った！？
非常に鮮明な映像だ！

『チエちゃんのパーフェクトさんすう教室』

歌：里中千枝 feat. クマクマ

みんなー、チエちゃんのさんすう教室始まるクマよー！
チエちゃんみたいに得意な教科だけ、平均点以上目指して頑張る
クマねー

ジュネスからバスが出てー、初めに番長乗りましたー
四目内書房で番長降りて、イザナギ、ジライヤ乗りましたー
りせちゃんちで、イザナギ降りて、結局、結局、結局、合計何人
だ！？

答えは、答えは、答えは、0人！！0人！！
何故なら、何故なら、それは！？

ペルソナは…、人じゃない…。

『千枝ちゃんのパーフェクトさんすう教室』
完

ここで映像が途切れた…。

字数が足りなくて投稿出来なかったので、オマケ。

2011年8月某日(?) 晴れ
昼間

ジュネスの屋上で、クマとしりとりすることにした。

「じゃあー。ペルソナ!」

ナツパ…。

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん!」

完

まだ字数が足りなくて投稿出来なかったので、オマケ。

2011年8月某日(?) 晴れ

昼間

ジュネスの屋上で、雪子としりとりすることにした。
よし、じゃあ、ペルソナの『な』からだ。

「ナン（カレーの）」

完！

まだまだ字数が足りなくて投稿出来なかったので、オマケ。

2011年8月某日（？） 晴れ

昼間

ジュネスの屋上で、千枝としりとりすることにした。
よし、じゃあ、ペルソナの『な』からだ。

「ナンコツ！」

ツンデレ…。

「レバー！」

バスケ部…。

「豚肉！！！」

久慈川りせ…。

「背脂!!」

ラピユタ…。

「タン塩!!」

オーラバトラ…。

「ランチタイムの焼き肉定食!!」

久米田康治…。

「直火焼きに…」

肉、肉、うるせえッッ!!!!

完ッッ!!

夏色番長編（前編）（前書き）

6月スタートで8月に完結させる予定でありましたが、私生活が忙しく、9月末まで引っ張ってしまった今ファンフィクション作品ですが、この回から数話、完結編とさせていただきます。どうか、最後までよろしくお願いいたします。

夏色番長編（前編）

2011年8月某日（水） 曇り

朝

夏休みも、あと数日になった朝。

居間で、大声がするので降りてみると…。

「お父さん！なんで、菜々子のケーキ食べちゃったの！？大事に取ってたのに…」

「いや…、すまん…。昨日の夜は酔っぱらってな…」

菜々子と堂島が喧嘩をしている…。

話を聞くと、昨夜、堂島が酔っぱらって帰ってきた時、腹が空いていたので冷蔵庫にあった菜々子のケーキを食べてしまったらしい…。そのケーキは、明日のお楽しみに取っていたそうだ…。

「お父さんのバカ！」

「菜々子！親に向かって、バカとはなんだ!？」

…。

とばっちりを受けそうな予感がしたので、早々に自宅から離脱した。

自分は鮫川を散歩した。

ふわふわりー、ふわふわりー、あなたが笑っている、それだけで…と鼻歌をして歩いていると…。

「せ、センサー…」

…!

いきなり、河原からクマが現れた。ヨレヨレで、今にでも泣きそ
うな表情で…。

どうした…?と聞くと…。

「オロローン！」

!?

クマは自分に泣きついた。

…。

どうやら、なにかあったらしいようだ…。

話を聞いてみるしかない。

河原のベンチに座りながら、クマの話を聞くことにした。

自分は、やはり撫子もいいが、戦場ヶ原さんの傍若無人ぶりも捨
てがたいとクマに論じた。

寛容力が高まった。

「センサー…、なんの話をしてるクマか…?」

クマは呆れながら、改めて、なにが起きたかを話した。

… 数時間前…

クマはジュネスでの仕事で、売場のベッドの上で居眠りをしてし
まい、陽介にこっぴどく怒られてしまった。

「うがああー！！おめーは、なんで、いつも売場のベッドで居眠りこいてんだよ！！これで、何度目だ！！」

バイトリーダーの陽介は、激しく激怒している。
クマはたじたじになった。

「ごっ、ごめんクマ！ヨースケ！もう、売場のベッドで居眠りしないクマ！！今度から、マッサージチェアで居眠りするクマ！！」
「居眠りをするな！！って、言っただよ！！」

陽介は口からガルダインを発射して、クマを吹っ飛ばした。
少し頭の血を抑え、陽介は髪を撫でながら冷静さを取り戻した。

「とりあえず…、次、居眠りこいたら、もう本気のマジで出ててもらうからな…」

「わ、わかったクマよ…」

陽介はクマに顔を近付けて、そう警告した。

だが数分後、クマはマッサージチェアで居眠りをしてしまい、激怒した陽介からつまみ出されてしまった…。

そして、鮫川をさ迷い歩き、今に至ると…。

「というわけクマ…」

クマが一部始終を話したが、どう考えても、お前が悪いやんけ…
としか思えなかった。

「オロローン！クマの帰る場所なくなったクマー！」

…！
陽介は頭を掻きながら、クマを許した。

「ウホホーイ！ヨースケ、ありがとクマー！」
「うわぁ！抱きつくな！バカ！チクチクすんだよ！」

クマは嬉し泣きしながら、陽介に抱きついた。
どうやら、仲直りに成功したようだ…。
やれやれ…と、自分は二人を見て一息吐いた。

ちょうど、午後になり腹が減ったのでフードコートで昼食を摂ることにした。

エレベータになり、フードコートに到着すると…。

！？

千枝と雪子が居た。
しかし…。

「ああーっ！もう、なんで、あんたはいつつも、そうなのよ！？」
「千枝こそ、なんなのよ！？」

千枝と雪子がテーブルに座りながら、激しく口論している。

…。
…。
なんなんだ…、今日は…。

落ち着け…と言いながら、二人に近寄った。

「あっ、リーダー」

「あら、いつのまに」

二人は口論をやめて、自分に首を向けた。
すると、千枝が自分に迫った。

「ちよつと、聞いてよ！リーダー！？雪子ったらね、ひどいのよ！
」？
」

千枝が雪子に指をさして、事情を語り始めた。

「夏休みの読書感想文で読む本は、なににするか？って話をしてて、
あたしは『化物語』にしようって言ったたら、雪子は『傷物語』にす
るべきよ…、って言うのよ！！信じらんない！！」

千枝がそう言つと、雪子が立ち上がった。

「だって、『傷物語』は『化物語』の前日談なのよ！だから、順番
を追つて『傷物語』を読むべきよ！いきなり『化物語』を読んで感
想文書くのは、ジョジョの奇妙な冒険の第三部を読まないで、第四
部を読むようなものよ！？」

化物語はともかく、ジョジョは第一部から読めよ…。

「それは解るけど、『化物語』はアニメ化してるから、アニメを見
れば感想文を書くの楽じゃん！」

「それ読書感想文じゃなくて、アニメ感想文よ！」

「バレなきゃイカサマじゃないっての！」

「千枝、あんた、卑怯よ！卑怯者！」

「雪子がわからず屋なだけよ！」

千枝と雪子が激しく口論している…。

自分の入り込む余地がない…。
さて、どうするか…。

「へい…、ベイビー達、僕のことと争わないでくれ…とジョークを言う。」

千枝に肉を渡して、落ち着かせる。

雪子に鼻眼鏡を渡して、落ち着かせる。
逃げる。

…と選択肢が出た瞬間、千枝と雪子が自分を睨んだ。

「リーダーはどっち!？」

選択する余地を与えられる間もなく、同時プッシュで問い詰められた。

千枝、雪子が自分に鋭い眼光を浴びせた。

なので、こう言うことにした…。

確か、読書感想文の本は…、学校から指定された図書以外で、感想文書くのはダメじゃなかったか?と…。

「はっ…!」

「あっ…!」

その言葉に千枝、雪子の時間が止まった。

確か、『化物語』と『傷物語』のどちらも学校から指定されてなかったぞ…。ていうか、ライトノベルで読書感想文を書いていいのか?と、椅子に座って膝を組みながら二人に言った。

まさに番長!

千枝と雪子に沈黙が流れる…。

しばらくして…。

「雪子、ごめん…」

「いいえ、あたしこそ…、ごめん…」

千枝と雪子は、手を取り合って仲直りした。

ふはは…、二人とも、『走れメロス』で感想文を書くんだな…と
言って、自分はジュネスのフードコートから去った。

午後になり、商店街を歩いていると…、そういや、さっき、ジュ
ネスで昼食を摂るのを忘れていたことに気付いた。

ちよつどよく、愛屋が目の前にあつた。

ここで昼食を摂るか…と思い、店に入った瞬間…。

「だから、なんで、そうなんだよ！」

「うるせえな！」

店内で、一条と長瀬が喧嘩をしていた…。

ナンナンド、キョウハ。

呆然と二人を見つめっていると…。

「あつ、お前！」

「いいところに来た！」

自分の存在を、二人に気付かれた。

鬼気迫る表情で、一条が自分に近付き…。

「聞いてくれよ！俺がDSソフトの『ラブプラス』を買おうぜって

言ったら、長瀬の奴、いや、それより『アイマス』買うべきだって言うんだよ!!」

オマエラ…。

自分は冷ややかな目で、二人を見つめた。すると、長瀬が立ち上がった。

「オトコは黙って、アイマスに決まってるだろうが!!なあ!」

長瀬は自分に意見を求めている…。

うつ…、うん…と適当に首を縦に振った。

「アイマスはいいけど、DSだと一人、男の子が混じってるじゃねえかよ!!」

「それがいいんじゃないかよ!」

「…ツツ!?!」

一条の指摘に対して、長瀬は非常にいい笑顔で言った。

「『ラブプラス』は五千円払えば、彼女がゲット出来るんだぜ!萌えるじゃねえか!!」

「お前…、んなこと言ってるから、さとな…」

「それ以上、言うな!」

なにか言おうとした長瀬の口を、一条は必死に掴んだ。ぐぐぐが…、と長瀬はもがいている。

「お前はどっちだよ!?!」

一条が自分に意見を求めた。

なので、じじじじじじとした…。

アマガミ、買え。

一条、長瀬は鳩が豆鉄砲を食らったか、仮面ライダーディケイドのテレビ版最終回を観た時の視聴者のような顔をした。

「アマガミだと…」

「俺たちは、重大なことを見落としていた…」

一条、長瀬は呆然となった。

ふっ…、仮面優等生の絢辻さん、ポツチャリ幼なじみの梨穂子に萌えてる…、BOY…と言い残して、自分は愛屋から立ち去った。

続く…!!

夏色番長編（後編…、そして…、伝説へ）

前回までの話。

菜々子と堂島が喧嘩をし、陽介とクマも喧嘩、千枝と雪子も喧嘩、さらには一条、長瀬も喧嘩をしていた！
歩く先々で、喧嘩が起きる現象に番長はお疲れ気味だぜ！！
果たして、この結末はどうなるのか！？

以下、本編！ゆっくりよんでいってね！

2011年8月某日（水） 曇り

昼間

…。

また、昼食を食べれなかったことに気付いた。

さつきから、ドタバタに巻き込まれすぎて、腹が減っている。

完二の家の前を通り掛かると…。

「ああー！！もううんざりなんだよ！！」

！？

なんと、完二が家から飛び出していた。

まさか…。

「あつ！先輩！！」

完二が自分に気付いた。

大体、事情は察してはいるが、念のため、なにがあったを聞くこ

とにした…。

「あっ…、実は、おふくろと喧嘩しちまいました…」

MATKAYO!!

自分はげっそりした。

ちなみに、原因はなんだと聞いた。

「いやー、1週間、昼飯がそーめんなんで、つい腹が立って…」

そういう完二の襟首を掴んで、そーめんをなんだと思っているんだ!!と鬼気迫る表情で叫んだ。

空腹のあまり、ついてカツとなった…。今は反省している。

「ひいひいー!!」

自分の勢いに、完二は怯えた。

こうして、完二は素直に母親に謝った。

ついでに、完二宅でそーめんをご馳走になり、空腹を満たした。

ふうー、腹ん中がパンパンだぜ…、と言いながら、八十稲羽駅前を歩いていると…。

「あっ…、なんだ、あんたか…」

あいが目の前に現れた。

どうやら、今から沖奈駅前で買い物に行くようだ。

「ちょうど良かった…。ねえ、どうせ暇でしょ、付き合ってよ」

と、あいは誘った。

たぶん、間違いなく荷物持ちをやらされるのだろうな…。

断ったら、とんでもないことになりそうだから、渋々、引き受けようと観念していると…。

「あつ、先輩だー」

！？

なんと、駅前にりせが現れた。

あいの表情が一瞬で曇った。

りせは自分の左腕を引っ張って…。

「ねえ、先輩ー。今から、沖奈市に最近出来たシャガールのフェロモンコーヒーでコーヒーブレイクしないー？」

と誘われた。

すると、今度はあいが自分の右腕を引っ張った。

痛い！もげる！もげる！

「はあ？なに言ってるの？彼は、今からあたしと買い物に行くんだから、邪魔しないで！」

あいは眉をしかめて、りせに言った。

すると、りせがムツとなって…。

「へえー、とか言っつて、先輩に荷物持ちさせるんでしょー。先輩、カワイソー！こんな性悪女に捕まっつてー」

「なによ、あんたには関係ないでしょ！？引っ込んでなさいよ！！」

「あんたが、引っ込んでなさいよ！」

りせ、あいは力強く、自分の両腕を引っ張った。

ぎゃあああー！

自分の脳裏に、牛裂きの刑を執行される罪人の姿が思い描かれたくらいに痛い。

やめろ…、二人して、俺にレイジング・オックスを掛けるな…と苦痛の表情で言ったが…。

「彼は、あたしの荷物を持つことに幸せを感じるんだから、引っ込んでなさい！小物アイドル！！」

「うっさいわね！先輩は、りせとフェロモンコーヒー飲んで、フェロモン放つのに幸せを感じるんだから！！」

あい、りせは綱引きの要領で更に自分の腕を引っ張る。

ぎゃあああー！自分は、どちらにも幸せなど感じないから離してける！と叫んだ。

すると…。

「あら…？なにやってるの…」

…！？

なんと、数時間前にジュネスの屋上で千枝と喧嘩していた雪子が駅前に現れた。

彼女は、あいとりせから腕を引っ張られる自分を見て、ポカーンとしている。

ちようど良かった…！これをやめさせてくれ…！と、雪子に言う…。

「えっ…、腕を延ばしてもらってるんじゃないの…？ゴルゴムー

！つて…」

自分はゴム人間に憧れてなどいない！しかも、ゴムゴムだろ！？と雪子に叫んだ。

すると…、雪子は手をポン！と叩いた。

「あつ、そつだ！今から、沖奈市に蟹食べに行かない？」

お前はなにを言っているんだ？

そつ言つて、雪子は自分の右足を掴んで引つ張つた。

うぎゃあああ！まさかのACCIDENT！

「ちよつと！あんた、急に現れてなに言つてんの！？彼は、あたしと買い物に行くのよ」

「違うわよ！先輩はあたしと一緒にフェロモンコーヒーを飲むの！いくら、雪子先輩でも許さないから！」

雪子の予想外のACTIONに、あいとりせが更に力強く両腕を引つ張つた。

うぎゃあああー！もげる！

すると、右足を引つ張る雪子がハツとした。

「あつ…、りせちゃん居たんだけ、その隣の人、誰？りせちゃんの親戚？」

「なんか、雪子先輩、最近ポケ役が板についてきてない!？」

りせはガビーン！となった。

自分は口から、うめき声ではなく泡を吹き始めた…。
するど…。

「ちよつ！あんたら、なにやってんの！？」

…！

ジュネスの屋上で雪子と口喧嘩していた千枝が現れた。助かった…。

自分は涙を流した。

「雪子も、りせちゃんもやめなさいよ！」

千枝が、自分の両腕、右足を引っ張るのを止めに入った。

だが…。

千枝はハッ！とした。

「あつ、そーだ、リーダー！今から沖奈市に『聖龍伝説』のブルーレイディスク買いに行かない？」

と言つて、千枝は自分の左足を引っ張った。

うぎゃあああ！バカが増えた！！

八十稲羽に、自分の断末魔が響き渡った。

この光景は、着ていた服が破れるまで続いた。

夜 晴れ

ノースリーブになったシャツに、ホットパンツになったズボンを着たあらゆる姿の自分が帰宅路を歩く…。

うつ、うつ…、と今日は散々だ…と、女子の先輩から嫌がらせを受けたあとの女子中学生みたいなテーションで帰宅すると…。

「お父さんのバカ！」

「親に向かって、バカとは…」

菜々子と堂島が、まだ喧嘩していた。

…。

今日は、散々、他人の喧嘩に振り回されたため、HPとSPが尽き、自分は血を吐いて倒れた。

これには、菜々子と堂島がビックリした。

「あつ！お兄ちゃんが！」

「あつ、おい！どうした！」

菜々子と堂島は喧嘩をやめて、玄関に倒れた自分に駆け寄った…。

数時間後…。

…。

しばらくして、気がついた…！

どうやら、自分は居間で横になっているようだ…。

そして、目を開くと…。

「センサーが目を覚ましたクマ…！」

！？

目の前にはクマが居た。

起き上がってみると…。

「あつ！大丈夫か！相棒！」

「リーダー、大丈夫？」

「怪我はない？」

「大丈夫ツスか？先輩！」

「先輩…、本当に大丈夫？」

なんと、陽介、千枝、雪子、完二、りせ、クマが来ている。

「どうやら、自分が倒れたと聞いて駆け付けてくれたようだ…。」

「わざわざ、来てくれたのか…？と言いながら、自分は立ち上がった。」

「つたりめーだろ！」

「そうだクマ！センサーには、ご恩があるクマ！」

陽介とクマは笑った。

「リーダー、本当に大丈夫？」

「無理しないでね」

千枝と雪子が優しく自分を気遣った。

「先輩！お裾分けのそーめん持ってきたんで、これで元気出してください」

「バカ完二！そんなんで元気出るか！先輩ー、お豆腐持ってきたから、元気出してー」

完二とりせが、そーめんと豆腐を自分に渡した。

みんな…と、うるうるしていると…。

「お兄ちゃん…」

！

菜々子と堂島が自分の目の前に現れた。

「すまん…。今日は、なんかドタバタさせちまって…」

「お兄ちゃん、ごめんなさい…」

堂島と菜々子は、申し訳なさそうな顔をして自分に謝った。

…。

それに対して、自分は、二人とも謝る相手が違う…と指摘した。

「…！」

「…！」

堂島と菜々子は、ハッ！となった。

そして、二人は顔を見合わせた…。

「菜々子、すまん…。勝手にケーキ食っちゃって…。しかも、少し大人げない真似しちまったな…」

堂島は膝を曲げて、菜々子と視線を合わせ謝った。

「ううん…、菜々子の方こそ…、ごめんなさい…。バカとか言ってる…」

菜々子は、まっすぐな目で堂島に謝った。

すると、堂島は菜々子の頭を撫でて…。

「ハハハ…、気にしてなんかいないさ…。それより、明日、お詫びと言っちゃなんだが、ジュネスにケーキ買いに行こうな」

「うん！」

どうやら、この二人もなんとか仲直り出来たようだ…。
ふふっ…と自分は笑った。みんなも、二人を見て笑った。
これで一件落着…と思っていると、陽介がふと自分に顔を向けた。
そして…。

「ていうか、お前のその服装なんだ？随分、ラフだな…」

陽介は、ビリビリのノースリーブになったお気に入りのシャツ、
ホットパンツになったズボンを纏う自分にツッコんだ。

千枝、雪子、りせはビクッ！となった。

自分が必死に堪えていたなにかが、陽介の一言により一瞬で破壊
された。

数分後…

自分は自室に鍵を掛けて、引き籠もった。

「悪かった！俺が悪かったから！」

「リーダー！服、ビリビリにしてごめんなさいってば！」

「意外と似合ってたから出てきて！」

「お願いだから、出てきて！先輩！！！」

陽介、千枝、雪子、りせが謝りながら自室のドアを必死に叩いた。

完二、クマ、菜々子、堂島は呆然としている…。

こうして、貴重な夏休みの最後の瞬間が過ぎていった。

そして…。

2011年9月1日（火） 晴れ

朝

今日から新学期だ…。

それにしても、今年の夏はいろいろあった。

思い出すだけでも、頭痛がする…。

居間に顔を出すと、菜々子が居た。

「お兄ちゃん、おはよー！」

菜々子にご機嫌のようだ。

宿題、忘れてないよな？と菜々子に言った。

「うん！お兄ちゃん達が手伝ってくれたんだもん、忘れてたりなんかしないよ」

そうか、と菜々子の頭を撫でた。

菜々子は、えへへ…と顔を赤くして笑った。

途中まで、菜々子と一緒に通学路を歩いた。
そして、一人通学路を歩くと…。

「ラブプラス、やべえよ…」

「ああ、一瞬で夏休み終わっちまったよ…」

「でも、この充実感はなんなんだよ…」

「ああ…」

一条と長瀬が、ゲツソリした顔をして登校していた。
結局、それを買ったのかよ…と思った。
そっとしてお…。

「あっ…」

今度はあいが現れた。

自分の脳裏に、服がビリビリ事件が思い出される。
すると、彼女は…。

「あっ…、あの…、こないだは…、ごめん…」

…！

彼女は普通に謝った。

正直、ちよつと驚いてしまった。

いや、気にしてないと笑いながら言つと…。

「なっ、なら良かった…。じゃ、じゃあね…」

あいは走り去って行った。

…。

ふっ…と微笑みながら、再び、歩き出す。

「ちーッス、先輩ー！」

「おはよー、先輩ー！」

完二、りせが挨拶して通り過ぎて行った。

おはよう、と二人に挨拶をしたあと、陽介、千枝、雪子と玄関で会った。

「やあ、みなさん…」

学校に着くと、謎の少年探偵の白鐘直斗が校門の前に立っている。どうやら、まだまだ波乱が起きそうだな…と自分は思った。

そして、教室に着くと…。

夏色番長編（後編）…、そして…、伝説へ）（後書き）

次回、最終回…！

俺達は生きている編

2011年9月1日(火) 晴れ

朝

みんな！初めまして、今日から、この学校に転校してきた『主人公』です！

前の学校では、ハム子と呼ばれてました！

みんな！よろしくね！と、あたしは転校初日に教室で挨拶をした。小悪魔テイストで自分らしさを演出！この挨拶で、みんなのハートを鷲掴み…のはずだけど…、みんなシーン…としている。

あらあら…、どうしたのかしら…。

そうあたしが戸惑っていると…。

ハッ…！

一人の精悍な顔立ちの堂々とした風貌の少年が手を挙げて立ち上がった。

その堂々とした銀色の髪の毛の少年は、まさに『俺が番長だ…』と言わんばかりのオーラを放っている。

そのやけに、長い襟…。

前あけっぱの学ラン…。

なんて、魅力的…。

あっ…、いや、ダメよ！あたしが一目惚れだなんて…。

すると…、その番長ばい少年はこう答えた…。

出る作品、間違ってますよ…。

彼にそう言われ、あたしはなにかに気付いた…。

教室の窓から、ふと街並を見た。

あれ…？ここ辰巳ポートアイランドじゃない…。

ていうか、制服ちがっ…。

ていうか、ここ…、月光館学園じゃなく…、八十神高校…！？

ていうか、よく見たら、日付が、とつくに2年と5ヶ月過ぎてる

ー！！

あーっ！？あたし、出てくる作品間違えたー！

いっけなーい！あたしのドジ！とあたしは自分で、自分の頭をこ
づいた。

はずかしーっ！と叫びながら、あたしは教室から出て行った。

以下、ここからペルソナ4主人公目線。

作品を間違って登場した謎の少女八ム子に、自分、陽介、千枝、
雪子はポカーンとした。

「待てよ！最後の最後の締めが、他作のキャラかよー！」

「いくら、リメイクが発売されるからって！！締め持ってかれるってなによー！！」

「ていうか、4で続編出さないよー！アト スー！」

陽介、千枝、雪子が立ち上がって叫んだ。

かなり、三人は取り乱している…。

落ち着け、と言った。

「えーつとお…、ところで、里中さんと、天城さん…。さっき、提

出してくれた読書感想文についてだけ…」

「へっ！」

「えっ？」

教壇に立つ柏木はいきなり千枝と雪子の名を呼んだ。

読書感想文についてのことだそうだ…。

読書感想文…？まさか…。

柏木は二人の読書感想文を取り出して、こう言った。

「里中さんは『とらドラ！』で、天城さんは『狼と香辛料』の感想文…。二人ともおー、ライトノベルで感想文書いちゃダメよ…」

ガズン！！

自分は机に頭を強打した。

『P4 クライマックス番長 part 2 花村とクローバー』人
がテレビに落ちる瞬間を見てしまった…、夏』

ファンフィクション作品

原作

『ペルソナ4』

キャスト

メイン出演

花村 陽介 (ジライヤ、スサノオ)

里中 千枝 (トモエ、スズカゴゼン)

天城 雪子 (コノハナサクヤ)

巽 完二 (ロツテンマオウ)

久慈川 りせ (ヒミコ)

クマ (キントキドウシ)

白鐘 直斗

サブ出演

堂島 菜々子

堂島 遼太郎

キツネ

一条 康

長瀬 大輔

海老原 あい

小沢 結実

中島 秀

柏木 典子

大谷さん

イゴール

マーガレット

生田目 太郎

足立 透

ガソリンスタンドの店員

ゲスト

久保を彷彿とさせる感じの根暗そうな男

熱甲蟲 (トムキャットレッドビートル)

エレキング

大食い大会実行委員会

鯖に当たった少年

その母親

井の頭公園 ジロー

中華料理店愛屋店主

ラ カのフィギュア

モヒカン二人

うなぎを奪われた女性

スパオウ

フリーズー

p i o

すし屋の店主

河野剛史

田中社長

マークのついたキャラは今作品のオリジナルキャラ、あるいは他作キャラです。

当たり前ですが、原作ゲームには登場していません。

サブ出演ペルソナ

マールさん

イツポンダラ

ベルゼバブ

ジャックフロスト

ジャックフロスト

ネコシヨウゲン

キングフロスト

友情出演（P3メンバー）

伊織 順平（テレット）

岳羽 ゆかり

桐条 美鶴

真田 明彦（プロテイン先輩）

山岸 風花

天田 乾

特別出演

ペルソナ3、P3P男性主人公（オルフェウス）

P3P女性主人公（ハム子）

アイギス

テーマ曲

『Pursuing My True Self』
『Reach Out To The Truth』
(ペルソナ4サウンドトラック収録)

挿入歌

『オレンジ』

歌：里中千枝&久慈川りせ

(テレビアニメ『とら 』ラ』エンディング主題歌)

『トモエさんの主題歌』

歌：自称特別捜査隊 (CV・ペルソナ4主人公、花村陽介、里中千枝、天城雪子、巽完二、久慈川りせ、白鐘直斗、クマ)

(マヨナカテレビアニメ『トモエさん』主題歌)

『世界に一つだけの肉』

『食間飛行』

歌：里中千枝

『クマ』

歌：里中千枝&天城雪子

『エキセントリック少年ジュネスのテーマ曲』

『ああ、エキセントリック少年ジュネス』

歌：エキセントリック少年ジュネス隊(CV・花村陽介、ペルソナ4主人公、里中千枝、巽完二、白鐘直斗)

『千枝ちゃんのパーフェクトさんすう教室』

歌：里中千枝 feat.クマ

当たり前ですが、原作ゲームと粉みじんに関係ありません。

『Haven』

『Never More』

(ペルソナ4サウンドトラック収録)

『Burn my Dream』

『キミの記憶』

(ペルソナ3サウンドトラック収録)

参考資料

山 純一作品集『ウホツ…、いい たち』

ガムチパ ッレスリング

Wikimedia

ジヨ ヨの奇妙な冒険

同人誌ペルソナ4文集

『落ち着け』（四目内書房刊）

「我輩は番長である」

「走れジュネス」

「肉の踊り子」

「注文の多い天城屋」

「ああ、ウホウ」

「八十の瞳」

「マズイ門」

「八十墓村」

「罪と罰」

「フランダースの番長」より引用

カウントダウンマヨナカTV!!

空我くわがによる物理変化

ポトピア殺人事件

ラブ ラス

アイ ルマスターDS

アマミ

化 語

傷物

と ドラ!

と香辛料

P4 設定資料集

P4〜キリノアムネジア〜 (公式ノベライズ作品)

P4〜Your Affection〜 (公式ノベライズ作品)

ペルソナ3

ペルソナ3 Fes

ペルソナ3ポータブル

スペシャルサンクス

ジュネス

天城屋旅館

八十稻羽警察署

MOEL石油

デステニーシー

八十稲羽市のみなさん
八十神高校のみなさん

時価ネット高田

ペ シしそ味

高級すし屋、顎門あでと

劇場版仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー

NORISUKE

ベツ

月光館学園

沖奈市

シヤガール

桐条グループ

辰巳ポートアイランド

タルタロス

作者をテレビに突き落とさずに、タルタロスに置いていかずに最後まで読んでくれた読者の皆様方…、そして、これからの…、ペルソナ使い達へ…。

制作

マヨナカテレビ
小説家になろう
八十稲羽市教育委員会

制作協力

辰巳ポートアイランド
桐条グループ

脚本、演出、監督

霧紙子

提供

ジュネス
時価ネット高田

主演、総監督

ペルソナ4主人公（イザナギ、伊邪那岐大神）

蛇足編

2011年9月1日（火） 晴れ

昼間

辰巳ポートアイランド。

かつて数人の若者達が死という概念と、自分達の未来を賭けて戦った月光館学園の屋上に、一人の金髪の少女が立っていた。

ここは、辰巳ポートアイランドの街並みと海がよく見える場所だ。

「」

そこで彼女は風に髪の毛をなびかせながら、儂げに屋上から見える街の景色を眺めていた。

なにかを、昔のことを思い出しているようだ…。

すると、ひとつの強い風が彼女に吹いた。勢い良くブワツ！と風が、彼女の目を閉じさせた。

そして…。

『ただいま…』

…！！

彼女は驚きながら目を開いた。

そして、辺りをキョロキョロと見渡す。

「さっきの声…！」

彼女の耳元で一瞬、聞きなれた懐かしい声がした。

気のせいだったのか…？それとも…？

耳に一瞬だけ響いたその声のせいか、彼女の目から急に涙があふれた。

「…おかえりなさい…」

彼女…、アイギスは目を潤ませて、一瞬だけ聞こえたその声にそう答えた。

今日も空が、よく晴れている…。

『P4 クライマックス番長 part 2 花村とクローバー 』人
がテレビに落ちる瞬間を見てしまった…、夏』

f i n

おまけ

制作時のメモですので、読みたい方だけ。

掲載話メモ

・オープニング編 09/06/24
：クライマックス番長が手探りスタートだったんで、ゲーム本編のオープニング曲をイメージした感じに。

・罪と罰編（ドラマCDネタバレ注意） 09/06/24
：ドラマCD聴いた後のテーションで書いた完全に私事な反省すべき感想文…。

・ウホツ…、いい番長編 09/06/25
：作者が好きなアニメ、カブトボーグVxVのエピソードを元に…。これ、インスピレーション難しくてすみません…。

6
・身も心も、おコメになっちまったのかよ！！編 09/06/2

：同じくカブトボーグより…。評価欄がペシしそで埋まったとき、やっちまったぜ！と思った…。

・目覚めろ！その魂！編 09/06/27

・クライマックス番長でのレンジャーネタの再利用…。ちなみに、私はアギト世代…。

・このわざとらしいしそ味…！編 09/06/27
・ペ シしその人気にあやかった…。09年の9月の末日の現在でも、未だにスーパァで見かける…。

・俺がなにをしたっていうんだ…編 09/06/28
・雪子が無言でエレキングをビンタする絵を想像したら吹いたので書いた…。

・食えば…、食うほど…、太る…！編 09/06/28
・今回ゲーム中の6、7、8月をベースにしてたから、直斗君の出番少なかつたなあ…。次回作は、直斗君メインにしたいな！。

・陽介、T O L O V E るっ！？編 09/06/30
・陽介と千枝ちゃんの掛け合いが好きだ…。

・ペルソナの奇妙な冒険 第四部 くイザナギは砕けないく編 09/06/30
・雪子にボケをやらせると、みんなツツコミに回るよね…。

・BGMつて大切だよね編 09/07/02
・ピューと吹くジャガーさんの相撲の回を元に作成。番長の恐ろしさは、どんなキャラでもカップリングが立つことさ！

・リボンシトロン編 09/07/04
・ファ タCMより。ちなみに、地味にプロテイン先輩こと、真田先輩が登場。

・事情により没にしたシリーズ編 09/07/14
・要望があれば、続編あります…。

・テスト内容、地味に難しくね？編 09/07/21
・ダウンタンのコントより…。かなり力技だった…。

・日曜夕方6時半は憂鬱テレビタイム編 09/07/22
・これも力技だった…。マールさん、そんな好きじゃないけど、ついつい出してしまっ…。

・イゴさーん！！編 09/07/25

・力技パート3…。今回、裸、飲料水、マヨナカテレビネタが多かつたなあ…。

・番長文学集編 09/07/29

・力技パート4…。書いた自分でも難解な部類の完成度…。

・それ以上いけない編 09/07/30

・『孤独のグメ』より…。解る人、居たかな…。

・振り返れば番長が居る…編 09/07/31

・公式の小説で明らかになっただけど、陽介、ギャルゲーやってるっぼいんですよね…。

・スイカ！もぎれ！ビーム編 09/08/02

・再利用の再利用…。例えば、生田目さん、一番不幸なキャラクターだよな…。

・キミの記憶編 特別編 09/08/02

・今回、一番の問題作だったかなー（笑）番長と同じプレイヤー操

作のキタロー君のキャラクター造形が難しかったため、石田彰さんの声からイメージを作り、番長とは違う天然キャラにしました。イメージを壊してしまつたら、本当にすみませんでした。

・幽霊が怖いんじゃない。祟られるのが怖いんだ編 09/08/03

・ジャガーさんの心靈写真の回を元に…。実際の番長の中学時代、どうだったんだろう…。

・肉で銀河が救えるわけないでしょ編 09/08/05

・今回、一番苦労した(笑)

・オシヤレ番長編→エンドレス仕様→ 09/08/07

・オシヤレ番長再利用。オチが収拾つかなくて、夢オチに…。

・番長VS大悪党編 09/08/08

・本当はもつと長編になるはずですが、さすがに難しかったので、あの端折り展開に…。

・すべて壊し、すべてを繋げ!編 09/08/08

・劇場版ディケイドのせいで、ティション上がった…。えーと、面白かったです劇場版ディケイド…。TV版、最終回は絶対許さない。

・肉をかける少女編 09/08/12

・時をかける少女を見ながら書いてたら、こうなっちゃったぜ!な話…。今シリーズ、千枝ちゃんを最多でネタにした。

・事情により没にしたシリーズ編2 09/08/17

・カップリングは人の考えや好みの問題なので、ファンフィクショ

ンとはいえ、カップリング的な表現は読者の皆様方のニュアンスに任せるようにしています。ですが、この作品の番長はあくまで菜々子一筋って設定でお願いします…。

・緊急マヨナカ特番編《特別編》09/08/21

・まさかのP3リメイクに書いた時事ネタ…。11月発売ですので、どうなることやら…。あと、ペルソナ2のリメイクは内容的な理由で難しいそうです(ナスなどが)

・オープニング編《特別編》09/08/22

・P3P記念第2弾、セルフパロディ…。真田先輩のふんどし姿、見てみたいッス。

・若さって若さってなんだ！？諦めないことさ！！編 09/08/30

・今回のシリーズは更新ペースが安定しなくて、すみません…。8月終了予定だったのに、この回から期間延期になりました…。

・さらば、ペルソナレンジュアイ…編(生田目編完結) 09/09/06

・ペルソナレンジュアイに終止符を打つべく書かれた完結編でしたが、正直、レンジュアイネタが渴望してたため、あんまり出したことないコミュキャラを出してみることにした…。正直、收拾つかなかった(笑)

・さあ、お前の罪を数える編 09/09/21

・本当は留置場でラストシーンのはずでしたが、ドラマCDvol.1にて陽介がまだバイクのため貯金してると言っていたので、このような感じに…。本当に、夢オチ多くてすみません…。

・ペルソナW編（特別編） 09/09/21
・運営さん、ネタにしてごめんなさい。P4からP3Pにゲストとして、柏木先生が登場しますので要チェックや…。

・パロスペシャル編 09/09/24

・歌パロ好きですが、難しいです…。本当は、完二とのしりとりもあつたんですが、ウホネタと下ネタが酷くなりすぎてカット…。

・夏色番長編（前編） 09/09/24

・執筆時に『化物語』の掛け合いに影響を受けてしまい、いろいろと挑戦してみたが、逆にパロディ多くなりすぎた！。

・夏色番長編（後編）…、そして…、伝説へ） 09/09/24

・この回の終盤は原作のゲームの9月1日に合わせるため、ちよつと端折りました…。最終回前の回なのに、やつつけになつてしまい申し訳ありません…。

・俺達は生きている編

・今回のシリーズは夏テーマで、ポータブルの登場もあわせ、夏らしいイメージのあるP3を絡ませました。ので、どうせならということ、今シリーズの最後をP3のハム子、キタロー、アイギスで締めさせてもらいました…。しかし、ハム子ってひどいあだ名だな…（笑）

・スタッフロール&蛇足編

・このスタッフロールはお遊びですが、『Reach Out to The Truth』を聴きながら製作したら、自然としみりしてしまいました…。本当に、ペルソナ4は大好きな作品です。クライマックス番長と合わせ、多くの感想、評価、応援を頂き、本当にありがとうございます。まだまだ書きたいネタがたくさんあ

りますので、次回作もよろしくお願いいたします！

では、このスペースをお借りしての長文失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433h/>

P4 花村とクローバー ~人がテレビに落ちる瞬間を見てしまった...、夏~

2010年10月9日03時36分発行